
も く じ

発刊に際して	——	1
はじめに	——	2
I 研究の目的・方法	——	5
II 作文指導と作文教材	——	7
1 作文指導で育成したい言語能力	7
2 言語能力と作文教材	9
3 作文学習への意欲の喚起	11
4 児童の実態	13
III 作文教材とその考察	——	15
1 作文教材の活用	15
2 教科書各学年の主な作文教材一覧	16
(1) 第1学年(2) 第2学年(3) 第3学年(4) 第4学年(5) 第5学年(6) 第6学年		
3 望ましい作文教材	28
IV 作文の年間指導計画の作成	——	31
1 基本的な考え方	31
2 作文の年間指導計画作成の手順	32
3 各学年の年間指導計画例	35
(1) 第1学年(2) 第2学年(3) 第3学年(4) 第4学年(5) 第5学年(6) 第6学年		
4 年間指導計画作成上の留意点	60
V 作文教材の開発と指導法の工夫	——	61
1 筋道を考えて書く	61
(1) 第1学年の教材と指導 読解から作文へ 「はたらくじどう車」		
(2) 第2学年の教材と指導 よく考えて 「手の はたらき」		
(3) 第3学年の教材と指導 読解から作文へ 「あげはちょうの身の守り方」		
(4) 第4学年の教材と指導 考えをはっきりさせて 「アルコールランプの使い方」		
(5) 第5学年の教材と指導 自分について考える 「ほくたちわたしたちを考える」		
(6) 第6学年の教材と指導 友達について考える 「友達」		

2 豊かに感じたことを書く …………… 118

- (1) 第1学年の教材と指導 想像をふくらませて 「え本をつくろう」
 (2) 第2学年の教材と指導 思ったこと感じたこと 「かん字のテスト」
 (3) 第3学年の教材と指導 楽しく遊んだこと 「ジャングルたんけん」
 (4) 第4学年の教材と指導 中心点が明確になるよう工夫して 「ポートボール大会」
 (5) 第5学年の教材と指導 多面的に見る 「とちの木の1年」
 (6) 第6学年の教材と指導 豊かに想像して 「2010年への旅」

執筆分担

中島 紀子 (東京都立教育研究所教科研究部長)

I, IIIの1・3, IVの1・2・3・4, Vの1の(1)(2)・2の(1)(2)

清水 朋子 (東京都田無市教育委員会指導主事)

II, Vの1・2

小川 裕子 (東京都東村山市立北山小学校教諭)

IIIの2の(4)(5), IVの3の(4)(5), Vの1の(4)(5)・2の(4)(5)

小林 一郎 (東京都文京区立誠之小学校教諭)

IIIの2の(3)(6), IVの3の(3)(6), Vの1の(3)(6)・2の(3)(6)

井口 和子 (東京都練馬区立春日小学校教諭)

IIIの2の(1), IVの3の(1)

I 研究の目的・方法

1. 研究の目的

(1) 作文の授業時数

教育課程の基準の改訂の度に、国語科では、作文力育成の必要性が叫ばれる。平成元年に告示された新学習指導要領においても、同様に作文力育成は重視されている。

小学校国語科では、従来作文を主とする指導については、各学年とも「国語科の総授業時数のうち10分の3程度を充てるようにする」としてきた。新学習指導要領では、作文を主とする指導について「第1学年から第4学年までは年間105単位時間程度、第5学年及び第6学年では年間70単位時間程度を配当するようにする」としている。このことは、作文の指導時数を明確に確保することにより、作文力の向上を図ろうとするものにほかならない。

学習指導要領の改訂に伴う国語科の総授業時数と作文授業時数は、次の通りである。

授業 時数 学年	国語科の総授業時数		作文授業時数	
	従来	改訂	従来	改訂
第1学年	272	306	82	105
第2学年	280	315	84	105
第3学年	280	280	84	105
第4学年	280	280	84	105
第5学年	210	210	63	70
第6学年	210	210	63	70

上の表のように、作文指導の重視は、作文授業時数の大幅な増に示される。各学年で作文指導をいかに充実していくかが、新しい国語科を実践する小学校の担う大きな課題である。

(2) 作文指導上の問題点

作文指導の重要性は十分理解し、その指導を充実しようと工夫している指導者は数多い。

一方、依然作文力の向上が国語科教育の課題であることも変わらない。作文指導を進める上で何が問題点となるのであろうか。

その一つは、作文教材である。普通は、教科書の作文教材を使用して作文指導を進める。しかし、児童が作文を書く場合、殆ど児童自身の身近な題材を取り上げる。勿論、児童の生活そ

のものとは限らないが、少なくとも児童にとって考えたり感じたりできる題材で書くのである。

教科書の作文教材は、当該学年の育てたい作文力を明確に示しているし、作品としての完成度も高い。それだけに、必ずしも児童にとって身近な題材でないことも多い。

深く心を動かした体験を題材にした教科書の作文教材を読むと、まさに感動的である。素晴らしい文章であり、児童はこのように書きたいと願う。ところが、そうした感動体験が児童自身にないのである。

意見文や感想文についても同様である。立派な意見文・感想文が教材として提示され、なるほどと思う。さて、児童自身が何について考えどのような意見をもつかとなると、考えるべきことが見つからない。

文章として優れた作文が教材でなければならないが、そのために児童が書く題材を見つけることを困難にしているという実態がある。

教科書の作文教材には、作文の指導過程のうち、取材の過程、選材の過程、記述の過程、推敲の過程等のいずれかの特定の過程で使用することが適切な教材がある。一方すべての過程で活用できる教材がある。しかし、教科書の作文教材を使用して作文指導を進める場合、取材の過程から始まってすべての過程で使おうとする。そのこともまた問題であるが、小学校では指導者が全教科を担任しているため教科書に頼るのは当然とも言えよう。

児童が喜んで作文を書き、その過程で児童に育てたい作文力が確かに身に付くような題材とその指導法を開発したい。それが、本研究の目的である。

2. 研究の方法

(1)教科書の作文教材について調査研究をする。

平成4年度から使用している教科書について、どのような題材を取り上げて作文教材としているか調査する。

(2)作文の年間指導計画作成の手順を明確にする。

作文の年間指導計画をどのように作成するか手順を示し、年間指導計画作成のための粗案を示す。

(3)望ましい作文の題材について調査研究をする。

児童が喜んで作文を書くような題材とその指導法について考え、検討する。

(4)実践をし、検証する。

開発した作文の題材で実践授業をし、題材の適否について検証する。

II 作文指導と作文教材

1. 作文指導で育成したい言語能力

(1) 新しい国語科教育における作文指導

平成4年度から小学校で全面実施となった小学校学習指導要領の国語科では、児童が自分の言葉で自分のものの見方や考え方をしっかり確立できることが重視されている。そのためには、児童一人一人の自己実現を目指す学習活動を温かく支援する立場から、児童一人一人のよさや可能性を引き出し、それを伸ばしていく学習指導が求められている。なかでも、情報化などの社会の変化に主体的に対応するため、目的や意図に応じて適切に表現する能力と、相手の立場や考えを的確に理解する能力の育成が重視されている。

文字言語で目的や意図に応じて適切に表現する作文指導については、年間の授業時数が明示され、音声言語による表現の指導とともに重要な実践課題の一つである。

作文の指導については、従来からその重要性和指導の充実について提唱されてきているが、必ずしも児童の作文力の伸長に結び付いているとは言い難い面もある。又、計画的・意図的な指導についても、それが十分に行われているとは言えない現状である。作文指導が生活文一辺倒になったり、特設の作文学習や教科書単元の作文指導に頼りがちであったりするとの声も聞かれる。したがって、今まで以上に、指導方法の工夫・改善を図るとともに、授業時数の確保と学習内容の充実に向けて、国語科の年間指導計画と併せて、作文の年間指導計画を作成する必要がある。

(2) 作文指導と育成したい言語能力

児童一人一人のよさや可能性を伸ばしていく授業で育成する国語の力は、自ら進んで考えたり判断したり、表現したり、行動したりできる豊かで創造的な資質や能力である。

こうした資質や能力は、教師中心の授業で育成された受動的な知識理解、形式的な技能習得中心の学力に対して、新しい学力観と言えるものである。

新しい学力観を目指す作文指導では、受動的な知識理解、形式的な技能習得ではなく、作文指導の目標を児童の発達段階に位置付けながら、児童一人一人が、主体的に行う学習活動を通して、「目的や意図に応じて適切に表現する能力」を養い、「思考力や想像力及び言語感覚を育てる」ようにすることが大切である。

作文指導の過程「発想・着想 → 取材・選材 → 構想 → 記述 → 推敲」のそれぞれの場において、観察力・判断力・感受力・想像力・思考力等の伸長・育成が必要である。指導者である教師のみでなく、学習者である児童にも文章表現の過程を自覚させるとともに、各過程の相互関連を図りながら、一つ一つの過程を具体的・重点的に指導していくことが大切で

ある。例えば、思考力を高めるためには、「自分の考えをはっきりさせたり、まとめたりしてから表現すること」（構想）や「主題や意図をはっきりさせてから表現すること」（発想・着想）等の能力を身に付けることが必要である。又、言語感覚は、言語に対する直感力とも言えるものである。

言葉に関心を持ち、鋭敏に反応する児童をめざして、考えたり感じたりする言葉の感覚を育てるとともに、言葉の意味や使い方を理解し、その場にふさわしい適切な言葉の使い方のできる力を身に付けさせることも、作文指導で十分に指導できると考える。

(3) 各学年の目標及び指導内容

作文の指導方法や教材開発では、児童一人一人にどのような文章表現力を育成するのかを明確にして、文章表現の過程に沿った目標を、学習指導の過程にしっかり位置付けることが大切である。

国語科の目標は、各学年の目標(1)(2)、内容—A 表現・B 理解・言語事項として示されている。これらを、各学年の年間指導計画、単元指導計画、本時の学習指導案に具体的に位置付けていくことにより、次の単元、次の学年へと、児童の個性を生かしながら文章表現力の伸長を意図的・計画的に指導していくことができると考える。

各学年の目標(1)は、ア 表現指導の目標、イ 音声言語での表現指導の重点、ウ 文字言語での表現指導の重点、エ 態度育成の観点から成っている。各学年の目標（ア、ウ、エ）を一覧に示すと次の通りである。

	ア 目 標	ウ 文 章 表 現	エ 態 度
一 年	経験したことなどが分かるように	文と文とを続けて簡単な文章を書く	進んで表現しようとする
二 年	事がらの順序がはっきりするように	語や文の続き方に注意して文章を書く	正しく表現しようとする
三 年	表現する内容の要点が分かるように	事柄ごとにまとまりのある簡単な構成の文章を書く	分かりやすく表現しようとする
四 年	表現する内容の中心点が分かるように	段落相互の関係などを考えて書く	内容を整理しながら表現しようとする

五年	主題や要旨のはっきりした表現をするため	全体の構成を考えて文章を書く	相手や場面の状況を考えて表現しようとする
六年	目的や意図に応じた表現をするため	組立の効果を考えて文章を書く	適切で効果的な表現をしようとする

内容一 A 表現には、目標を達成するための指導事項が示されている。作文の指導事項の構成は次の通りである。

- ① 主題意識を持つこと
- ② 取材や選材に関すること
- ③ 内容を構成すること
- ④ 文章構成技能に関すること
- ⑤ 叙述すること
- ⑥ 描写すること
- ⑦ 推敲すること
- ⑧ 表現と理解に関すること

これらの指導事項は1年から6年まですべての学年に同じ内容ではなく、発達段階に応じて構成されている。

例えば、⑦推敲では「1年……文を読み返す習慣をつけ、間違いに注意する」「2年……間違いを正す習慣をつける」「3年……間違いを正す」「4年……間違いを正し、分かりやすい文章に直す」「5年……叙述の仕方について工夫する」「6年……効果的な叙述の仕方について工夫する」のように、発達に合わせて指導事項が押さえられている。

言語事項については、「イ文字、ウ表記、エ語句、カ文及び文章の構成に関する事項」が作文指導を進める際に深く関連している。

2. 言語能力と作文教材

(1) 教科書教材とのかかわり

各学年とも、学期に1～2単元程度の作文教材が設定されている。これらの作文教材は、先に述べた目標や指導内容に即して、学年を追って段階的に配列されている。各学年ごとに特色を挙げると次のような事が言える。

第1学年は、入門期の口頭作文から始まって、絵日記、生活文と発展していつている。生活文が中心となっており、題材も身のまわりのできごとが種々見られる。「経験したことなどが

分かるように簡単な文章を書く」「進んで表現しようとする態度を育てる」ことから、書くことの経験を多くし、生活文が主となっていることもうなずけよう。

第2学年は、「事がらの順序」をはっきりさせるよう、メモ等を使って書くという学習が取り上げられている。手紙・新聞といった文種も登場し、題材も「動物の観察」「作って遊ぶ」「学校のまわりの紹介」など、1年と比べると広がりを見せる。又、1・2年ともに生活科との関連を考慮した題材が見られる。

第3学年では、作文ノートのような取り立て指導が増えて、「簡単な構成の文章を書く」「要点が分かるように書く」力を育てることに重点が置かれている。詩、記録文、読書感想文等がある。

第4学年では、理科や社会科と関連した題材で、「段落相互の関係などを考えて書く」ことを指導している。一方、文種や作文教材の分量に、教科書間で相違が見られる。

第5学年では、意見文・記録文を取り上げて、「主題や要旨のはっきりした」文章を「全体の構成を考えて書く」ことを指導している。5年ということで「事象と感想・意見等を区別して書く」意見文という文種が登場するが、一方、生活文の指導も大切であり、どちらかに片寄った指導は避けるべきであろう。

第6学年では、「目的や意図に応じて」「効果的な表現」を目指し、作文学習のまとめとしての位置付けがされている。意見文も5年を一層発展させて、「根拠」があり「効果的」な表現を目指している。その題材は環境を扱ったものが多い。また、卒業文集などが必ず取り上げられている。

概観してみると、教科書によって力を入れている文種に相違が見られるので、使用している教科書の教材について傾向をつかむことも必要である。時には、教科書教材が児童の実態に合わないといったことも出てくるであろう。したがって、児童の実態と学年目標の系統を基本として、教科書教材で指導する際には、その内容・配当時間・指導方法等について、十分吟味し創意工夫を図り、児童が作文の基本的技能を楽しく学習し身に付けることができるようにしたいと考える。

(2) 教師が選定する教材とのかかわり

教科書教材の発展として、又、総合的な作文力を育成するための指導として、教科書以外にもさまざまな教材が使われている。指導の実際としては、やや安易に扱われてしまう傾向もあるようである。

例えば、「行事作文を重視している」「指導の手立てを省略している」「児童の実態とかけ離れている」「作文すなわち生活文ととらえている」等の反省があげられる。そこで、児童の実態（興味・関心、技能、地域、物の見方・考え方等）をしっかりと把握し、教科書教材との関連

を図りながら、教材選定や指導計画作成を行うことが必要である。

- ① 学校や地域の行事と関連付けた教材（例、全校遠足・お祭り）
- ② 他の教科と関連付けた教材（例、木の葉ひろい・ひまわりの観察）
- ③ 季節感を取り入れた教材（例、暑中お見舞い・雪）
- ④ 言葉の感覚や想像力を高める教材（例、わたしの好きな言葉・えんぴつ対談）
- ⑤ 教科書の読みの指導から作文を目指す教材（例、じどう車ずかん・続き話）

以上のような観点から児童の実態にあった教材を選定したい。なお、論理的な文章（説明文・観察記録文・意見文・報告文等）と心情表現的な文章（生活文・詩・感想文・日記・手紙等）のバランスを考えて、一方に片寄ることなく教材を選定したい。

(3) 練習教材とのかかわり

文章を書くための基礎的技能を育てる教材として、毎月2時間程度を当てて指導する教材である。教科書教材や教師が選定する教材を指導する上で必要な事項、各学年の言語事項、取り立て指導としての短作文等が内容としてあげられる。

特に、作文単元に取り組むためには、基礎的な文字・表記・語句等についての学習や、文章表現のある過程を取りあげる学習が大切である。児童の意欲や目的意識を生かしながら、指導内容や方法を工夫していきたい。

3. 作文学習への意欲の喚起

(1) 題材の開発

「何も書くことがない」「何をどう書いていいかわからない」と言い、書きたがらない児童を、「書こう、書きたい」という意欲を持った児童へと育てていくためには、題材の開発が重要な視点の一つであると言える。従来の作文指導に見られるような定型化された題材を、児童の興味・関心や能力等の実態を考慮せずに、提示して一方的に指導するだけでは、児童の意欲へつなげることはむずかしい。指導者である教師は、学習者である児童の実態を正しく把握して、児童の心情や能力に適した題材を探す目や選択する目を持たなければならないと考える。

次に、その留意点を掲げておく。

- ① 目的意識、相手意識が明確であるもの。それらのバリエーションも考えられるもの。
- ② 児童の発想や工夫が十分発揮できるもの。今までの学習の応用・発展を図れるもの。
- ③ 児童が初めて出会う、驚きや感動の得られるもの。
- ④ 一人一人に応じた目標や表現方法が設定できるもの。
- ⑤ 児童同士や児童と教師の話し合いを通して、心情的に共感を持つことができるもの。
- ⑥ 児童の生活に関連の深いもの。又、生活場面を広げていくことにつながるもの。

- ⑦ 児童の考えが深まったり、ものを見る目の幅が広がったりするもの。
- ⑧ 読解指導や音声表現との関連や、他教材との関連が図れるもの。

後述する各学年の年間指導計画案にも示されているように、児童の意欲を喚起するためには、まず、教師自らが意欲を持って題材を工夫していくことが不可欠である。

(2) 指導方法の改善

子供を変えるためには、教師が変わらなければならない。教師が変わるとは、授業が変わることであるとよく言われるが、作文の学習でも同じことが言える。児童の意欲に結び付いた題材を設定したとしても、指導方法において児童の興味・関心・意欲を常に配慮した適切な手だてがとられなければ、せっかくの題材も生きてこないことになる。このことから、指導方法の見直しや改善が重要である。

① 題材との出会いを工夫する。

意欲を持って書くためには、題材との出会わせ方にも配慮が必要である。書くことの準備や心構えを持つために、時には数日・数週間前から教師が心掛けて、題材について指導したり準備したりしておく必要がある。記述前の指導として、作文単元に入る前の指導も含めて、ぜひ工夫したい点である。

② 書く活動の多様化を図る。

書くことに対するの苦手意識を取り除いていくためには、書き慣れることが大切である。国語に限らず、他教科の学習や生活の中に書く活動を多く取り入れていくようにする。連絡メモ、ノート、日記、記録、発表原稿、掲示物、視写・聴写等、様々な場が活用できる。又、漢字指導の工夫も必要である。語彙を増やしたり、文の中で漢字を使ったり、時にはゲーム的な学習も取り入れることによって、文字に対する抵抗をなくすことができる。

③ 書くための体験を充実する。

書く題材によっては、様々な体験活動が必要になってくる。話し合い・調査・インタビュー・資料の収集・実験等活動の場や時間を確保し充実させることが意欲につながるのである。

④ 学習方法・手順を明確にする。

児童が主体的に学習に取り組むことができるよう、学習方法・手順・表現技法等を示し、児童が必要に応じて活用できるよう工夫する。例えば、手引き・ワークシート・ヒントカード・OHPの使用などを工夫し、児童の活動を支援していく。

⑤ 読む・書く・聴く・話す活動の関連を図る。

関連指導の必要性を改めて述べるまでもないが、より一層意識して指導することが重視されている。読むことから書くことへ、いわゆる理解との関連については、読みの学習における書くこと全てが作文指導といった認識ではなく、ねらい・方法などを明確にして指導計画に位置

付けていくことが大切である。一方、書くことから話すことへの表現の関連について、もっと取り入れていきたい。発表会・朗読会等、児童が興味を持って取り組める活動が多く設定できると考える。

⑥ 書く用紙等教材教具を工夫する。

まず目の原稿用紙に向かって作品を仕上げる場だけでなく、題材に応じた様々な形式を工夫していく。(例、新聞・パンフレット・本・さし絵・図表等)一人一人の児童に応じたものが用意できると、より一層主体的な学習となるであろう。又、短作文用の用紙、書く技能の練習のためのワークシート等、教師の工夫が必要な点である。一方、学習過程によってOHPの活用やAV機材の使用も有効である。

(3) 評価

評価は、次時の学習や次の単元への意欲につながる重要な視点である。児童の書く喜びへと結び付く評価でありたいものである。そのためには、作品として完成してしまった作文の評価から、学習過程を重視した評価へと、考え方を改めていく必要がある。

題材 → 取材 → 主題 → 選材 → 構想 → 記述 → 推敲 → 清書 → 発表
 表といった過程の各場で評価を行いながら、文章表現力を伸ばし、書くことの好きな児童を育てていきたい。

評価方法としては、教師の評価、自己評価、相互評価等を組み合わせ、多様な評価を取り入れることができる。教師の行う評価としては、毎時間の個別評価が中心となるが、評価項目を限定したり、評価対象児童を順にしたりして、評価の効率化も図っていくことも工夫する。

評価表に基づいた自己評価や相互評価も、発達段階に応じて実施することが必要である。特に高学年になるにつれて、児童の表現力には個性がはっきりと現れる。全員が目指す学習目標とともに、一人一人の児童が自分の表現力に応じた目標を設定し、達成の満足感を味わうことができるような自己評価活動をさせたい。一方、「一生懸命学習できた」「話し合いに参加できた」といった学習への満足感、充実感、さらに意欲につながる情意面での評価や、互いに認め合い高め合う評価も大事にしたいと考える。

4. 児童の実態

児童の言語生活や言語能力の実態を把握することは、学習目標や指導内容を明確にし、具体化するために欠かせないことである。又、指導の効果を高めるためにも必要である。

作文表現力に限って児童の実態をとらえる際には、次のような観点から見ていきたい。

- ① よい題材を見つける能力、題材の中から適切な場面や事項に着目する能力(取材能力)
- ② 書こうとする事柄を整理してまとめたり、組み立てたりする能力(構想能力)

- ③ 言語を選び、語と語、文と文との続き方を考えて文章表現していく能力（記述能力）
- ④ 文章を書く途中や書いた後で、見直してよりよいものにしようとする能力（推敲能力）

こういった能力について実態を把握する必要がある。一般的な傾向として、①～④については十分に定着しているとはいえない状態であるといえよう。

①や②の能力については、児童の生活経験の不足、活字離れ、情報メディアの充満などから強く影響を受けている。又、③や④は言葉に関する能力であることから、言語環境の整備や文章表現や読書の機会の充実を図っていく必要がある。

児童をとりまく言語環境の不整備、人間関係や生活体験の希薄化、情報の氾濫等、現状を考えるにつけて、国語の学習の一時間一時間が、作文単元の一つ一つが、児童にとってかけがえない価値のあるものと思われる。又、価値のある学習を進めていかなければならないと言える。例えば、書く事柄を十分持てるような豊かな学校生活を送るようにすること、語彙や構想を広げるために読書経験を積むこと、児童の興味・意欲や能力に応じた指導を工夫することなどである。

児童一人一人の実態を把握し、作文個人カルテなどの活用にまで深めていきたいと考える。

Ⅲ 作文教材とその考察

1. 作文教材の活用

国語科の指導は、使用している教科書を中心に、年間の指導計画によって進められる。年間の指導計画は、教科書を基本にして作成する。特に、作文指導について年間の指導計画を作成している場合も、教科書の作文単元をどのように展開するか考えることが多い。

それが、指導に役立つ場合ももちろんあるが、実際に作文指導を進めるときに必ずしも有効に機能しない場合がある。

教科書の作文教材は、読みの教材のように克明な教材研究の対象になり難く作文を書く際の資料的な扱いになりがちである。その為、作文教材を何時どこでどのように活用することがいいかは、あまり問われない。その結果、作文指導のすべてを作文教材に頼ってしまう。時には、この作文教材で何について書かせればよいかと、頭を悩ませながら指導に当たる。そのような状態では学習する児童の作文力の伸長は、とても期待できない。

教科書の作文教材について、教材研究をしてみるとその活用に工夫が必要であると言える。作文の指導過程に即して、望ましい活用を図ることが重要となる。

(1) 作文の題材発見に活用できる教材

作文の題材を発見するのにふさわしい教材である。書くことがないとか、何を書いたらいいかわからない等と言う児童に、書く題材として何があるかを気付かせるのに適した教材である。この種の教材は、文章構成や記述の仕方に多少難があっても、児童に自分の身の回りや書く対象をよく見つめさせる内容のものでなければならない。

(2) 作文の選材や記述に活用できる教材

作文に何を取り上げて、どのように記述すればいいかが分かる教材である。様子がよく分かるように書くとか、事象と意見・感想を書き分けるとはどのように書くことなのかを、児童が理解するのに適した教材である。この種の教材は、児童の身に付けたい作文力が文章表現に明確に示されたものでなければならない。

(3) 作文の記述や推敲に活用できる教材

作文の記述の仕方を考えたり、書いた作文の推敲をしたりするのにふさわしい教材である。教材を読み、書いた作文と比べることにより、自分の作文の記述について見直すのに適した教材である。作文の指導過程に即して作文教材の活用を考えると、読みの教材にも作文教材として活用できるものがある。しかし、ここでは作文単元教材として教科書に取り上げてある教材に、どのようなものがあるかについて調べ、各学年ごとにまとめてみる。教材の頭のローマ字は教科書出版社名を示す。

2. 教科書各学年の主な作文教材一覧

(1) 第1学年 教科書の主な作文教材一覧

文種	教科書教材・題材	ねらい
口頭作文	N おはなししましょう T みたこと したこと O せんせい あのね O たのしかったこと 「さかなつり」 G きのうのこと G せんせい あのね 「しゃぼん玉」「牛を見に行き」 K せんせい あのね M みつけたみつけた M せんせい あのね	<ul style="list-style-type: none"> ・身近な動植物を見て、話す。 ・見たことやしたことを先生に話す。 ・したことや見たことを先生に話す。 ・書いた絵を見ながら文を書く。 ・よく思い出して先生に話す。 ・話したいことを書く。 ・話したいことを先生に話し、書く。 ・見つけたことを話し、書く。 ・したことを話し、書く。
絵日記	N えに ぶんをかきましょう N したことをかきましょう 「ざりがにとり」 T えと さくぶん O えにつき G えにつき K したことのなかから —えにつき M こんなさくぶんをかいたよ	<ul style="list-style-type: none"> ・一日のできごとを絵や文に書く。 ・したことをしたじゅんに書く。 ・したこと見たことに会話も加えて書く。 ・見たこと、したことを書く。 ・したこと見たことに様子を加えて書く。 ・一日のできごとの中から選んで書く。 ・したこと、読んだことから選んで書く。
生活文	N おはなししたいことをかき ましょう 「さかあがり」「すなばあそび」 N おもいだしてかきましょう 「こおろぎ」 N したことをじゅんじょよく 「あやとりの手じな」 N ようすがよくわかるように 「おふろあらい」 T きょう、がっこうで 「かけっこ」 T したことをかきましょう 「はなびをしたこと」 T よくみてかきましょう 「きんぎょ」 T じゅんじょをよく思い出して かきましょう 「かいもの」 T じゅんじょに気をつけてか きましょう 「こうえんのそうじ」	<ul style="list-style-type: none"> ・したことから話したいことを書く。 ・書くことを思い出して順序よく書く。 ・遊びのやり方を思い出して順序よく書く。 ・様子がよく分かるようにくわしく書く。 ・だれに何をしらせるかを考えて書く。 ・いつ、どこで、何をしたかを書く。 ・「」に話したことを書く。 ・色、形、様子をよく見て、飼っている小動物について書く。 ・したことを順序よく思い出して、した順に書く。 ・したことの順序をよく思い出して書く。 ・思ったことや感じたこともつけ加える。

<p>生活文</p>	<p>O きのうしたこと 「シャボン玉」 O このごろあったこと 「まめまき」 G このごろしたこと 「いもほり」 G おうちの人と 「ハンバーグづくり」 K 見たことをかく 「インコ」 K よくおもい出して 「まめまきの日」 M たいいくのじかんにこんな ことをしたよ 「おにごっこをしたよ」 M こんなものをみつけたよ 「こうえんにいったときのこと」 M こんなにながくかけた 「人げんせんたくき」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・したことを思い出して、順序よく書く。 ・様子を思い出して、みんなに分かるように書く。 ・したことの順序をよく思い出して書く。 (「始めに」「次に」等を使って書く。) ・うちの人が出たことを、様子が分かるように書く。 ・よく見て、色やうごきを書く。 ・したことや見たことを、分かりやすく書く。 ・したことをうちの人に知らせるように書く。 ・したこと、見たことを思い出して書く。 ・したことを順々に思い出して順序よく書く。
<p>詩</p>	<p>N おもわずいったことを 「うし」 O みんなのし 「てがみ」他 G しのノート 「おほしさま」他 K 見つけたよ 「しも」「サッカー」 M しのひろば 「びっくり」「ひょう」他</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ひとりごとを言ったように見て書く。 ・おどろいたこと発見したことを書く。 ・したこと見たことを書く。 ・見たこと、したことを書く。 ・見たこと、思ったことを書く。
<p>創作</p>	<p>G たからさがしをしましょう M おはなしをかんがえよう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たからさがしに必要な地図や手紙を書く。 ・お話を想像して書く。
<p>コラム</p>	<p>T 文をつくりましょう T よみかえしてなおしましょ う 「かたたたき」 O 秋の木の葉や木の実 O ねこ、ぞう、ぺんぎん、つ る O おもしろかったところ K かいたら よみなおす 「ロードローラー」</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主語と述語を正しく照応させて書く。 ・作文を読み返して誤字や脱字を直す。 ・木の葉や木の実で遊んだことを書く。 ・どうぶつと話したことを書く。 ・読んで面白かったことを絵や文に書く。 ・見たものを書く。 ・誤字脱字を直す。

(2) 第2学年 教科書の主な作文教材一覧

文 種	教科書教材・題材	ね ら い
生活文	N ねこをだいた女の子	・書きたいことを見つけ思い出して書く。
	N なす	・順序を考えて、よく思い出しながら書く。
	N 虫とりをしたこと	・順序を考え色、形、大きさをくわしく見てしたことや会話を入れて書く。
	N やもり	・様子が見えるように大きさ、動き等を書く。
	N 妹のめんどうを見た	・できごとの順序を思い出して書く。
	T たまごやきづくり	・強く心に残っていることを、会話を入れて書く。
	T きゅうしょくぎをさがして	・心に残っていることを思い出し、くわしく書く。
	T 春と秋の遠足の思い出	・順序よく様子や気持ちや会話を入れて書く。
	O うえ木のさんぱつ	・強く心に残っていることの順序を考えて書く。
	G ペチュニアがきれいにさいた	・書きたいことを見つけ書く。
	G わきくにさか上がりを教えた	・友だちにしたことを、メモをもとに順序よく書く。
	K むじんとうたんけん	・書くことを見つけくわしく思い出して書く。
	K はいしゃさん	・したことを思い出して気持ちや様子等を書く。
	M 書くことを見つけよう	・一日の出来事を思い出してカードに書く。
M ドッジボール	・メモをもとにしたことを順序よく書く。	
M くつあらい	・順序をたどって様子をくわしく書く。	
日 記	G じゃぼじゃぼプリン	・心に残った出来事に題をつけて書く。
観察・記録文	O おたまじゃくしのへんしん	・観察したことを順序をたどって書く。
	G かわいいハムスター	・生き物をよく見て様子をメモしてから書く。
	K こおろぎがかわをぬいだ	・見たことがよく分かるように順序を考えて書く。
説明文	O かめの作り方	・おもちゃの作り方が分かるように書く。
	M ぶんぶんごま	・作り方の順序のメモをたどって、順序よく書く。
詩	N 「こんばんがかり」他	・感動した出来事を書く。
	N 「いんこのした」遠足	・心に強く感じたことを書く。
	O 「こわいざりがに」他	・心に強く感じたことを書く。
	G 「こくばんふき」他	・心に強く感じたことを書く。
	K 「草」「あきのかまきり」他	・心に強く感じたことを書く。
	M 「たこあげ」「フラダンス」他	・心に強く感じたことを書く。

コラム	T うさぎさんと風船(創作)	・絵を見て順序を考えて話の続きを書く。
	T うちから学校まで(説明)	・家から学校までの道順が分かるように書く。
	T 会話をに入れて書く(生活)	・会話文を入れて文章がよく分かるように書く。
	T どんどやき(日記)	・いつ、どこで、何をしたかをはっきり書く。
	T みんなのひろば(紹介)	・知らせたいことを見つけ、書いて知らせる。
	T パン工場の見学(見学記録)	・したことや見たことを順序を考えて書く。
	T 目や耳をはたらかせて書く	・五感をはたらかせて書く。
	O 夏の楽しいできごと(生活)	・楽しいできごとを書く。
	O お父さんへ よしえさんへ	・伝えたいことを相手に正しく書く。
	O 家にとどくもの(説明)	・どんなものがどのように届くか説明を書く。
	O 思い出して書く(生活)	・運動会や学芸会など、心に残るできごとを書く。
	G 分かりやすい文(表記)	・句点や読点を正しく使い分かりやすく書く。
	K すすんで本を読む(読書記録)	・読んだ本の記録をノートやカードに書く。
	K ふしぎに思ったこと(感想)	・読んだ本の疑問や感想を書く。
	K なかよしポスト(生活)	・知らせたいことをはっきり知らせる書く。
	K 白山ごうへ(手紙)	・知らせたいことがよく分かるように書く。
	K 読書カード(読書紹介)	・読んだ本の記録を取り、紹介しあう。
K かんぼっくりの作り方(説明)	・メモをもとに作り方の順序をたどって書く。	
M 気球にのって	・絵を見て、様子を想像して書く。	
その他	O かるた作り	・「どうぶつかるた」を作り、絵と文を書く。
	G かたかなトランプを作ろう	・かたかなで書く言葉を使って絵と文を書く。

(3) 第3学年 教科書の主な作文教材一覧

文 種	教科書教材・題材	ね ら い
生活文	N 母ちゃんのとこ屋	・一番書きたいことを選んで書く。
	N 山のおみやげ	・「はじめ」「なか」「終わり」の区切りを考 えて書く。
	N こうすけが立った	・大事なところが分かるように書く。
	N 早起きをするようになった	・中心を考え、よく思い出して書く。
	T かぶと虫	・中心にすることを考えて書く。
	O さか上がり	・書きたいことを選んで書く。
	O 弟の入院	・一番書きたいことが分かるように書く。
	G ちょうせん、テレビなし一 週間	・区切るところや中心を考えて書く。
	G ぼくの元気なピーコ	・書くことを選び、事柄ごとに整理して 書く。
	K ふろそうじ	・書くことを選んでメモを作ってから書 く。
	K そこあみおこし	・行動や会話を入れて様子を詳しく書く。
M ろく木登り	・書くことを選び様子や気持ちを詳しく 書く。	
日 記		
記録・ 報告文	N ヘチマのかんさつ	・よく見て大事なことを落とさずに書く。
	O ヘチマのかんさつ	・観察メモを整理して文章を書く。
	K ヘチマの実のかんさつ	・中心やまとまりをはっきりさせて書く。
	M 空気でっぼう	・実験や観察で調べたことを整理して書 く。
説明文	T わりばしでっぼうの作り方	・読む人に分かるように工夫して書く。
	G 合図としるし (読解と関連)	・なぜその合図や印があるのか考え、説 明する文を書く。
	M しゃぼん玉のいろがわり・ ねんど	・よく観察して区切りや中心を考えて書 く。
詩	N 「赤ちゃん」「雨の日」	・心に強く感じたことを書く。
	N 「おふろ」「しも柱」	・心がゆれ動いたことをよく思い出して 書く。
	O 「あいさつ」「ねこ」「雲」	・場面や気持ちが分かるように書く。
	G 「ひまわり」「お父さんの手」 他	・見たこと、感じたことを書く。
	K 「虫めがね」「1キロメート ル」他	・身の回りを見つめ発見したことを詩に 書く。
	M 「せんたくき」「ゆずのおふ ろ」	・素直な言葉で生き生きと書く。
創 作	O 絵本作り	・場面の区切りを考えて想像しながら書く。

創作	G 絵本を作ろう K 星の花のさいた朝のこと (読解と関連) M たから物をさがしに	<ul style="list-style-type: none"> ・絵を見てお話を作る。 ・お話の続きを想像して書く。 ・様子や気持ちが分かるように区切りを考えて書く。
紹介文	T ぼくの友達大村君	<ul style="list-style-type: none"> ・材料を集め中心をはっきりさせて書く。
読書感想文	G わたしの読んだ本 G 「つり橋わたれ」の感想 (読解と関連) G 「わにのおじいさんのたから物」の感想 (読解と関連) K 読書の広場	<ul style="list-style-type: none"> ・中心をはっきりさせて書く。 ・登場人物の気持ちを考えて感想を書く。 ・お話を読んで思ったことを書く。 ・感想や内容を記録し、紹介しあう。
意見・感想文		
手紙		
コラム	N 読書ノートを作ろう T いつ、どこで、だれが、どうした T かべ新聞 T 身の回りを見て T お知らせやせつめいの文 T お礼の手紙 T わすれ物をなくすには T 「けっか」と「原因」を考えて O 取材ノート O 屋上に上がって O 一年間をふり返って O 気球に乗れたら G はがき K ノートの工夫 K 手紙、はがき K 話しかけるように K 写真を見くらべて K 「しかし」「ですから」「つまり」 M 言葉のスケッチ M 読書カードを作ろう	<ul style="list-style-type: none"> ・感想や内容紹介を読書カードに記録する。 ・大事なことを落とさずに書く。 ・楽しく読みやすいかべ新聞を作る。 ・様子や動きをよく見て書く。 ・ていねいな言葉づかいで書く。 ・相手を決めて、気持ちが伝わるように書く。 ・何のためにどうするかが分かるように書く。 ・なぜそうなったかが分かるように書く。 ・毎日の出来事を簡単にメモしておく。 ・気付いたこと、思ったことを書く。 ・自分にとって一番大きい出来事を書く。 ・想像を広げて書く。 ・相手を決め、知らせたいことを書く。 ・ノートの上手なまとめ方を工夫する。 ・知らせたいことを落とさずまとめて書く。 ・文の終わりの書き方を工夫して書く。 ・分かりやすく書き直す。 ・つながりが分かるように説明する。 ・出来事を言葉でスケッチしたノートを作る。 ・感想や内容紹介をカードに書く。

(4) 第4学年 教科書の主な作文教材一覧

文種	教科書教材・題材	ねらい
生活文	N おふろ N 草花の天ぷら N わたしとお母さんのにらめっこ N おばあちゃんのふるさとをたずねて (生活感想) O 夜のお客様 G おばあちゃんと手 K のこ屋の父 K 新しいくつができた	・中心をはっきりさせ内容を整理して書く。 ・中心をはっきりさせて書く。 ・必要な説明を加えながら書く。 ・中心をはっきりさせ組み立てを考えて書く。 ・文章の組み立てを工夫して書く。 ・段落や中心を考えて書く。 ・書きたいことをはっきりさせ、材料を整理して書く。 ・書き表し方を工夫して、書きたいことがはっきり分かる文章を書く。
日記	T グループ日記	・書いてものの見方や考え方を広げ深める。
記録・報告文	N 言葉の研究 T プラネタリウム T アルコールランプの使い方 T お正月の遊び O 実験したこと G 市章の研究 K 新港清そう工場の見学 M しょうきゃく工場の見学 M ふろしきを調べて	・調べたことを整理して書く。 ・中心を決め、組み立てを考えて書く。 ・中心をはっきりさせて学習の記録を書く。 ・段落を工夫し、調べたことがよく分かるように書く。 ・実験や観察の記録をもとにして書く。 ・順序や中心を考えながら調べたことを整理して書く。 ・組み立てを考え中心をはっきりさせて書く。 ・メモをもとに見学記録を書く。 ・調べたことについて組み立てを考えて書く。
説明文		
詩	N 「梅ぼし」「かに」 N 「船の汽笛」他 O 「あさがお」「ネクタイ」他 G 「高とび」「弟の目」他 K 「橋」「星」 M 「わたしの名前」他	・発表会を行い、書くことを見つける。 ・様子や気持ちが伝わるように書く。 ・こころの目をはたらかせて書く。 ・読んで自分の表現に生かして書く。 ・書き表し方を工夫して書く。 ・心に残ったことを書く。
創作	G 一枚の写真から	・書く事柄をまとめ、段落のつながりに注意して書く。

創作	M 四年一組物語	・見る目を変えて書く。
読書 感想文	K 一つの花の感想	・あらすじをもとに感想を書く。
紹介文	T わたしの読書 T クラブ活動の紹介と入部の 勧め O 四天王寺の七ふしぎ	・材料を整理し、段落のまとまりを考えて書く。 ・考えたことの原因が分かるように書く。 ・段落のまとまりに注意して書く。
意見・ 感想文	M 早起き、わすれ物、まん画	・くらべて考え、くらべて書き表す。
手紙	G 手紙	・相手を決め、知らせたいことを考えて書く。
コラム	T ろうかはしずかに T ひなん訓練のこと T 交通安全の話 T 昔の校しゃと今の校しゃ O 取材の広がり O テレビについて書く O たからものしょうかい O 手紙 O おもいをめぐらして G つなぎ言葉を上手に使う K 新聞づくり K よい表現に改める K 図書新聞 M 作文ノート	・友達の考えに対する自分の考えを書く。 ・いろいろな書き出しを考えて書く。 ・内容を短くまとめて書く。 ・同じところ、ちがっているところをはっきりさせて書く。 ・取材の範囲を広げる。 ・心に強く残ったことや感じたことを書く。 ・たからものを紹介する文章を書く。 ・手紙の書き方を知る。 ・写真を見ておもいをめぐらして書く。 ・つなぎ言葉の使い方。 ・分かりやすく知らせるように工夫して書く。 ・細かい点にも気をつけて読み直し書き直す。 ・図書を紹介する新聞を書く。 ・発見したことを書きとめて取材する。
その他	O グループ文集作り G 方言通信を作ろう K まん画を作文に書く	・編集計画を立てて作文を書き文集を作る。 ・言葉について考えたり調べたりして書く。 ・4こままん画を短い作文に書く。

(5) 第5学年 教科書の主な作文教材一覧

文 種	教科書教材・題材	ね ら い
生活文	N おばあちゃんの病気 N いつもはいばっているけれど N おいしいつけ物になるまで T こわした植木ばち G 委員会のこと K ごめんなさい	・主題のはっきりした作文を書く。 ・文章の構成を考えて書く。 ・述べ方を工夫して書く。 ・よく思い出し、表現を工夫して書く。 ・主題にあった組み立てで書く。 ・自分の考え方、物の見方を深めて書く。
日 記		
記録・報告文	T 自動車工場見学 O 未来の植物をたずねる G 明治村を見学して M 輪じまぬり	・構成を考え、小見出し等に工夫して書く。 ・メモや記録を生かして書く。 ・資料やメモをもとに構成を考えて書く。 ・構成を考えて書く。
説明文	M 身近なものから M 覚えやすいものと覚えにくいもの	・段落相互の関係を考えて書く。 ・文脈に即し、適切に語句を使って書く。
詩	N 「夕焼け」「子牛」 N 「けんか鳥」「どしゃぶり」他 O 「朝」「風」「せんたくばさみ」 他 G 「夜の足音」「アナウンサーのかぜ」他 K 「父」「夕焼け」「白い線路」 M 「道」「かめ」「電灯」	・感動したことを詩に書く。 ・主題を明確にし、表現を工夫して書く。 ・より適した言葉を使って書く。 ・感動したことを詩に書く。 ・表現を工夫し、想像を働かせて書く。 ・表現を工夫して書く。
創 作	G ことわざのお話づくり K インガルス一家の生活を書く M 物語を作ろう	・ことわざについて調べ、本を作る。 ・想像して作文に書く。 ・場面の構成を考え、粗筋を考えて書く。
読書感想文	K 「お母さんの木」の感想文 (読解と関連) M 大草原の小さな家	・自分の考えをはっきりさせて書く。 ・強く心に残ったことを書く。
紹介文	G わたしたちの歳時記	・書くことを明確にし、構成を考えて書く。
意見・感想文	N 父や母の気持ち N 雑草とわたし、人間と動物 T 計画委員になって考えたこと	・主題が分かるように構成を考えて書く。 ・心に残ったことを感想にまとめる。 ・段落相互の関係に注意して書く。

意見・感想文	<p>O マヤ子との出会い</p> <p>O 学園を去るとき —言葉と友達—</p> <p>G 二十年後の青梅市</p> <p>K 自然と仲よく</p> <p>K 安全についての私の考え</p> <p>M 自然を大切に</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・構成を練り、自分の感想を深めて書く。 ・事実をふまえ、感想や意見を整理して書く。 ・事実と意見を区別して書く。 ・観点ごとに整理して書く。 ・主題を明確にし事実と意見を区別して書く。 ・感想、意見を区別して書く。
手紙		
コラム	<p>T 身の回りのこと</p> <p>T 「ほくの星座」「けんか」他</p> <p>T 悲しいこと、うれしいこと</p> <p>T 本や新聞から</p> <p>T わたしの紹介する本</p> <p>T 行事やできごと</p> <p>T わたしたちの〇〇市</p> <p>O クラブで活動していること</p> <p>O 文章の設計</p> <p>O ポスターをかけたわけ</p> <p>O 表現をみがく</p> <p>O 大木や小犬になって</p> <p>G 高い？すてき？</p> <p>K 読書カード</p> <p>K 日記</p> <p>K 見出しの言葉</p> <p>M 毎日の出来事から</p> <p>M 読書メモを作ろう</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・たとえる表現を使って書く。 ・詩集を作る。 ・「悲しい」「うれしい」を使わないで書く。 ・引用したことを生かして書く。 ・必要なことを落とさずに本の紹介を書く。 ・全体と部分の関係をはっきりさせて書く。 ・事実と考えを結びつけて書く。 ・事実と感想を組み合わせる。 ・目的に応じて文章の書き方を工夫する。 ・ポスターにした理由を明確にして書く。 ・自分の表現のくせを知り、表現をみがく。 ・立場を変えた見方で書く。 ・気持ちが伝わる表現を工夫する。 ・必要なことを落とさずに読書記録を書く。 ・生活に役立つ日記を書く。 ・訴えがよく分かる見出しを付ける。 ・気付いたことを記録し、作文に役立てる。 ・分かったことを要約して、書き留める。
その他	<p>O 新聞作り</p> <p>K 要約文 (読解と関連)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・見出しや内容を工夫して書く。 ・文章の組み立てをもとに要約文を書く。

(6) 第6学年 教科書の主な作文教材一覧

文 種	教科書教材・題材	ね ら い
生活文	N かみの毛を切って	<ul style="list-style-type: none"> ・目的をもって様子や心情がよく分かるように書く。 ・事実や根拠、意見等を区別し、構成を工夫して書く。 ・考えを深めて書く。 ・目的に応じ、くわしく又は簡単に効果的な表現を工夫して書く。 ・主題をはっきりさせて、様子や気持ちが伝わるように書く。 ・作文学習の総まとめとして書く。 ・効果的な組み立てを考えて書く。 ・考えを深めて、様子や会話を効果的に取り入れて書く。
	N わたしの心配	
	N ラジコンカー	
	N 自然を見つめてきて (生活感想)	
	T かきの木	
	T 人を思いやる心	
	K 祭ばやしとしの笛	
	M 一年生との交流	
日 記	O ぼくの太平洋航海	・思いや考えを整理して書く。
記録・ 報告文	T なぜ、すぎ林の山と木の生えていない山があるのか	<ul style="list-style-type: none"> ・事実を調べて研究し、分かったことや考えたことを整理し、文章構成を考えて書く。 ・目的に応じて表現を工夫して書く。 ・意図や調査方法等をはっきりさせて書く。
	O 柳田国男記念館を訪ねて	
	G 新潟県の石油	
説明文	M 休み時間の過ごし方	<ul style="list-style-type: none"> ・調査したことをまとめて発表原稿を書く。 ・自分の宝物である理由が分かるように書く。
	M わたしの宝物	
詩	N 「春」他	<ul style="list-style-type: none"> ・詩を読んで優れている点を参考にして書く。 ・主題をはっきりさせ構成を考えて書く。 ・ものの見方や感じ方、考え方を書く。 ・読んで自分の表現に生かして書く。 ・効果的な表現の仕方を工夫して書く。 ・構成や言葉づかいを工夫して書く。
	N 「あこがれ」「雪」他	
	O 「あさり」「めん一本」他	
	G 「ひがん花」「鳥」他	
	K 「星とり漁業」「砂時計」他	
	M 「わたしはわたし」他	
創 作		
読書 感想文		
紹介文	T 福沢諭吉 努力の人、視野の広い人	<ul style="list-style-type: none"> ・文章の組み立てを考えて書く。 ・ものの見方・感じ方を書く。
	G 歩み入る者に安らぎを	
意見・ 感想文	N 私たちの将来	<ul style="list-style-type: none"> ・事実と意見と区別し主張をはっきり伝えるように書く。 ・事実に対する感想や意見を書く。
	T 先週の日曜日、公園に行ったときのこと	

意見・感想文	<p>O ごみのない住みよい町に</p> <p>G 動物を飼うことについて</p> <p>G やめてください、めいわく <small>駐車</small></p> <p>K 限りある水</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・主題をはっきりさせ文章の組み立てを工夫して書く。 ・目的に合った事柄を整理して書く。 ・事実と意見を区別し、構成を考えて書く。 ・目的に合った材料を選んで書く。
手紙		
コラム	<p>T 小川君のシュートが成功した</p> <p>T 自分の話しことばをふり返って</p> <p>T 電力の消費量</p> <p>T おもちゃの船を進ませる方法</p> <p>T 一枚文集</p> <p>O 新たな視野からの取材</p> <p>O 表現の広場</p> <p>O 表現の広場</p> <p>G ひまわりのように</p> <p>K 学習記録のノート</p> <p>K けいじ板のくふう</p> <p>K より効果的に書く</p> <p>K 慣用句を使って</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・様子を書くことによって気持ちを表現する。 ・くわしく書いたり，簡単に書いたりする。 ・グラフや表から分かることを整理して書く。 ・考えの筋道を立てて書く。 ・題材を広く求め，目的を考えて書く。 ・題材を見つけて書く。 ・思ったこと考えたことを書く。 ・物語を書く。 ・慣用句を使って短文を書く。 ・学習の記録を書く。 ・掲示板の活用の仕方を工夫する。 ・効果的な表現を工夫して書く。 ・慣用句を使って短文を書く。
その他	<p>O 私たちの学級物語あすなろ</p> <p>G 生い立ちの記</p> <p>K 題材に応じて書く「小学校での生活をふり返って」他</p> <p>M 作文ノート <small>(生活記録)</small></p> <p>M 射手座を見つけた</p> <p>M 思い出を巻物に</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・題材に応じて様々な種類の文章を書く。 ・組み立てや表現を工夫して書く。 ・題材に応じて様々な種類の文章を書き自分の考えを深めたり生活に役立てたりする。 ・生活の中から様々な記録をする。 ・構成を工夫して書く。 ・全体の構成を考えて書く。

3. 望ましい作文教材

児童が作文学習を主体的に進め、その過程でものの見方や考え方を豊かにし、作文力を培うようにする。そのような学習過程を設定するには、指導法の工夫とともに、作文教材が望ましいものでなければならない。

そこで、望ましい作文教材が備える条件について考えてみよう。

(1) 児童のものの見方や考え方を豊かにする教材

作文を書けない児童は、しばしば「書くことがない」と言う。このような場合、日常生活の中に特別な出来事があれば「書くことがある」となる。日常生活とは異なる、例えば遊園地に出掛けたとか珍しい物を買ってもらったとかの出来事があれば「書ける」のである。

自分を取り巻く周囲を見つめ、自分の五感を働かせて感じたり考えたりすることができないため、環境からの何らかの刺激がないと書くことができない。しかし、このような児童の実態は、指導する方にも問題がある。学習の主体である児童が、作文学習への心構えをもつこともないままに、いきなり「このごろの生活から何か心に残っていることを書きなさい」と指示する。あるいは、「何でもいいから好きなことを書きなさい」と突き放す。こうした書かせ方は作文を書くことの好きな児童やよく書ける児童にとっては、都合がいい。反面、作文を書くことの嫌いな児童や書けない児童にとっては、極めて苦痛となるのである。その結果、作文嫌いな児童になってしまう。

現在の児童は、情報の氾濫する社会に生活している。多種多様な情報が年齢や発達段階に関係なく児童の生活に入りこんでくる。五感を働かせて感じているよりも、見過ごしたり聞き流したりすることの方がはるかに多い。それは、情報の氾濫する社会に生活する者の当然の生活姿勢でもある。「このごろの児童は、豊かな感性がない」と嘆く声を聞くこともあるが、情報化社会に生きる児童の側からすれば、豊かな感性を働かせていては身がもたないとの論にもなりかねない。

したがって、児童の感性を触発し児童に自分を取り巻く周囲を見つめさせるような作文教材を提示することは、極めて重要である。

その教材から、児童は自分の生活を見つめ直し「こんなことがあった、あんなこともあった」と気付く。そして、気付かないで見過ごしていた出来事や何気なく見ていた対象を改めて見つめてみるのである。そこに自分の考えや感想を持ち、時には新しい発見をする。

このような教材は、児童のものの見方や考え方を豊かにする教材であって、当然児童の生活に身近な題材を扱ったものとなる。

(2) 児童に育てたい作文力を明快に表現している教材

児童が作文を書く場合、どのように書けばよいか児童自身が明確に自覚できることは大切で

ある。「様子がよく分かるように書こう」「中心点をはっきりさせて書こう」等と言われても、それがどのような作文であるのか児童に認識されなければ意味がない。児童が教材に対して、とてもよく書けていると考え上手な作文であると思ってもそれで終わっては望ましい作文教材としては機能しない。むしろ、よく書けているとか上手であるとか以上に「このように書けば様子がよく分かる」「中心点はこのように書くのだ」と児童が自覚できる教材であることが必要である。

これは、指導する場合の指導目標に関することでもある。指導の際、どのような作文力を育てたいかを明らかにして学習指導過程を工夫する。児童に育てたい作文力は、あれもこれもと欲ばると結局どれもが児童の身に付かないでしまうことになりかねない。児童の作文力の実態を的確に把握するとともに、この指導ではこの作文力を児童の身に付けようと、目標を明確にし、その目標が教材としての作文に明快に表現されていることが肝要である。

作文教材は、一般的には読解教材と同様な指導を行う対象にはならないが、児童も作文を書くための教材として、読解教材とは異なる読み方をしていく。その際、表現の仕方つまり書き表し方に視点を当てて読み、自分の表現や書き表し方をどうするかを考えるようにするのである。そのために、作文教材は育てたい作文力が明快に示されているほどよい。

各学年には、発達に即して育てるべき作文力がある。それは、当該学年に1事項とは限らない。しかし作文教材では、1教材に1事項でよいからその学年の目指す作文力が典型的に表現されたものでありたい。

(3) 児童の生活に密接な体験・経験につながる教材

児童の生活の場は、学校、家庭、地域社会等がある。それらの中で、児童は日々多様な体験や経験をしている。児童の生活に密接である体験や経験であると、そうでない体験や経験よりも作文として書きやすい。

学校生活を考えてみよう。1年間をサイクルとして、児童は毎日新しい体験や経験をしている。それらの中には、児童が気にもとめないまま過ぎ去っていくものもあれば、児童の心情を激しく揺さぶるものもある。そのような体験や経験につながる教材が望ましい。

意見文を書くとき、「事象と感想、意見などを区別して書き表した文章」が教材としてはふさわしいと言える。しかし、書き表し方がいかに優れていても題材が児童の生活とかけ離れたものであるなら、作文を書く行為を触発しない。

意見文を書くことで、児童が自分の考えを深めたり広めたりしていくことが大事なのでありそのために何についてどのように考えていくかが極めて重要になる。自分の生活体験や生活経験に関係のないことを、適当に取り上げて一見格好よく文章にまとめて書き表すような指導であってはならない。意見文の教材には、しばしば大人の社会における課題ととれる内容を取

り上げたものを見る。文章構成は立派であり説得力はあっても、さて児童が何について書けばいいかとなると皆目見当がつかない。このような文章は、教材として不適切である。

児童が何について考え、何について書くかを触発されるためには、児童の生活につながる内容を取りあげた文章が教材としてふさわしい。

その意味から言えば、学校行事を内容とした作文はそれが優れた表現であるならよい教材になり得る可能性を持つ。行事作文といって、行事について書くことは悪い指導のように言うのは、むしろその指導方法に問題がある。行事が終わると直ちに、何の指導もなしに何の目標も定めず「よく思い出して書きなさい」と書かせる。それでは、児童に作文力が育つことなど到底期待できない。

むしろ、学校行事は指導する教師も学習する児童も共に体験したことであり、時には強く心を動かす体験になる。これを取り上げて、指導目標を明確にし、良い教材を使って学習指導を展開することは、少しも悪いことではない。ただ、学校行事について書いた文章で優れた教材が少ないのも事実である。

以上は、望ましい作文教材が備える条件についての基本的な考え方である。

作文教材の中には、これらのすべてを満たしているものは案外少なく、時には上記三つのうちいずれも当てはまらないものさえある。

特に、感動の体験を書く際の作文教材には、見事な感動的文章であってもそれはあくまでその書き手に限られた生活体験にすぎないことが多い。もちろん、感動とは特定の場面に置かれた人間の心の動きであるから、誰にも一般化できるものではない。しかし、作文教材としてある以上その教材から書く行為を触発されるものでなければならない。

児童にとって、上手な作文であり立派な作文であり優れた内容の作文であっても、それだけでは児童の書こうという意欲を喚起しない。

児童は、あれを書こう、あれなら書けると書くことを考えつき、それについてどのように書けばいいかが分かり、書き綴る意欲に支えられたとき主体的に作文を書く。書くことが見つかったも書き表し方が分からなければ書く意欲は起きないし、書き綴ることもできない。

作文学習は、一字一字を連ねて書く行為である。児童にとって、容易な学習ではない。しかも一人で書き綴るのであり、書いている間は全くの個の学習と言える。作文力が十分でない児童にとっては、特に苦痛な学習にもなりかねない。

作文学習が児童の学習意欲を喚起し、実際に書いてその結果に児童が満足するためにより教材を準備したい。

IV 作文の年間指導計画の作成

作文の年間指導計画はその作成により、学年ごと、学期ごと、月ごと、あるいは単元ごとの指導内容が概観できるとともに、当該学年の目標及び指導事項と単元や教材とが明確に位置付けられる。その結果、意図的・計画的な指導が可能となり指導の偏り等を未然に防ぐ。

作文の年間指導計画を作成するための基本的な考え方や手順をあげてみよう。

1. 基本的な考え方

(1) 教育課程における国語科の指導計画

作文の年間指導計画は、学校が編成する教育課程の中の国語科の指導計画に位置付けられる。そこで、まず教育課程と国語科の指導計画についてその考え方を明確にする必要がある。

学校において編成する教育課程は、教育課程に関する法制に従い、各教科、道徳、及び特別活動についてそれらの目標を達成するように教育の内容を学年に応じ、授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画である。

国語科は、教育課程の中の各教科の1教科である。

国語科の指導計画は、国語科について、児童の発達段階に応じ、学年ごと、学期ごと、月ごと、週ごとに、指導目標、指導内容、指導の順序、指導方法、使用教材、指導の時間配当等を定めた具体的かつ実的な計画である。

国語科の指導計画についての考え方を明確にするために、小学校学習指導要領の次の部分は必ずふまえなければならない。

・第1章 総 則

- 第1 教育課程編成の一般方針
- 第2 内容等の取り扱いに関する共通的事項
- 第3 授業時数等の取り扱い
- 第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項

・第1節 国語

第1 目標

国語を正確に理解し適切に表現する能力を育てるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる。

第2 各学年の目標及び内容

[第1学年]～[第6学年] 目標 内容（A 表現，B 理解，言語活動）

第3 指導計画の作成と各学年にわたる内容の取り扱い

別表 学年別漢字配当表

(2) 国語科の授業時数と作文の指導

作文の指導に充てる時数は、国語科の年間総時数とともに次のように定められている。

「作文を主とする指導については、第1学年から第4学年までは年間105単位時間程度、第5学年及び第6学年では年間70単位時間程度を配当するようにする。」

ちなみに、国語科の年間総時数は、第1学年306単位時間、第2学年315単位時間、第3・4学年280単位時間、第5・6学年210単位時間となっている。

授業時数だけではなく、作文の指導について次のように示されている。

- ・作文の指導については、文章による表現の基礎的な能力を養うことに重点を置くこと
- ・実際に文章を書く活動をなるべく多くしたり特に取り上げて指導したりすること

更に、教材の選定については、「児童の心身の発達段階に即して適切な話題や題材を精選して取り上げる」とあり、教材選定の観点も10項目にわたって示されている。

これらのことは、作文の指導計画を作成するに当たって児童の実態に即して考える際の重要な事項である。すなわち、基礎的な能力として現在児童に養う必要があるものは何か、特に取り上げて指導する必要があるものは何か等を考慮して指導計画を作成することになる。また、児童がどのような題材で書くかは、指導計画の作成に当たって十分工夫する必要がある。例えば、想像力をふくらませて書くための題材、論理的な見方や考え方をするための題材、あるいは美しいものに感動して書くための題材等、児童の実態に即して児童に育てたい作文力に合わせて題材を設定するのである。

2. 作文の年間指導計画作成の手順

(1) 事前の準備

既に述べたように、教育課程や国語の指導計画について全員が共通理解を図る。更に、学校や地域や児童の実態を把握する。地域に作文の題材に適した由緒ある建築物や伝統芸能があれば、それらについて書くことができる。児童に論理的な見方や考え方を育てる必要があれば、そのための指導を位置付ける必要がある。特に学校の教育目標と児童の姿とを関連させて、児童の実態を把握することが重要である。

まず指導計画作成のための具体的な組織と日程を決める。全員の役割分担や協力の仕方をどうするか等実際の作業を見通して、その進め方を考える。作業日程等も決めておくのである。例えば、低・中・高学年部に分かれて各学年の指導計画を作成しそれらを持ち寄って調整するとか、各自ができる作業は適宜進めて共にしなければならぬ作業は分科会や全体会を設ける等である。

次に、指導計画作成のための調査や研究をする。児童の作文力はどのようなか、言語環境はど

うか、地域文集や学校文集は使えるか、児童の言語経験はどのようなか等作文指導に関する様々な調査がある。国語の教科書についての調査研究も必要である。国語の教科書を丁寧に調べてみると、必ずしも児童の実態にそぐわない教材がある。作文指導では、教科書を頼りすぎて児童を教科書に合わせようとする、危険である。すなわち児童が書けなくなってしまう場合がある。又、教科書では児童が書くための具体的な題材を示していないことも多い。

地域や学校の行事にも、書く題材を求められる。児童にとって表現可能で新鮮な経験、例えば地域の祭りやプール開きもあろう。あるいは、読書週間に読書感想文を書くこともあろう。他教科との関連を考慮して、児童の興味や関心を喚起し児童の作文力が向上するための調査や研究をするのである。

(2) 作文の年間指導計画作成

作文の年間指導計画を作成するための具体的な手順を示す。

① 指導内容を選択する。

指導内容を選択する際の考え方は多様であるが、ここではあくまで一つの例としての考え方を示すものである。ここに示すものは、一方法ととらえてさらなる工夫が必要である。

ア. 作文の基本的能力を育成する学習の系列

教科書の作文単元は、主としてこの系列である。「段落を考えて書く」「事象と感想、意見などを区別して書く」等作文の基本的能力の育成をねらって学習を進める。指導目標が明確であり、学習指導には取材、選材、構成、記述、推敲の全過程を含む。時には、文字、語句、文法等の基礎的技能的学習指導も必要とし、時には、文種に応じた学習指導も必要である。

指導上に多くの要素が入り込み、指導時間数もまとまるとるのが普通である。指導目標を明確にして、その徹底を図る学習の系列である。

イ. 作文の基礎的能力を育成する学習の系列

文章を書くための技能を習得する学習で、必ずしも教科書にこだわらない。「文を構成する技能」「文と文との接続の技能」「段落を構成する技能」等作文の基礎的能力的培养をねらって学習を進める。各学年で学習する文章を書くための基礎となる技能を選び、系統立てて単元を設定する。特設的な学習指導であり、指導時間は1～2時間を1単元として毎月設定する等が普通である。「 」を適切に使えるよう会話文の書き方だけを取り上げて指導する等が、この学習の系列である。

ウ. 文種に応じた総合的な学習の系列

教科書の単元で学習した基本的能力や特設的に設定し学習した基礎的能力的培养を応用発展した作文学習である。「詩を書く」「記録文を書く」「読書感想文を書く」「手紙を書く」等であり、イとは異なるものの特設的な学習の単元である。一つの文種の作文について、取材、選材、構成、

記述、推敲の全過程が入る。各学年で取り上げるべき文章のジャンルを適切に選ぶとともに、学校行事や他教科の学習とも関連して計画を考える。例えば、読書週間に読書指導をして読書発表会を実施するために読書感想文を書く等の学習の系列である。

② 指導内容を組織する。

指導内容の組織は、前に述べた①をもとに指導目標を明確にしながらかる程度指導時数をも踏まえて行う。

ア. 教科書の作文単元（作文を目指す単元も含む）を次の観点で検討し、配列する。

- ・ 作文の指導目標は何か。
- ・ 何月に、どのように指導するか。
- ・ 何を題材にして書かせるか。

作文を目指す単元とは、読む教材から作文を書く指導へと発展する単元で読みを深めるために書く学習をすることは含まない。あくまでも作文力の育成を目指して、作文の学習指導を展開する場合にかぎる。この種の作文単元による指導内容は、学期に1～2多くても3が普通である。

イ. 特設的な作文の単元を観点により検討し、配列する。

- ・ 各学年で取り上げて指導すべき作文の基礎的能力を選び出す。
- ・ 毎月1～2時間を特設単元その1として設定する。

これは、学習指導要領の言語事項を中心として児童の実態から考える。例えば「指示語を適切に使用する技能」「接続語を適切に使用する技能」「必要に応じて改行する技能」「句読点を打つ技能」「連体修飾語使用の技能」等がある。

- ・ 教科書の作文単元（作文を目指す単元も含む）の配当がない月に特設単元その2として総合的な作文の単元を設定する。その際、次のことを慎重に検討する。

※ 学校生活や学校行事、他教科の学習等との関連を考慮する。

※ 生活文、見学記録文、報告文、感想・意見文、手紙文、詩等文章の種類を偏りなく押さえるようにする。

ウ. 授業時間数を配当する。

国語の年間授業時数から、読みの指導及び書写の指導の時数も確保の上、作文に当てる時数を適切に定める。

実際には、指導内容の組織と指導時数の配当は同時作業となるのが普通である。

エ. 全体を見通す。

- ・ 指導目標、指導内容、指導時数を一覧にし、学年の指導事項が網羅してあるか確かめる。
- ・ 学年相互の関連を図り、指導事項等について系統性・発展性を確かめる。

- ・ 指導計画に偏りがないか、読みの指導等との関連はどうかを確かめる。
- ・ 児童の実態を的確に反映した指導計画になっているかを確かめる。

3. 各学年の年間指導計画例

年間指導計画は、学校や地域や児童の実態を踏まえて作成するものであり、学校の教員が自分の指導する児童のために作成してこそ意義がある。

そこで、以下に示すのはあくまで指導計画例にすぎない。

本章の1, 2の考え方を生かして年間指導計画を作成するとすれば、例としてこのようなものもあろう。年間指導計画例の見方は、次の通りである。

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ◎ 教科書の作文単元 ☆ 教科書の読みの指導から作文を目指す単元 ※ 作文の基礎的スキルを育成する単元 ○ 文種に応じた総合的な学習単元 |
|---|

なお、第V章に開発教材及び実践として取り上げて示してある単元は、月の部分に■印を付してある。

(1) 第1学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	◎はるのあさ	3	・簡単な語や文を読み書きして、国語の学習に興味を持つ。
	◎うたにあわせて あいうえお	8	・あいうえおを正しく書く。 ・あいうえおのそれぞれで始まる言葉を集める。
	※自分の名前	1	・正しく視写したり、聴写したりすることができる。
	※しりとりあそび	1	・平仮名を読んで、正しく書くことができる。
5 月	◎おはなしきいて	3	・したことを相手にわかるように話す。
	※れんそうゲーム	1	・一つの言葉から、想像した言葉を数多く思い出して書く。
	○遠足のできごと	2	・遠足のできごとを思い出して書く。
	※わたしの花	1	・見たことを「～は～です」を使って書く。
6 月	◎みつけた みつ けた	5	・生活の中でみつけたことを、話したり、かんたんな文に書いたりする。
	◎せんせいあのね	3	・経験したことを、二、三文で話したり書いたりする。
	◎こんなことをし たよ	5	・共通で体験したこと、見聞きしたことを順序よく思い出して書く。
	○学校のプールで	1	・見たことや感じたことを書く。
	○わたしの動物じ まん	1	・飼っている動物のじまんを書く。 「～は～です。」
7 月	◎こんなさくぶん を書いたよ	5	・お話を聞いたり、読んだりして、心に残った場面の絵を手がかりにして、作文を書く。
	※たなばたさまへ おねがい	1	・文と文のつながりを考える。 ・自分の考えたことを短く書く。
	◎絵日記	2	・その日のできごとから選んで、絵と文で書く。
9 月	◎たいいくのじか んにこんなこと をした	6	・体育の時間にしたことを思い出して、書くことを見つけ文と文のつながりを考えて書く。
	○うんどう会に来 てください	2	・うんどう会への招待状を書く。
	※絵日記	1	・季節の変化を見つけて、絵や文で書く。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ 母音を正しい筆順で書く。 ・ 「あいうえお」のそれぞれのお話を作る。 ・ 自分の名前を言いながら書いたり、友だちの名前を聞いて、カードに書きとる。 ・ しりとりあそびをしながら、言葉の読み書きをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ はるのあさ ・ 名し作り ・ 名前カード作り
<ul style="list-style-type: none"> ・ さし絵をもとに、自分の話したい事柄をさがして選び、話す。 ・ 一つの言葉からできるだけ多く想像して書いたり話したりする。 ・ 遠足でしたことや楽しかったことを、思い出して話したり、簡単な文に書いたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ おはなしきいて ・ 楽しい遠足 ・ あさがおのひみつ
<ul style="list-style-type: none"> ・ さし絵から取材の方法を知り、話すことや書くことを知る。 ・ どこで何を見つけたかを落とさず書く。(季節の変化や生き物の様子) ・ 「せんせいあのね」を使って経験したことを、二、三文で書き、清書する。 ・ したことの順序をたどり、文と文を続けて文章を書く。 ・ 一文を一段落にして正しく清書する。(マス目に書く) ・ 学校のプールに入って、見たことや感じたことを友だちと書く。 ・ 飼っている動物や虫などについて相手に知らせる文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ みつけたみつけた ・ せんせいあのね ・ おむすびころりんのげきをした ・ えんぴつたいだん
<ul style="list-style-type: none"> ・ お話の順序にしたがって、心に残った場面やすきなところを絵や文で表す。 ・ 願いごとを短くまとめて、短冊に書く。 ・ でき事を絵や文でまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ はなさかじいさん
<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文から、上手に書けているところを探し、題や書き出しも工夫する。 ・ 自分の出る種目等や場所、様子などを書いて家の人を招待する。 ・ 季節の移り変わりを、相手によく分かるように絵や文で書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ おにごっこをしたこと

月	題 材 名	時数	目 標
10 月	☆はたらくじどう車	3	・自分の好きな自動車を説明する文を書く。
	☆くじらぐも	2	・場面ごとの様子を思い出して自分の気持ちをまとめる。
	○学校のまわり、校庭の木	4	・自分が見た学校のまわりの様子や立っている木をくわしく見て、色、形、大きさなどを書く。
	※本の主人公へ	1	・本の感想を書く。
11 月	◎こんなものを見つけたよ	8	・校内や校外に行ったことから、書くことを選び、したことの順序をたどって様子がよくわかるように書く。
	※このごろのできごと	1	・会話を入れて「～が～だ」に注意して書く。
	○先生、主事さんありがとう	2	・相手を意識して、感謝の気持ちを書く。
12 月	◎本は友だち	2	・動物が主人公の本を読み、好きな本を紹介する。
	○つづきばなし	2	・読んだ物語の続きを予想して書いたり、新しいお話を創作して書く。
1 月	◎しのひろば	3	・見たことやしたことを短い言葉で書く。
	○わたしのお正月	2	・お正月にしたり、見聞きしたことを書く。 ・絵と対応して楽しく想像をふくらませ、豊かな話をつくり、絵本にまとめる。
	○え本をつくろう	6	・メモの使い方を知る。
2 月	○しを書こう	4	・耳や目をよく使って、季節の変化をとらえて詩を書く。
	◎こんなに長く書けた	8	・このごろのでき事から、楽しかったことを書く。
	※おにを見つけよう	2	・自分の中の「○○のおに」について思い出して書く。
3 月	○このごろできるようになったこと	2	・一年生でできるようになったことを中心に自分の成長をまとめる。
	○たのしかった一年生	1	

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・学習した文の書き方をまねて、自動車の仕事やつくりを書く。 ・くじらぐもに手紙を書く。 ・見たり、さわったり、聞いたりしたことをもとにして、自分が書きたいことをくわしく説明して書く。 ・読書のあとに、本の主人公へ手紙を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなじどう車
<ul style="list-style-type: none"> ・自分がしたことから、一番書きたいことを選んで、くわしく思い出して書く。 ・秋の様子や身の回りの出来事を書く。 ・勤労感謝の日にちなんで、カードに手紙を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こうえんにいったときのこと「木のはひひい」 ・ぼくはしんぶんきしゃ
<ul style="list-style-type: none"> ・相手に本の内容がうまく伝わるような工夫をして、本を紹介する文を書く。 ・話の筋を考えて、続き話を書いたり、紙しばいを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わたしの読んだえ本
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が見たことや思ったことの中で友だちにぜひ知らせたいことを書く。 ・お正月をどのようにすごしたか、絵と文で書く。(絵は小さく) ・会話を入れたり音やなき声を入れて文章を書く。 ・細かいところまで注意して書く。(メモや絵を使って) 	<ul style="list-style-type: none"> ・びっくり、ひょう
<ul style="list-style-type: none"> ・音や色、大きさや形などをはっきりととらえた詩を書く。 ・相手に、その時の様子がよくわかるように書く。 ・自分を振り返り、反省するところを探して書く。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・一年生になってからの自分の成長の様子を前の事と比べながら書く。 	

(2) 第2学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	○うれしいな2年生	2	・何について書くかを考えて、文章に書くことができる。
	※ノートの書き方	3	・学習記録としてのノートの書き方について理解し、ノートを正しく書くことができる。
	○楽しい遠足 (生活文)	6	・順序を考えて、文章に書くことができる。
5 月	◎書くことを見つけよう (生活文)	6	・書きたいものを見つけ、必要な事柄の順序を考えて文章に書くことができる。
	※作文ノート	1	・作文に書く題材を見つけてメモすることができる。
	○わたしの□□ぼくの□□	4	・書こうとする題材について必要な事柄を集めてから文章に書くことができる。
6 月	◎たのしかったこと (生活文)	8	・学校生活の中から、楽しかったことを一つ選んで、様子が分かるように文章に書くことができる。
	※ことばのつかい方	1	・助詞「は・へ・を」や、促音拗音長音を文章の中で正しく使うことができる。
	☆たんぼぼのちえ	2	・思ったこと感じたことを文章に書くことができる。
7 月	○かんさつしよう (観察記録文)	3	・見たことをありのままに文章に書くことができる。
	○本を読もう	2	・語と語や文と文との続き方に注意して文章を書くことができる。
	○お手つだい	4	・事柄の順序を考えて文章を書くことができる。
■ 9 月	○手のはたらき (説明文)	6	・書くために必要な事柄を取材して、語と語や文と文との続き方に注意して説明的な文章を書くことができる。
	※点, まる, かぎ	2	・句読点やかぎかっこを正しく使って文章を書くことができる。
	◎うんどう会 (招待文)	3	・自分の書いた文章を読み返して、大事なことが落とさずに書いてあるかを確認し、間違いなどを正すことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ 2年生になった喜びを、新しい教室や新しい教科書への思いにこめて文章に書く。 ・ ます目のあるノート、縦罫のノート、横罫のノートなどそれぞれのノートの取り方を考えてノートに書く。 ・ できごとをよく思い出して、順序を考えて文章に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 新しい教室、新しい教科書 ・ 理科のノート ・ 春をさがそう
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の生活の中から、見たり聞いたり思ったりしたことを取り上げて文章に書く。 ・ 心に残ったこと(面白かったことや残念だったこと)をメモする。 ・ 自分が大事にしているものについて、自分とのかかわりについて文章に書き、友だちに伝える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ あそんだこと ・ うちの人 ・ わたしのたからもの
<ul style="list-style-type: none"> ・ 休みじかんに友だちと遊んだことや、音楽や図工の時間にしたことの中から、書くことを見つけて文章に書く。 ・ 「は・へ・を」の使い方を考えて、短い文を作ったり、作った文を比べ合ったりする。 ・ 説明文を読んで、考えたり感じたりしたことを文章に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ハンドベースボール ・ てつぼう ・ プールびらき
<ul style="list-style-type: none"> ・ 観察する対象をよく見て、ありのままに文章に書き、絵と照応させて観察記録文を書く。 ・ 読んだ本の登場人物に対して、手紙文の形式で感想文を書く。 ・ おてつだいの順序をたどって、会話文を入れて文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小鳥、ハムスター ・ おたまじゃくし ・ スイミー ・ 食器あらい、かいもの
<ul style="list-style-type: none"> ・ 手のはたらきについて取材し、分かったことを、初め・中・終わりのまとまりごとに文章に書く。 ・ 句読点やかぎかっこを使って文章を書く。 ・ 日時、場所、種目などを明示して、運動会へ来てもらうための招待状を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ にているところ、ちがうところ ・ 学会会への招待 ・ 音楽会への招待

月	題 材 名	時数	目 標
10 月	○ゆうびんきょく (見学して書く) ☆お手紙 ○詩を書く	6 2 3	・見学して見たことや、思ったことなどを文章に書くことができる。(生活科と関連させる。) ・物語を読んで思ったことを文章に書くことができる。 ・心に強く感じたことを詩に書くことができる。
11 月 ■	◎できるようになった (生活文) ※冬を見つけよう ○かん字のテスト (生活文)	5 2 4	・書くことを見つけて、時間的な順序を整理して文章に書くことができる。 ・主述の照応や修飾被修飾の関係に注意し、書くことができる。 ・経験したことをよく思い出して様子や気持ちが分かる文章を書くことができる。
12 月	◎うごくおもちゃ (説明文) ※ことばあそび	8 2	・おもちゃの作り方を説明する文章を書くことができる。 ・反対語や対照的に使われる語を書くことができる。
1 月	◎お話をつくろう (創作) ※かたかな	6 2	・想像を豊かにふくらませ、会話や気持ちを入れて文章に書くことができる。 ・かたかなで書くことばを集めて書くことができる。
2 月	◎くつあらい (生活文) ※なかよしポスト	7 2	・様子や気持ちが分かるように、したことの順序をたどって文章に書くことができる。 ・みんなに知らせたいことを書く。
3 月	○なかよしともだち (生活文)	3	・友だちとのやりとりの中で、よかったこと、楽しかったこと、助けられたことなどを書く。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・見学して分かったことや思ったこと感じたことを整理して文章に書く。 ・面白いと思ったことを文章に書く。 ・うれしかったこと、おどろいたこと、発見したことを詩に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・パン工場の見学 ・うちから学校まで ・スーホの白い馬
<ul style="list-style-type: none"> ・何ができるようになったかを見つけて、時間的な順序にしたがって書く。 ・学校の中に冬の訪れを発見し、文章に書く。 ・3回の漢字のテストをふり返り、会話や気持ちや行動を入れて文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・とび箱、マット、ボールなげ ・季節だより
<ul style="list-style-type: none"> ・材料や作る順序を正しく落とさずに、文章に書く。 ・反対語や対照的に使われる語を使って文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・山のぼり人形 ・かんぽっくり ・にていることば
<ul style="list-style-type: none"> ・風船になって空をとんでいったつもりになって、楽しい物語を書く。 ・かたかなで書く語の種類を分類し、それぞれの分類に合わせた語を集めて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・力太郎 ・四こままんが ・かたかなかるた
<ul style="list-style-type: none"> ・つめたい水の感触や、洗ったときの気持ちや靴洗いの順序などをくわしく書く。 ・知らせたいことを見つけて、いつ、どこで、どんなことがあったかが分かるように書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・お手つだい ・食器あらい ・おうちの人へ
<ul style="list-style-type: none"> ・会話を入れて文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・もうすぐ3年生

(3) 第3学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	○3年生になって (自分の考えを 書く)	1	・文章に書く必要のある事柄を選んで書くことができる。
	○原稿用紙の使い 方	1	・原稿用紙を正しく使って書くことができる。
	○楽しい遠足 (生活文)	4	・事柄ごとの区切りや中心を考えてから文章を書くことができる。
5 月	※自分の家までの 道順	2	・書こうとするものをよく観察し、必要のある事柄を選んで書くことができる。
	◎生活の中から (生活文)	8	・文章に書く必要のある事柄を選び整理してから書くことができる。
	※様子を表す言葉 を使って	2	・書こうとするものをよく観察してから書くことができる。
6 月	※ふしぎなくつ	2	・かぎ(「 」)や句点を適切にを使って書くことができる。
	◎今年初めての プール (手紙文)	4	・読み手によく分かるように、語と語や文と文との続き方に注意して文章を書くことができる。
	☆身の守り方をく らべて (説明文)	7	・書こうとするものをよく観察し、区切りや中心を考えてから正確に書くことができる。
7 月	※係活動の反省	3	・カタカナで書く語や学習した漢字を文章の中で正しく使うことができる。
	○学級じまんをし よう (紹介文)	6	・中心を考えてから自分たちの学級の長所や自慢などを紹介することができる。
9 月	○ジャングル探検 ごっこをしたこと (生活文)	5	・文章に書く必要のある事柄を選び整理して、区切りや中心を考えて書くことができる。
	☆調べたことを (説明文)	3	・聞いたり読んだりした内容から素材を見つけ、その素材を使って表現して試みるができる。
	※運動会の招待状	2	・自分の書いた文章を読み返して、間違いなどを直すことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ 3年生になった喜びややりたいことについて話し合い、書きたいことを選んで文章に書く。 ・ 表記上の約束にしたがって例文を視写する。 ・ 遠足で体験したことの中から一番心に残ったことについて、会話やカタカナで書く言葉を入れて文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 先生と出あって ・ わたしはこんな子です
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の家までの道順を、家庭訪問をする先生のために分かりやすく説明する文章を書く。 ・ 詳しく思い出す方法やメモの生かし方について学習してから書きたいことを見つけ作文を書く。 ・ 金魚の動きを見て、色・形・体の動きなどが分かるような言葉を使って文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家でのぼく、わたし ・ おてつだい ・ 学級園の草花
<ul style="list-style-type: none"> ・ 図工で書いたお話の絵をもとに絵の内容を想像し、会話文を入れてお話を書く。 ・ 教科書教材を読み、目的、内容、相手などをはっきりさせてから今年初めてプールに入ったことを手紙に書く。 ・ 教科書教材(説明文)を読んで説明文の文章構成の典型を知り、身の守り方という観点から、あげはちょうの幼虫の「色」「形」「もよう」「驚かし方」などについて観察し説明文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 暑中お見まい ・ わたしの1学期 ・ 魚の身の守り方 ・ 昆虫の身の守り方
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1学期に自分が担当した係活動を振り返り、仕事の内容や改善した方がよい所などを、2学期の担当者に伝えるために書く。 ・ 自分たちの学級の長所や自慢などについて話し合い、他の学級の友だちに紹介する文章を書く。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 体育館でジャングル探検ごっこをしたことを作文に書く。 ・ 身近なところで使われている絵文字を画用紙に描き、見つけた場所や絵文字の意味などが分かるように書く。 ・ 日程や自分たちの演技名、練習の様子などが分かるように運動会の招待状を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ さか上がり ・ なわとび ・ とび箱 ・ 授業参観のお知らせ

月	題 材 名	時数	目 標
10月	◎ひまわりの観察 (観察記録文) ※運動会	10 2	・ひまわりをよく観察し、区切りや中心を考えてから正確に書くことができる。 ・様子や気持ちが分かるように書くことができる。
11月	○読書週間によせて (読書感想文) ※感謝を言葉に ◎詩を書く (詩) ※わかりやすく書き直す	3 3 3 2	・読んだ内容について感想をまとめ、事柄と事柄との続き方を考えて読書感想文を書くこと。 ・敬体と常体との違いに注意しながら文章を書くことができる。 ・身の回りのことをよく見つけ、自分なりに発見したことを詩に書くことができる。 ・自分が書いた文章を読み返して間違いなどを直し、分かりやすい文章に書き直すこと。
12月	○見学したことを (見学記録文) ◎読書の広場 (紹介文)	5 3	・書く必要のある事柄を整理してから書くことができる。 ・読んだ内容について、感想をまとめて書くことができる。
1月	※冬休み新聞 ○冬の遊び (生活文) ※文をつなぐ言葉	2 4 1	・かぎ(「 」)を適切に使うとともに、その他の符号についても使い方を理解することができる。 ・事柄ごとの区切りや中心を考えてから文章を書くことができる。 ・文や文章の中における接続語や指示語の役割に注意して書くことができる。
2月	◎生活を見つめて (生活文)	7	・事柄と事柄との続き方を考えながら、様子がよく分かるように書くことができる。
3月	○このあたりのむかし (説明文) ※春を見つけた	7 3	・事柄ごとの区切りや中心を考えてから文章を書くことができる。 ・文章に書く必要のある事柄を選び整理してから書くことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ ひまわりの花や茎、根の様子を観察してメモを取り、組み立て表を作って観察記録文を書く。 ・ 運動会を振り返り、心に残ったことを文章に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学年園の草花 ・ 虫の観察 ・ 学芸会
<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本(「消防自動車ジュピタ」「どろんこハリー」など)を読んで内容について話し合い、感想をまとめて文章に書く。 ・ 勤労感謝の集会でプレゼントするために、お世話になった方々に感謝の気持ちが伝わるように手紙を書く。 ・ 詩を読んで表現の工夫に気付き、身の回りの事象を見つめて取材して詩を書く。 ・ 分かりやすい文章にするための推敲の観点について話し合い、それをもとに自分の文章を書き直す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ みどりのおばさんへ ・ 給食のおばさんへ ・ 2枚の写真をくらべて
<ul style="list-style-type: none"> ・ 工場見学のしおりにメモしたことをもとに、見学で学んだことを記録文に書く。 ・ 教科書教材を読んで良い紹介文の書き方について話し合い、自分が読んだ童話や詩などの紹介文を書いて発表し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 区内めぐりの記録
<ul style="list-style-type: none"> ・ 冬休みの生活の中から、心に残ったことについて新聞に書いて紹介し合う。 ・ はねつきやこままわしを行い、遊び方や楽しかったことが分かるように文章を書く。 ・ 接続語や指示語を使って短い文や文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年のめあて ・ かるた大会 ・ すごろく大会
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の生活の中から書きたいことを決め、それに関する事柄を取材し、様子の書き表し方を工夫して文章を書く。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 社会科で学習したことをもとに、地域の昔のことが分かるように説明文に書く。 ・ 校庭や学年園などを観察し、春の訪れを表すような事象を見つけて文章に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ むかしの生活 ・ むかしの道具 ・ 1年間を振り返って

(4) 第4学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	○4年生になって (自分の考えを 書く)	1	・4年生になっての自覚を持ち、心に強く思うことを選んで書くことができる。
	◎取材をしよう (生活文)	4	・学習や生活の中で心に強く感じたことを書き留め、作文の材料を選ぶときに役立てることができる。
	○春の遠足 (生活文)	3	・書く必要のある事柄の順序や軽重を考え、整理してから書くことができる。
5 月	※わたしは虫	2	・擬態語や擬声語を使って短い文章を書くことができる。
	◎しょうきゃく工場の見学 (見学記録文)	10	・見学したことから題材を選び、メモを生かして、中心のはっきりした客観的な文章を書くことができる。
6 月	☆キョウリュウを さぐる (説明文)	3	・聞いたり読んだりした内容から素材を選び、段落相互の関係に注意して、簡単な文章を書くことができる。 ・指示語や接続語に注意して書くことができる。
	※すきな写真	2	・中心点に分かるよう筋道立てて話すためのメモを工夫することができる。
	☆わたしの友だち (紹介文)	8	・友だちの性格や特徴が表れるように、中心点が明確な組み立てを工夫して文章を書くことができる。 ・いろいろな書き出しの方法を知り、書き出しを工夫して書くことができる。
	○プール開き (生活文)	1	・書き出しや様子を表す表現を工夫して書くことができる。
7 月	○心に残ったこと の感想を書こう (読書感想文)	3	・自分の考えをはっきりさせたりまとめたりしてから表現することができる。 ・書いた文章を読み返して間違いなどを直し、分かりやすい文章に直すことができる。
9 月	※実習生の先生へ の手紙	2	・文章の常体と敬体との違いを理解することができる。
	○運動会 (生活文)	3	・中心を明確にして書くことができる。
	○ドッジボール大会 (生活文)	6	・書こうとするものの中心点が明確になるように、組み立てを考えて文章を書くことができる。 ・書き出し文や、様子や気持ちの書き表し方を工夫できる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ 4年生になっての感想、やりたいことを書き出し、書くことを選んで書く。 ・ 学習や生活の中で発見したこと、思ったことなどをメモして作文に生かす。 ・ 心に強く感じたことを選んで書く。 ・ 会話や様子を表す言葉を入れて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ わたしのコマージュ （自己紹介） ・ 休み時間のこと ・ 春の運動会
<ul style="list-style-type: none"> ・ 春になって活動をはじめた草花や虫になって、「風はそよそよ」のような表現を入れた短い文章を書く。 ・ 見学して初めて知ったこと、大事なことを落とさずにメモする。 ・ 写真、資料、メモをもとに、見学記録文を書く。 ・ 見たり聞いたりしたことを、まとまりに気をつけて書く。 ・ 見学して心に残ったことも書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ かえるになって
<ul style="list-style-type: none"> ・ 書く必要のある事柄の順序や軽重を考え、整理してから書く。 ・ 教科書の説明文の書き表し方を参考にして、指示語・接続語を適切に使って書く。 ・ 順序、理由などを考え、筋道立てて話せるようメモを整理する。 ・ 友だちの特徴や性格を表したメモの中から、書き表したいことを選ぶ。 ・ 組み立てを工夫し、中心となる事柄を詳しく書く。 ・ 書き出し文を工夫して文章を書く。 ・ 書き出し文を工夫し、擬音や擬態語を効果的に使って様子を表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ ふしぎな植物 ・ 花の一日について知っていますか ・ すきなまん画 ・ うちのおとうさん ・ わたしの妹 ・ ぼくのペット
<ul style="list-style-type: none"> ・ 民話を読んでおもしろかったこと、民話に託された人々の気持ちについて考え、書こうとすることの中心点を明確にして書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ テレビを見て
<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物になって、文末表現に気をつけて手紙を書く。 ・ 中心点を明確にして、書き出しを工夫して書く。 ・ 書く必要のある事柄の順序や軽重を考えて書く。 ・ 書き出し文を工夫して文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お世話になった先生へ ・ 2学期の目当て ・ サッカー大会 ・ ボートボール大会 ・ 地域の祭り

月	題 材 名	時数	目 標
10 月	◎比べて考え、比べて表す (説明文) ※あったらいいな こんなもの	8 2	・事象を客観的にとらえて文章に書き表すことができる。 ・段落を考えて書き、また、段落と段落との続き方にも注意して文章を書くことができる。 ・なぜそう思うのか、理由がはっきり分かる文章を書くことができる。
11 月	◎組み立てを考えて (生活文)	12	・調べたり、考えたりしたことについて書きたいことをメモし、組み立てを考え、中心点がはっきりした文章を書くことができる。
12 月	○使い方を教える パンフレットを作ろう (説明文)	6	・指示語や理由を表す接続語を適切に使って、アルコールランプの使い方を教えるパンフレットを作ることができる。
1 月	○新年をむかえて (自分の考えを 書く) ◎詩の広場 (詩)	1 3	・表現することによって、自分の考えを整理することができる。 ・生活の中から素材を見つけ、詩に書くことができる。 ・自分の気持ちに合う表現を見つけて書くことができる。
2 月	☆わたしのすきな 遊び (紹介文) ◎4年1組物語 (創作文)	3 11	・段落を考えて書き、段落と段落の続き方にも気をつけて文章を整理して書くことができる。 ・文章の構成について知り、指示語・接続語を適切に使うことができる。 ・物事を立場を変えて見ることを通して、客観的に書き表すことができる。
3 月	◎げきの続きを創 ろう (創作文) ※こちらへどうぞ ○一年間をふりか えって (生活文)	8 1 2	・事柄を整理して書き方を考えて文章にすることができる。 ・必要に応じて丁寧な言葉を正しく使うことができる。 ・一年間の出来事の中から、自分にとって大切な出来事を選び、中心点のはっきりした文章を書くことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・身近な事柄を素材にして、二つの角度からとらえたメモを書く。 ・メモをもとに、二つの面を比べながら作文を書く。 ・教科書の接続詞の使い方を参考にして書く。 ・考えを整理し、はっきりさせて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・まん画の良い点悪い点 ・冬でも半ズボンがいいか ・タイムマシン
<ul style="list-style-type: none"> ・身近にあるものの中から、書きたいことを調べてメモする。 ・全体の組み立てを考え、内容を決める。 ・まとまりごとに段落を考えて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ふろしきを調べて ・まくらの起こり ・学芸会作品展
<ul style="list-style-type: none"> ・項目ごとに、書く必要のある事項を整理する。 ・絵や図を入れて、説明のパンフレットを書く。 ・なぜそうするのかを落とさず書き加える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の遊び ・跳び箱、マットの使い方
<ul style="list-style-type: none"> ・新年を迎えての決意や抱負の中からいくつか選び、まとまりを考えて書く。 ・生活の中の、心に残ったことなどから詩の素材を見つける。 ・自分の気持ちやその時の様子に合う言葉を見つけて表現を工夫する。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・例を挙げて説明する方法を取り入れ、好きな遊びについて説明する文を書く。 ・学級の中の出来事を思い出し、作文や物語に書くことを決める。 ・自分は何になるか立場を決め、取材する。 ・段落を考えて文章を書く。 ・書いた作文や物語を持ち寄って、文集にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラブ紹介 ・花びん、黒板になって ・卒業記念樹になって
<ul style="list-style-type: none"> ・劇の粗筋を考え、意見を出し合う。 ・出された事柄を整理して、中心点をはっきりさせて、順序よく続き話を作る。 ・お客さんに校内を案内する時を想定して文章を書く。 ・自分にとってどう大切なのかをはっきりさせて、段落を考えて作文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・校長室はこちらです

(5) 第5学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	○5年生になって (自分の考えを 書く)	1	・高学年としての自覚をもち、読み手に分かるように自分の考えをはっきりさせて書くことができる。
	◎新聞づくり (生活文)	3	・学習したことや日常生活の中で気付いたことを記録する習慣を身につけ、作文に役立てることができる。
	○春の遠足 (生活文)	2	・主題を考えて事柄を選び、段落のはっきりした文章を書くことができる。
5 月	※好きな言葉、好きな文	1	・視写することにより、表現の工夫を理解し、言語感覚を磨くことができる。
	◎わたしはこう考える (意見文)	7	・事象と感想、意見を区別して書くことができる。 ・要旨が明確に表れるような構成を工夫できる。 ・文章を読み返し、叙述の仕方について工夫できる。
6 月	◎文章の構成を考えて (紹介文)	2	・書き手の工夫について考え、作文を書くときに役立てることができる。
	☆誕生日の思い出 (生活文)	1	・教科書の作品の構成、比喩表現などについて考え、作文を書くときに役立てることができる。
	※発表原稿のメモ を取ろう	2	・自分の生活ぶりを発表するために、観点ごとに整理したメモを作ることができる。
7 月	○好きな本を読んで感想文を書こう (読書感想文)	3	・自分の考えを明確にし、構成を考えて文章を書き、さらに考えを確かに行うことができる。
9 月	☆わたしは鉛筆 (生活文)	3	・動きや様子を表す言葉や色彩語等について理解を深め、自分の文章に使うことができる。
	○運動会 (生活文)	2	・もっとも感動したことを整理して書くことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ 5年生になっての感想、やりたいことなどをメモし、構成を考えて書く。 ・ 作文に役立てるために、意見や気持ちを入れたメモを取り、作文に生かす。 ・ メモをもとに構成を考え、「うれしい」「楽しい」等の言葉を使わないで書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ わたしのコマースシャル （自己紹介） ・ 今日の出来事 ・ テレビや新聞から ・ 春の運動会
<ul style="list-style-type: none"> ・ 優れた文章、好きな文を視写し、自分の表現活動に役立てる。 ・ 体験の中から意見を述べるにふさわしい題材を選び、取材する。 ・ 事実と意見を区別してメモをする。 ・ 文章の構成を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ わたしの好きな詩 ・ 自然を大切に ・ 係の仕事をしてみて ・ 家族の一員として
<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本独特の遊びや物を紹介するパンフレットを呼び掛けや、問い掛けの文を入れて書く。 ・ 構成や叙述などの優れている点を参考にし、表現に生かす。 ・ 具体例や考え、意見の入ったメモを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 知っていますか、こんな遊びやこんなもの ・ わたしの願い ・ プール開き ・ 熱中していること ・ 委員会、クラブ紹介
<ul style="list-style-type: none"> ・ 本を読んで感じたこと、考えたことが明確に表れるように構成を考えて書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 読書紹介 （読書カードを書く）
<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の所持品になって周りを見つめたときの様子を、教科書の比喻表現を参考にして作文に書く。 ・ 事象と感想を区別して、中心のはっきりした文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2学期の目当て ・ 学芸会、作品展

月	題 材 名	時数	目 標
10 月	☆ちがった見方で (説明文)	4	・書き手の工夫について考え、作文を書くときに役立てることができる。
	○新聞を読んで (意見文)	3	・表現することによって、さらに自分の考えを確かにしていくことができる。
	※「けれど」と「だから」	2	・言葉の係り方や照応の仕方、文と文との接続関係について理解し、文や文章を正しく書き表すことができる。
11 月	◎構成を工夫して (見学記録文)	8	・観点ごとに整理し、構成を考えて記録文を書くことができる。 ・段落のはっきりした文を書くことができる。
■ 12 月	○とちの木的一年 (生活文)	6	・学校のシンボルツリー(とちの木)になって、見たり聞いたり思ったりしたことを、主題がよく伝わるように構成を考えて書くことができる。
	※読書メモをつけよう	1	・調べたことを、読書メモに再構成してまとめることができる。
1 月	○新年を迎えて (意見文)	1	・表現することによって、自分の考えを更に明確にすることができる。
	◎物語を作ろう (創作文)	5	・豊かに想像を広げて、構成のはっきりした物語を作ることができる。
2 月 ■	◎詩の広場 (詩)	3	・強く感動したことに目を向け、表現を工夫して詩を書くことができる。
	○ぼくたちわたしたちを考える (意見文)	6	・事実と意見、感想を区別し、説得力のある意見文を書くことができる。 ・文と文の意味のつながりを考えて、指示語や接続語を使うことができる。
3 月	※全然いい?	1	・語句の係り方や照応の仕方の正しい文を書くことができる。
	○一年間を振り返って (生活文)	3	・自分との関わりを考えながら、要旨のはっきりした文章を書くことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・生活に役立っているものを見つけ、形の特徴や良さを考えて作文に書く。 ・主題や要旨をまとめ、それに対しての自分の感想を整理して書く。 ・「けれど」「だから」「ので」「なぜなら」等を使って、短文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・紙と生活 ・ろうそく ・しゃもじ ・学校に遊び道具を持ってきてもいいか
<ul style="list-style-type: none"> ・観点を決めて取ったメモをもとに、構成を考えて書く。 ・必要に応じて、図や表、見出しを工夫して書く。 ・事象と感想・意見を区別して書く。 ・書いた文章を読み返し、叙述の仕方について工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見学新聞を書く
<ul style="list-style-type: none"> ・校庭のどちの木になって学校生活を見つめ、見たり聞いたり思ったりしたことを取材する。 ・主題がよく伝わる構成を工夫する。 ・様子がよく分かるように、表現を工夫して書く。 ・分かったことを要約して読書メモに書き留める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板の一年 ・この本読んでみませんか
<ul style="list-style-type: none"> ・新年を迎えての決意や抱負を、なぜそう思うのか、理由をはっきりさせて書く。 ・絵や写真を見て想像をふくらませ、物語の年代や登場人物を設定する。 ・構成を考えて、粗筋を作る。 ・書いた文章を読み返し、叙述の仕方を工夫する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・わたしの夢 ・ことわざのお話づくり ・わたしが行った不思議な国
<ul style="list-style-type: none"> ・叙述（連の構成、名詞止め、繰り返し、対比、比喩等）を工夫し、感動が読み手に伝わる詩を作る。 ・出来た詩を詩集にまとめる。 ・「この頃の子供は」という投書について意見を持ち、裏付けとなる事実を取材する。 ・段落相互の関係を考えて指示語や接続語を使い、事実と意見、感想を区別して意見文を書く。 ・意見発表会を開く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・こういう意見があるけれど ・友だちについて考える
<ul style="list-style-type: none"> ・語句の係りや照応を正しく使って文を書く。 ・一年間の生活の中で、強く印象に残っていることを見つけ、自分にとってどんな関わりがあったかを考える。 ・主題や要旨がはっきり表れるような構成を工夫する。 ・文集作りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・委員会活動から学んだこと

(6) 第6学年

月	題 材 名	時数	目 標
4 月	○6年生になって (自分の考えを 書く)	1	・読み手に分かるよう、要点をまとめて書くことができる。
	◎日記を書こう (日記)	4	・日記の内容・形式を理解し、事象と感想、意見などを区別して書き表すことができる。
5 月	◎考えを深めて (意見文)	7	・根拠となる事象を集め、表現することでさらに自分の考えを深めることができる。
6 月	※移動教室報告会	2	・読み手に分かるよう、簡単に書いたりくわしく書いたりすることができる。
	○目的に応じて (説明文)	6	・文や文章にはいろいろな構成があることについて理解を深め、目的に応じて文章表現を工夫することができる。
7 月	※七夕について	2	・聞いたり読んだりした内容について、目的に応じて再構成して文章表現することができる。
9 月	※夏休みの思い出	2	・目的に応じて、文や文章の組み立ての効果を考えたり、文章全体の流れを考えたりして書くことができる。
	◎調査したことを まとめて (発表原稿)	7	・目的に応じて必要な事柄を集め、全体を見通し整理してから書くことができる。
10 月 ■	※スポーツニュー ス連合記録会	2	・全体の構成を考え、目的に応じて簡単に書いたりくわしく書いたりすることができる。
	○2010年への旅 (創作文)	7	・20年後の自分の姿や生活ぶりを想像し、情景描写を工夫して作文を書くことができる。 ・自分の書いた文章を読み返し効果的な叙述の仕方について工夫することができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活を顧みて、6年生での目当てを文章の中心に位置付けて書く。 ・身近な出来事を想起し、事象と感想、意見を区別して文章に書き表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな言葉 ・わたしの願い
<ul style="list-style-type: none"> ・6年生になってからの生活の中から楽しい学校にするために必要な事柄を集め、根拠となる事象と感想、意見などを区別して文章に書き表す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活を見つめて
<ul style="list-style-type: none"> ・移動教室で体験したことを下級生に報告するために文章に書き表す。 ・自分が書こうとする内容にふさわしい文章の種類や構成で書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・遠足
<ul style="list-style-type: none"> ・七夕のいわれや起こりなどについて調べ、説明文に書く。 	
<ul style="list-style-type: none"> ・自由研究や読書、旅行など夏休みに体験したことを回想し、報告し合うために文章を書く。 ・グループごとにテーマを決めて調査したり研究したりした事柄を整理し、分かりやすく発表するために発表原稿にまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の目当て
<ul style="list-style-type: none"> ・陸上記録会での自分の活躍ぶりをスポーツ新聞の形式で3人称で書く。 ・20年後の自分の生活ぶりを想像して楽しみながら感情豊かに文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の運動会

月	題 材 名	時数	目 標
11 月	※クラブの紹介をしよう	3	・読み手が分かりやすいように、文や文章の組み立ての効果を考えて書くことができる。
	○卒業記念文集	5	・目的に応じて、文や文章の組み立ての効果を考えたり、文章全体の流れを考えたりして書くことができる。
	※慣用句を使って	2	・文や文章にはいろいろな構成があることについて理解を深めることができる。
12 月	○社会科見学 (見学記録文)	3	・見学記録文を書くために必要な事柄を整理して書くことができる。
1 月	※お正月の過ごし方	2	・聞いたり読んだりした内容について、目的に応じて再構成して文章表現することができる。
	☆わたしの宝物 (生活文)	3	・目的に応じて必要な事柄を集め、全体を見通してから書くことができる。
■ 2 月	○友だちについて考える (意見文)	8	・主題や意図をはっきりさせ、文章表現することによってさらに自分の考えを深めることができる。 ・根拠となる事象と感想、意見を区別して文章に書くことができる。
3 月	◎詩の広場 (詩)	2	・構成や言葉づかいを選んで書き、さらにより詩になるように練ることができる。
	※感謝を言葉に	2	・文章の敬体と常体との違いに注意しながら書くことができる。 ・自分の書いた文章を読み返して、間違いなどを直すことができる。

主 な 学 習 活 動	教 材 例
<ul style="list-style-type: none"> ・ クラブ発表会のときに配布するクラブ紹介のための文章を書く。 ・ 6年間の歩みを振り返り、印象に残ることについて様々な文種で文章を書く。 ・ 慣用句を使って短い文や文章を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 委員会の説明 ・ 学級じまん ・ 思い出を「巻き物」に
<ul style="list-style-type: none"> ・ あらかじめ決めておいた取材の観点にしたがって、社会科見学の見学記録文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 最高裁判所について ・ 科学移動教室の報告
<ul style="list-style-type: none"> ・ 昔と今の正月の遊びや生活の違いについて、家の人に聞いたり調べたりしたことを書く。 ・ 「わたしの宝物」を書くために自己の生活を振り返り、必要な事柄を集めて文章に書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ お雑煮について ・ 年末年始今昔 ・ 心に残った言葉 ・ □□先生の言葉
<ul style="list-style-type: none"> ・ 作文についてこれまで学習してきた技能を生かして、自己の体験をもとに友だちについて考え、意見文を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 小学生らしいということについて
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級内でコンクールをするために、感動したり心に残ったりしたことをもとに詩を書く。 ・ 卒業を目前に控え、これまでお世話になった方々に感謝の気持ちを伝えるために手紙を書く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ みどりのおばさんへ

4. 年間指導計画作成上の留意点

作文の年間指導計画作成に当たっては、特に次の点に留意する必要がある。

(1) 国語科における作文指導の位置付け

作文指導を進める際、作文の年間指導計画だけを考えるのではなく国語の年間指導計画における作文指導としての位置付けを踏まえることが大切である。説明的文章や文学的文章の読みの指導及び音声言語による表現の指導をも考慮して年間指導計画を考える。

作文以外の国語の指導の単元や教材を見通すと、説明的文章や文学的文章の読みの指導と関連して作文指導をすることが有効な場合がある。教科書のコラムの指導と関連した作文指導が有効な場合もある。それらを踏まえて、児童が最も自然にしかも意欲的に学習できるよう指導計画を工夫する。

作文指導に熱心なあまり、作文の学習指導のみに視点を当てて考えるのではなく、国語科の学習指導全体を見通して、作文の年間指導計画を作成する。

(2) 学校行事や地域の行事及び他教科等との関連

効果的な作文指導には、書く意欲を喚起する題材が必要である。書く意欲を喚起する題材は学校や地域の実態、児童の生活全体をも視野に入れて求めることになる。年間指導計画作成に当たってどのような学校行事があるか、どのような行事を地域で体験しているか、他教科で何を学習しているか等題材を広い範囲から探すのである。

行事作文と言われ、学校行事について書くのは悪いことのように考えるのは、目標や指導法が問題なのである。学校行事は、それが例えば毎年実施されるものであっても、児童にとってはその学年における新鮮な体験であることが多い。何時、どのような目標で、どのように指導するかを明確にすればよい題材になり得るものである。又、国語科以外の教科における学習も作文の題材としてふさわしいものは、積極的に取り上げる。

(3) 系統性発展性及び指導の重点

年間指導計画を作成する際、ともすると指導事項をあれもこれも盛り込み、時間数が足りなくなる。これは、教科書を調べたり特設単元を設定したりしているうちに取捨選択をすることができなくなるためである。

指導の偏りを避けるために、6年間を見通して系統性発展性を考えるとともに、児童の実態に即して重点の置き方を工夫する。例えば、読書感想文の指導は2・4・6年で重点的に行い、1・3・5年では異なる文種に指導の重点を置く。あるいは、手紙文の指導は3・4年だけつまり中学年で集中して指導する等である。指導計画全体が、調和のとれたものであると同時に児童の実態に即したものでなければならない。

系統性発展性と指導の重点は、児童の実態から考えるのである。

V 作文教材の開発と指導法の工夫

1. 筋道を考えて書く

論理的な思考力を養うことは、これからの社会の変化に主体的に対応していくために極めて大切であるといわれている。表現力では「自分の考えをはっきりさせたり、まとめたりしてから表現すること」「自分の考えを明確にし、表現することによって更に考えを確かめること」「主題や意図をはっきりさせ、表現することによって更に自分の考えを深めること」等の力をつけることが掲げられている。

筋道立った、論理的な文章を書くという学習を、児童の発達段階に応じて年間指導計画の中にしっかり位置付けていくことが大切である。筋道を考えて書くための教材としては、説明的文章が適しているといえよう。説明的な文章について、できるだけ多くの種類の文章を書く学習を経験させたい。例えば、説明文（作り方・使い方・遊び方等）・意見文・紹介文・見学記録文・報告文・写生文等があげられる。

指導方法の工夫としては、次の点に配慮していきたい。

- ① 学習の目標をしっかりとつかませる。（筋道を考えて書くことに関する目標）
- ② 相手意識・目的意識を持たせ、意欲づけを図る。（だれに、何のために）
- ③ 学習過程の中で、目標に照らして学習が進んでいるか、常に振り返らせる。
- ④ 筋道を考えて書くことへの抵抗のある児童へ、個別指導を充実する。
- ⑤ 毎時間、評価を行い、意欲を喚起する。
- ⑥ 作文の基本となる例文を示す。（できれば、児童の実態に応じたものを数種類）
- ⑦ 記述の途中で何回か、友達同士で読み合い、互いによいところを認め合い自分の作文に生かすようにさせる。
- ⑧ 記述後の推敲は、項目をしぼり、目標に即したもので行わせる。
- ⑨ 完成した後の活用を図り、次への意欲づけを行う。

作文を苦手としている児童にとっては、典型的な文章、実用的な文章から学習することにより、自信をつけ、作文への興味を持つことへと発展できるのである。又、高学年になるにしたがって、「書くことは考えること」という視点を持たせて、自分の考えをまとめてから読み手に伝えるため（理解してもらうため）の表現の工夫へと段階を高めて行きたい。

どちらの場合についても、まず、書くことに値する題材、書きたいと思う題材を設定することが前提となる。以下、各学年ごとに教材と指導の例を掲げてあるので、これらを十分参照して実際の指導に生かして欲しい。その際、児童の実態によって、適宜教材の内容を変更する等手を加えたと一層の効果があろう。

(1) 第1学年の教材と指導

読解から作文へ ————— 説明文を書く

題材名 「はたらく じどう車」

① 目標

- ア. 自動車には、いろいろなものがありそれぞれの機能やつくりによって、使い道が違うことを理解できるようにする。
- イ. いろいろな自動車をよく見て、使う目的、つくり、動きなどを考え文章に書くことができるようにする。
- ウ. 「ですから」を適切に使って、文と文とのつながりを考え説明する文章を書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

1年生の児童にとって、自動車は身近な乗り物である。バスに乗った経験は、大部分の児童がしているであろうし、消防自動車を見ている児童も大勢いるであろう。しかし、それらの自動車を当り前の乗り物として見ているに過ぎない。

そこで、それぞれの自動車には運ぶ人や物によって使う目的があること、その目的に合ったつくりをしていること、つくりにあった動きをすることに気付かせたい。そのような自動車の見方は、自動車を「使う目的」「つくり」「動き」の三つの観点から見ることである。一見同じ自動車であるが、それを三つの観点からよく見るとそれぞれが異なる。日常何気なく見過ごしているものを、よく見詰め直してみると発見がある。

三つの観点から見て、その観点に沿って考えるのは論理である。1年生なりに、論理的な思考を働かせて、発見し気付いたことを説明する文章に書くために本題材を設定した。

教科書の説明文教材に「はたらく じどう車」がある。これを読む過程で、三つの観点を理解させ、基本文型を指導した。

ア. 読みで指導する内容

教科書の説明文教材は、バス／キャリアカー／ロードローラー／ポンプ車の4種類の自動車を取り上げている。その中からバスの説明文を例にして、作文を書くための指導をどのように進めるかを述べる。なお、取り上げた教科書の説明文教材は、K社のものであるが他社の同じような自動車についての説明文教材でも、読ませ方の指導を工夫することによって作文教材として十分に使用できる。

バスの説明文は、三つの段落からなる。

初めの1段落は1文で、「～は、～です。」の基本文型であり、文の内容はバスの役割、つまり使う目的を説明している。

2段落めは、2文であり、「ですから」という接続語によって文と文をつなぎ、文の内容はバスのつくりを説明している。

3段落めは、1文で、バスの動きを説明している。

実際の教材文を下記の枠内に、各段落で指導することをその右に示す。(さし絵は省略)

バスは、おおぜいの お
きゃくを のせて はこぶ
じどう車です。

ですから、たくさんの
ざせきが あります。つり
かわや てすりも ついて
います。

バスは、きまった じこ
くに、きまった みちを
はしります。

1段落

- ・基本文型「～は、～です。」
- ・基本文型を使って、いろいろな車の使用目的を述べる。

2段落

- ・接続語「ですから」の使い方
- ・接続語「ですから」を使って、いろいろな車のつくりを述べる。

3段落

- ・いろいろな車がそのつくりから、どんな動きをするかについて述べる。

バスの説明文だけでなく、キャリアカー／ロードローラー／ポンプ車のいずれの文章も3段落からなっている。そして、いずれの文章も1段落は1文で基本文型「～は、～です。」の形となっていて、それぞれの役割つまり使う目的を説明している。又、ロードローラー／ポンプ車の2段落めは接続語「ですから」を使って書かれ、いずれの文章も2段落ではそれぞれのつくりを説明している。さらに、いずれの文章も3段落めはそれぞれの車の使用目的とそのつくりにあった動きを説明している。キャリアカーについては、3段落めに接続語「ですから」を使って説明している。

いずれの自動車も、1段落は役割つまり使う目的を説明し、2段落では目的に合ったつくりを説明し、3段落ではつくりにあった動きを説明している。

文章の内容を読み取る過程で、このような叙述であることに気付かせる。

イ. 自動車をよく見る

児童は、様々な自動車を日常の生活で見ている。しかし、何気なく見過ごしていることが多い。例えば、パトカー、タクシー、救急車、ダンプカー等について使用目的やつくりや動きの

一つ一つは知っていることが多い。パトカーがサイレンを鳴らして走る様子を見たり、タクシーに乗ったことがあったり、あるいはダンプカーが砂利を積んで走る様子を見たりしている。しかし、それらの自動車について「使用目的、つくり、動き」の視点を関連付けて見ることはしていない。

読み取りの過程で、その見方を指導するのである。児童は、改めて一つの自動車をその目的、つくり、動きの視点から見つめ直すことになる。自動車をただ「パトカーが走っている。」とか「救急車だ。」とか見ているに過ぎない。自動車を「使用目的、つくり、動き」の視点で見ることは、筋道を立てて見る一つの見方である。見る対象は、自動車であるが1年生なりの筋道を立てた見方であり、こうした見方を育てることが論理的に物事を見る見方につながっていく。つまり、1年生に論理的な思考力の育成を目指して指導するのであり、そのためには様々な自動車を児童がじっくりとよく見るようにする。

③ 学習指導過程（3時間扱い 本時2/3時間 ただし読みに要した時間は省く）

ア. 自動車について書く目当てを持ち、どんな自動車があるかどんな自動車について書きたいか、またどんな自動車なら書けそうかを話し合う。 <1時間>

イ. 自分の好きな自動車について、使う目的、つくり、動きなどを考え、接続語「ですから」を適切に使って文章を書く。 <1時間・本時>

ウ. 書いた文章を読み返し、必要があれば直すなどして友達と読み合う。

<1時間>

④ 本時

ア. 目標

自動車についてその使用目的、つくり、動きを筋道立てて文章に書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 本時の学習の目当てをつかむ。		・ はたらく自動車について書くことを確認する。
② 自分が書こうと思う自動車について、「その使用目的、つくり、動き」を、接続語「ですから」を使って発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的、つくり、動きの視点を押さえること。 ・ 基本文型を使うこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予め用意した自動車の絵を児童の発表に合わせて提示し意欲を喚起する。

<p>③ 「はたらく じどう車」について、文章を書く。</p> <p>④ 書けた部分を読み合い、自分の文章と比べる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 接続語「ですから」を正しく使うこと。 ・ 基本文型を使って目的を書くこと。 ・ 自動車のつくりを書くこと。 ・ 自動車の動きを書くこと。 ・ 接続語「ですから」を正しく使って書くこと。 ・ 自分の書いた文章を読み返し、間違いなどに注意すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目的については「～は、～です。」の形で発表させる。 ・ 「ですから」は、正しく使えばどこにあってもよしとする。 ・ 書けない児童には、好きな自動車を挙げさせその自動車について「目的、つくり、動き」を考えさせ、個別に指導をする。 ・ 書ける児童には、書いた文章を読み返すよう指導する。 ・ 一つの自動車について正しく書きあげ、更に書きたいという場合は別の自動車について書かせてもよい。
--	---	---

ウ. 評価

「はたらく じどう車」について、筋道立てて文章を書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 読みの指導との関連

児童は、「知っている。」「見たことある。」などと言いながらこの説明文を喜んで読む。基本文型については、バス／キャリアカー／ロードローラー／ポンプ車のそれぞれの読みの過程で、第1文を視写させ意識付けた。

「バスは、おおぜいの おきゃくを のせて はこぶ じどう車です。」

「キャリアカーは、車を はこぶ じどう車です。」

「ロードローラーは、じめんを たいらに かためる じどう車です。」

「ポンプ車は、火じを けす ときに つかう じどう車です。」

上記の4文を読み、視写することで自動車の役割つまり使用目的が「～は、～です。」の文で書かれていることを理解させたのである。

そのとき、一部の児童は「救急車は、病人を運ぶ自動車です。」とか「パトカーは、犯人を

追いかける自動車です。」などと言う。作文を書くためには、それを大事にしたいが読みの学習を進めている過程では、読みを確実にすることが目的であるので一部の児童の言葉に振り回されることのないようにする。ただし、せっかく気付いた児童の発言を否定するのではなく認めてやることは大切である。

接続語「ですから」については、バス／キャリアカー／ロードローラー／ポンプ車のそれぞれの読みの過程で、車の役割つまり使用目的に合ったつくりになっていることを読み取らせた。

おおぜいの おきゃくを のせて はこぶ じどう車 ———— ですから「こんなつくり」

車を はこぶ じどう車 ———— ですから「こんなつくり」

じめんを たいらに かためる じどう車 ———— ですから「こんなつくり」

火じを けす ときに つかう じどう車 ———— ですから「こんなつくり」

接続語として指導するのではなく、「ですから」の前の文の内容と後の文の内容がどのようになっているかを読み取らせることで、「ですから」の使い方を理解させた。

車の動きについては、バス／キャリアカー／ロードローラー／ポンプ車のそれぞれの読みの過程で、使用目的やつくり合った動きであることを読み取らせた。

バス

おおぜいの おきゃくを のせて はこぶ じどう車

- ・ おおぜいの人、何処から乗ればいいのか考える
 - ・ おおぜいの人、何時乗ればいいのか考える
 - ・ おおぜいの人、自分の行きたい所に行ける
- バス停の役割が分かる

「きまった じこくに きまった みちを はしります。」の必要性を読み取る。

キャリアカー

車を つむ ところが たいてい 2 だん

- ・ 車が車を運ぶには、どうすればいいか考える ———— 引っ張る
- ・ 車が車を運ぶには、大きさが必要ではないかと考える
- ・ 1 だんと 2 だんでは、どちらがうか考える

「車を 一どに なんだいも のせて はこぶ ことが できます。」の有効性を読み取る。

ロードローラー

じめんを たいらに かためる じどう車

てつで できた、おもい 大きな 車

- ・ 地面を平らに固めるには、重さが必要ではないかと考える
- ・ 重さが必要であるので、鉄でできているのだと分かる
- ・ 地面を平らに固めるには、重さがあることだけでいいか考える

「ゆっくり いったり きたり して どうろなどを たいらに かためます。」の必要性や有効性を読み取る。

ポンプ車

火じを けす ときに つかう じどう車

ホースや はしごを つんで / ホースを はこぶ 車も のせて

- ・ 火事はどのようにして消すか考える
 - ・ ホースやはしごは、どのように役立つか考える
 - ・ ホースを運ぶ車の役割を考える
- 水を運ぶ

「火じばでは、いけや しょう火せんなどから 水を すい上げて、火を けします。」の必要性や有効性を読み取る。

イ. 作文の記述前の指導

教材の全文を読み取った後、教材に書かれた論理を生かし作文力の育成を目指して作文の単元を設定した。児童は、次のような自動車をあげた。

タクシー、トラック、ダンプカー、救急車、パトカー、冷凍車、ジープ、
観光バス、コンクリートミキサー車など

児童は、自分の知っている自動車を次々にあげるが、そのつくりや動きを具体的によく知っていないと作文に書くことができない。第1時では、これなら書けると思う自動車について、その使用目的、つくり、動きを「ですから」を使って口頭で十分話させた。

一人一人の児童の見方は、それぞれ異なる。同じタクシーを取り上げても車体の上に付いている会社名の表示に目を向けて、それが夜間には他の車と判別しタクシーであることを明示する明かりになっていると気付く児童、料金を表すメーターボックスに目を向けて、それが走行距離によって料金を明示する仕組みになっていると気付く児童など様々である。

どの自動車をとりあげてもよいとしたが、その自動車について使用目的、つくり、動きをよく知っていないと書くことができない。安易に好きだからというだけで取り上げることのないよう、丁寧な個別指導が必要である。

それぞれの自動車について使用目的、つくり、動きの三つの視点で見ると、1年生にとって容易なことではない。例えば、児童が口頭で発表した内容に次のようなものがある。

タクシーは、ひとが いきたい ところへ いく とき つかう じどう車です。
 ですから、おかねを はらう きかいを つけています。
 どうろの あっち こっちを はしって います。

第1文と第3文は、論理的につながるが、第2文はこのままではつながらない。第2文を生かすならば、第3文は「走った分の料金がすぐ分かりそれを支払える」という内容にしなければならない。こうした論理性に気付かせるよう指導した。

ウ. 記述の指導

児童が、よく考えて論理をたどって書いたものは、多少の言葉の拙さを云々することはせずできるだけ認めてやるようにした。例えば、次のようなものである。

タクシーは、おおぜいで ない ひとを はこぶ じどう車です。
 タクシーの やねには、しかくっぽいものが ついて いて よるには でんきが つきます。
 ですから、よるでも ひとが とおくで よくわかって てを あげて とめる ことが できます。

第1文が、「タクシーは、流して客を求め、移動する車である」ことが書かれれば完璧であるが、そこまで1年生に求めるのは無理と考え、これを十分認めたのである。

又、語彙が少ないため言葉として熟さない文言を使うことがある。それも、そのまま認めてやった。例えば、次のようなものである。

タクシーは、ひとが いきたい ところへ いく とき つかう じどう車です。
 タクシーの中には、おかねを いくら はらえば いいか わかる きかいが ついて います。
 ですから、いきたい ところで けいさん しないで おかねを はらえます。

バトカーについて

○ バトカーは、じけんがあるとき その ばしょへはやく、いく じどう車です。

あかい ひかりを びかびか させて さいれんをならして はしります。

ですから、いそいで はしって いることが みんなに わかって ほかの 車が よけて くれて はやく はしる ことができます。

冷凍車について

○ 冷凍車は、つめたい たべものを はこぶ じどう車です。

車は、おおきな はこに なって いて なかが つめたく なっています。

ですから、なつ でも つめたい まんまの たべものを うちまで はこんで くれます。

ジープについて

○ ジープは、やまの みちを ずんずん のぼることが できる じどう車です。

車は、てつで できていて じょうぶな たいやがついています。

ですから、やまみちで こうじを するとき こうじを する ひとが のって いきます。

観光バスについて

○ 観光バスは、えんそくや りょこうに いくとき おにいちゃんや おばあちゃんが のる じどう車です。

ですから、たくさんの ざせきが あります。つりかわは、いらぬから ありません。

観光バスは、みんなが すわって いるので くれて いくところまで いかれます。

コンクリートミキサー車について

○ コンクリートミキサー車は、コンクリートをはこぶ じどう車です。

ですから、コンクリートを まぜるように なっています。

それで、こうじを している ところで おろして すぐに コンクリートを つかいます。

タクシーについて

○ タクシーは、ひとを いきたい ところへ はこぶ じどう車です。

タクシーは、どあが じどうで ひらいて のれる ように なって います。

ですから、おりる ときに どあを あけないでいいです。

トラックについて

○ トラックは、にもつを たくさん はこぶ じどう車です。

ですから、にもつを のせる ところが ひろく なっています。

ですから、ひっこしの とき いっぱい にもつを はこんで あたらしい うちまで はしります。

○ トラックは、いろいろな ものを はこぶ じどう車です。

ですから、うんでんする せきは せまいけど ものを のせる ばしょは ひろいです。

そのため、びあのを かった ひとに うちまで びあのを とどけて くれます。

ダンプカーについて

○ ダンプカーは、すなや だろを はこぶ じどう車です。

車は、てつで できて いて、たいやが たくさん ついて いて、すなや だろを のせる ばしょが さかに なります。

ですから、おろす とき しゃべるを つかわないで さかに して ざあっと おろせます。

救急車について

○ 救急車は、けがを した ひとを はこぶ じどう車です。

救急車は、さいれんを ならして はしります。ですから、ほかの 車が とまって くれてはやく びょういんに いかれます。

○ 救急車は、きゅうびょうの ひとを はこぶ じどう車です。

車には、べつとが ついて います。ですから、ねた まんまで びょういん まで いきます。

△資料ページ▽

教育出版 一年教材 「はたらくじどう車」より さし絵は省略

はたらくじどう車

じどう車には、いろいろな があります。人
 や ものを はこぶ じどう車、こうじに つかう
 じどう車、火じや じけんが おきた ときに つか
 う じどう車などです。

バスは、おおぜいの お
 きやくを のせて はこぶ
 じどう車です。
 ですから、たくさんの
 ざせきが あります。つり
 かわや てすりも ついて
 います。
 バスは、きまった じこ
 くに、きまった みちを
 はしります。

キャリアカーは、車を
 はこぶ じどう車です。
 車を つむ とこが、
 たいてい 二だんになっ
 て います。
 ですから、車を、一どに
 なんだいも のせて はこ
 ぶ ことが できます。

ロードローラーは、じめ
 んを たいらに かためる
 じどう車です。
 ですから、てつで でき
 た、おもい 大きな 車を
 つけて います。
 ゆっくり いたり き
 たり して、どうろなどを
 たいらに かためます。

ポンプ車は、火じを け
 す ときに つかう じど
 う車です。
 ですから、ホースや は
 しごを つんで います。
 また、ホースを はこぶ
 車も のせて います。
 火じばでは、いけや
 しょう火せんなどから 水
 を すい上げて、火を け
 します。

(2) 第2学年の教材と指導

よく考えて ————— 説明文を書く

題材名 「手の はたらき」

① 目標

- ア. 手のはたらきにはいろいろあり、持つ、投げる、など自分のための行為のほか、他人との関わりにも手のはたらきがあることを理解できるようにする。
- イ. 手のはたらきを考えて、どんな時どんな仕種をするか、それはどんな意味があるかを文章に書くことができるようにする。
- ウ. 「始め、中、終わり」の順序をたどって、文と文とのつながりを考え説明する文章を書くことができるようにする。

② 主題設定の理由と取り扱った教材

わたしたちは、日常生活で手を使うことが多い。顔を洗うにも、食事をするにも手を使う。友達と遊んだり、物を書いたりするとき、あるいは遠くに離れている人に何かの合図をするにも手を使う。

手を使うことは、まったく当たり前のこととなっている。そこで、2年生の児童に当たり前としている「手の はたらき」について見つめ直させ、改めて気付いたことを文章に書く場を設定する。具体的な生活経験と結び付けて考えることにより、児童は様々な「手の はたらき」を再発見するであろうと思われる。

ア. 「手の はたらき」について体験をする。

教室の一部に、コーナーをつくる。折り紙やひごを置き「折る」仕種、スタンプやパンチを置き「押す」仕種、はさみを置き「切る」仕種、人形やぬいぐるみを置き「抱く」仕種、豆や小石を置き「つまむ」仕種、粘土を置き「まるめる」仕種などの活動を体験させる。そして、具体物との対応をしながら「手の はたらき」にはいろいろあることに気付かせる。

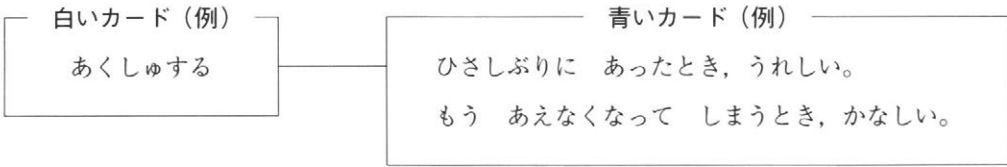
戸外に出て、友達と様々な遊びをして、どんなときどのように手を使うか体験をする。じゃんけん、ボール投げ、鉄棒、なわとびなどのほか、手を振って遠くの友達を呼ぶなどの遊びをする。

イ. 「手の はたらき」について考える。

「折る」「押す」「切る」「抱く」「つまむ」「まるめる」「じゃんけんをする」「投げる」「つかむ」「あくしゅする」「手を振る」など、手のはたらきごとにカードを書く。どんな手で「どう

する」という形で白いカードに書く。

それぞれのカードに合わせて、「そのとき、どのような気持ちだったか」を考えて青いカードに書く。



カードに書くことによって、手はどんなときどのような職種をするか、それはどのような気持ちを表すかを考える。

自分のカードと友達のカードとを比べ、手はいろいろなはたらきをしていることに気付き、更に考えられる手のはたらきを探す。

ウ. 文章の書き出し部分を工夫する。

「手の はたらき」の書き出し部分を考えて書く。次に、例を示す。

わたしたちは、手のはたらきを しらべました。さいしょは、すこししかないと思いましたがたくさんありました。
手は、どんなはたらきをしているのでしょうか。

みなさん、手にはいろいろなはたらきがあります。ほくたちは、手のはたらきをしらべました。手は、休まずにとりほどはたらいています。
では、それを書きます。

③ 学習指導過程 (6時間扱い 本時2/6時間)

ア. いろいろな手のはたらきを体験し、手は様々なはたらきをしていることに気付いて書く意欲を持つ。 <1時間>

イ. 作文を書くために体験をカードに書き、どんなときどのように手ははたらいているかを考えて、作文を書くために必要な事柄を集め、選ぶ。 <2時間・本時はその1時間>

ウ. 書き表し方を考え、選んだカードをもとに記述する。 <2時間>

エ. 書いた作文を読み直し、手のはたらきにふさわしい絵を描いたり表紙をつけたりして、互いに読み合う。 <1時間>

④ 本時

ア. 目標

自分の体験した手のはたらきを、色別カードに書いて手の様々なはたらきを考えることができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 本時の学習の目当てをつかむ。	<ul style="list-style-type: none"> 手のはたらきについてカードを書くこと、書いて友達に伝えること。 	<ul style="list-style-type: none"> 白のカードに、具体的な手の仕種を書き、それを作文に生かすことを意識させる。
② 手の仕種について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 手のはたらきは、沢山あること。 	<ul style="list-style-type: none"> 一人一人の考えをひき出すために話し合うので、短時間にする。
③ 手の仕種を白いカードに書く。	<ul style="list-style-type: none"> 手のはたらきの重要さに気付くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> カードの書き方を示範し総ての児童に書き方が分かるようにする。
④ カードに書いた言葉を発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 自分の書いた言葉と比べること。 	<ul style="list-style-type: none"> 板書していきながら、気持ちが表れる言葉に留意する。
⑤ 手の仕種が、どんな気持ちを表すか考える。	<ul style="list-style-type: none"> 手のはたらきと、心の動きに気付くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> チョークの色を変えて、先の板書に書き加え、手の仕種とそのときの心情に気付かせる。
⑥ 白いカードに書いた言葉の手の仕種に、どんな気持ちが込められているかを考えて、青いカードに書く。	<ul style="list-style-type: none"> 手の仕種とそのときの心情について考えること。 	<ul style="list-style-type: none"> 考えつかない児童には、個別指導をする。
⑦ 白いカードに書いた言葉と青いカードに書いた文とをつなげて発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> 手のはたらきには、心情の表現もあると分かること。 	<ul style="list-style-type: none"> 総ての児童が、1枚は青のカードが書けるように個別指導する。
⑧ 次時の学習を予想する。		<ul style="list-style-type: none"> 次時に続けるようにする。

ウ. 評価

手のはたらきについて考え、カードに書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 「手のはたらき」について、体験しカードに書く。

児童は、喜んで行動をし手のいろいろなはたらきに気付いていった。発見の喜びがあっただけでなく、カードに書くことも喜んです。実際に具体物との対応をしながら、手の様々なはたらきを体験することが極めて有効であった。「折る」「切る」などは、その職種だけの白いカードだけを書くにとどまったが、「抱く」については「可愛い気持ちで」、「押す」については「おかあさんが早くドアをあけてくれないかなという気持ちで」のように青いカードを書く児童もいた。もっとよく考えてみたい、もっと詳しく調べてみようという児童もいた。

戸外に出て友達と様々な遊びをした後は、そのときの心情が児童によく理解されているため白いカードと青いカードを容易に書けた。次にその例を示す。

白いカード例

手を ふる

青いカード例

とおくのともだちに はやくこっちへおいでよ というきもち

さらに、生活経験を想起させることで青いカードをつけ加える児童もいる。例えば、上のカードに次のような青いカードを付け加えた。

学校からかえるとき ともだちに さようなら というきもち

まちがえているから ちがうちがう というときのきもち

イ. 作文に書きたいものを選ぶ。

集めたカードは沢山あるが、それを全部作文に書くのではなくその中から書く題材として三つを選ばせた。できるだけ白いカードとそれにつながる青いカードがあるものを選ぶようにさせたが、個人差に応じて白いカードだけを取り上げて作文に書くのもよしとした。

作文に書きたいカードが沢山あって、选材に困る児童もいた。取材を十分にすると「書くことがない」と言う児童はいない。児童は、生活と密接につながる「手のはたらき」を改めて

実感したものと思われる。いままで気付かなかったというより当り前と思っていたことに対して、新しい発見のあることが児童の書く意欲を喚起したようである。

ウ. 書き出し文を指導する。

書いた作文を友達に読んでもらうために、「こんなことが分かったから書いて知らせます」という内容の書き出し文を考えさせた。②のウに示したようなものは、児童が自分で考えた書き出し文であるが、次のような文例を示してそれをそのまま書いてもよいし、その一部だけ変えて書いてもよいとした。

書き出し文例

手のはたらきは、たくさんあります。
手のはたらきをしらべて、書きました。
どんなはたらきがあるでしょう。

エ. まとめの文を指導する。

書き出し文と同様に、まとめの部分も工夫させた。書き出し文に対応してどのようにまとめるかを考えさせたが、これは書き出し文の指導に比べると児童はずっと楽にたのしんで書いていた。そのため、まとめの文としての役割よりもだらだらと冗長になってしまうこともあったが、楽しく書いている実態を大切にした。

児童が書いたまとめの部分

男児

手は いろいろなはたらきを していることが わかりました。

女児

これで この文はおわりです。
みなさんは、よんだあと、わたしたちのようにカードに書いて、こういう文に書いてみてください。わたしたちももっとよくみつけてまた書いてみます。
手は とてもたいせつです。みなさんも手をだいじにしましょう。

△資料「ページ」▽

児童作品例

手のはたらき

わたしたちは、手のはたらきを しらべました。さいしよは、すこししかないと思いましたが、たくさんありました。

手は、どんなはたらきをしているのでしょうか。

手は、「だく」はたらきを しています。ぬいぐるみを だきます。いぬのベルを だきます。おかあさんはあかちゃんを だきます。あかちゃんを だいているときおかあさんは、あかちゃんを かわいがっています。

手は、「おす」はたらきを しています。手でスイッチを 押します。テレビのスイッチを 押します。手ではんこを 押します。わたしは、やすみじかんのときやまだくんとはんこを しばいおして あそびました。

手は、「もつ」はたらきを しています。えんぴつを 持ちます。きゅうしよくのときに、スプーンを 持ちます。きゅうしよくを おいしくたべます。えんぴつを 持って べんきょうします。

このほかにも、手はいろいろなはたらきをしています。

手のはたらき

手には いろいろなはたらきがあります。手のはたらきを たくさんしらべました。

手は、どんなはたらきをしているのでしょうか。

まず、手は「もつ」はたらきを しています。「もつ」はたらきでも、いろいろあるものです。「かさを もつとき 手でもちます」とか「はしを もつとき手でもちます」とかです。

つきは「あくしゅする」です。これは 気もちを あらわしています。「なつかしい人にあつたとき、手で あくしゅします」は、うれしいときの こと です。はんたいに「もう あえなくなつてしまつとおもうとき、手で あくしゅします」のときは かなしくて たまらない 気もちも あらわしています。それから「あける」です。「ドアを 手で あけて そとに出ます」これは 気もちを あらわして いません。

でも「学校から かって ドアを 手で あけて たいどいいます」はどうでしょう。すこし 気もちが あらわされています。

このように、さがしてみると いろいろ あります。みなさんもしらべて みて ください。
(以下省略)

(3) 第3学年の教材と指導

読解から作文へ ————— 説明文を書く

題材名 「あげはちょうの身の守り方」

① 目標

- ア. 教科書の読みの教材を読むことを通して説明文の表現の仕方について理解するとともに、生き物の身の守り方を考え、自然に目を向けることができるようにする。
- イ. あげはちょうの幼虫やさなぎを、身の守り方という観点からよく観察して、区切りを考え、要点を落とさずに書くことができるようにする。
- ウ. 指示語や接続語の役割と使い方に注意して書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

(ア) 文章表現に関する児童の実態

児童が今年度になって書いた作文を分析した結果は次のとおりである。

- ・ 2年生の目標「順序」について表現することはおおむね達成できている。
- ・ 3年生の目標「区切り」については次のようである。

「遠足」の作文を書いたときは、区切りを明確にするために遠足当日の生活の中でも「かくれんぼ」や「ドッジボール」などのように、中心を意識した題名をつけるよう指導した。

しかし、区切りがはっきりした文章が書けなかった児童が37名中31名と目立った。又、区切りとしての段落構成の表記上の形式ができていない児童も37名中23名と多い。

- ・ 大多数の児童が取材のメモを記述に生かすことができない。
- ・ 次のような、表記上の基礎的な表現力が身につけていない児童が多い。

助詞、促音などを正確に表記すること

縦書きの文章中では漢数字を使用すること

句点を表記すること

以上の実態分析から、次のような能力の育成につながる学習指導計画を構成する必要があると考え、このような能力を培うための学習指導に適した題材を開発するよう心掛けた。

- ・ 段落意識を持たせ、段落構成の力をつけることにより、区切りがはっきりした文章を書くことができる。
- ・ メモを生かして記述することができる。
- ・ 表記上の基礎的な表現に目を向けることができる。

(イ) 児童の関心・意欲の重視

作文の学習指導では、文章表現に対する児童の関心・意欲を高めるような題材を開発することが大切である。そのために、次のことに配慮することにした。

- ・ 児童の体験を大切に表現意欲に結び付ける。
- ・ 児童の達成感を大切に、新たな課題に意欲的に取り組めるようにする。
- ・ 絶えず児童理解に努め、児童一人一人の実態に即した支援を心掛ける。

以上の(ア)・(イ)の観点から、本単元を構成した。本単元では、「めだか」「魚の身の守り方」という2編の教科書教材の読解学習を通して身につけた知識や技能を生かして、「あげはちょうの身の守り方」という説明文を書くという学習指導過程を構成した。教科書教材である2編の説明文を読むことにより「動物の身の守り方」について興味・関心を持つ。その上で、読解の学習で身に付けた知識を生かし、同時に表現の方法も自分の作文に生かして説明文を書く、という単元構成である。

説明文に書く対象は児童にとって身近なもので、しかも興味・関心のあるものを取り上げるとよい。本単元では、あげはちょうを対象に選んだ。理科の学習で、もんしろちょうやあげはちょうを飼育し観察をする。そして、国語科として自分たちが飼育しているあげはちょうの幼虫やさなぎを取材して説明文に書くのである。

イ. 教材について

(ア) 教材文について

本単元では、児童が教科書教材の読解の学習を通して身につけた、説明文の文章構成の一典型(尾括型)・段落ごとの要点・段落構成にふさわしい接続語・書き出しの工夫・「てき」や「身の守り方」についての説明などの知識や技能を生かして説明文を書くことをめざしている。

そこで、教師が次のことに配慮して本章資料ページのような教材を自作した。

- ・ 「めだか」「魚の身の守り方」という2編の読解教材を合わせて、読みだけでなく表現のための平易な文章にする。
- ・ 「てき」を意識することができるようにする。
- ・ 段落構成を工夫する。
- ・ 接続語を工夫する。
- ・ 要点を意識することができるようにする。そのため、要点とその内容というパターンにする。
- ・ 尾括型の文章にする。そのため、まとめの部分で「このように」という接続語を使い、文章全体のまとめ方が分かるようにする。

(イ) 文章以外の教材（使い方等については「⑤ 学習指導の実際」を参照）

- ・ 写真……あげはちょうの成長過程にそって教師が次のような写真を、20枚程度撮っていた。



「肉角を出している幼虫」
強烈なおいを発するため
児童が鼻を押さえている。



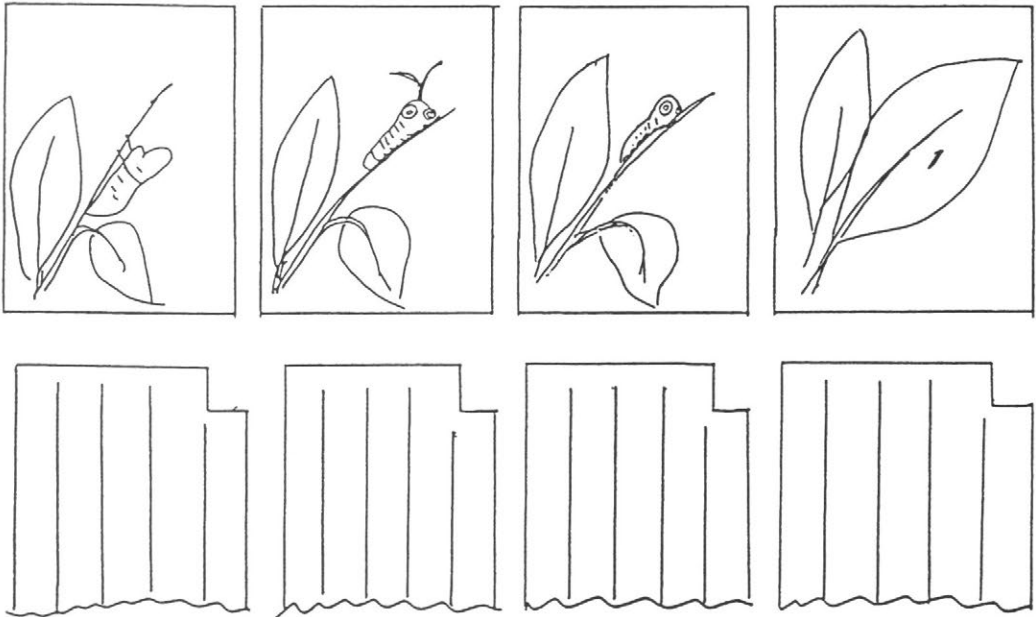
「めだまもようがくっきりとでてきた幼虫」

「さなぎ」
緑色のため、葉の色と区別が
つかずどこにいるのか分かり
にくい。



- ・ 書き出し文例……本章資料ページ参照
- ・ 黒板掲示用の絵

構成の参考にするために、あげはちょうの成長過程にそって教師が次のような絵を書いて示した。いずれもえさであるみかんの葉や茎も書き入れ、幼虫やさなぎの大きさを確認できるようにした。それぞれの絵は、色画用紙2枚を貼り合わせたものにした。なお、絵の下には記述用紙の拡大図を掲示し、区切りや区切りごとの改行などを意識させた。



(ウ) 準備した作業用紙等

- ・ 取材メモ

本章資料ページ参照（使い方等については後述の「⑤ 学習指導の実際」を参照）

- ・ 記述用紙

文章を書く時、原稿用紙のます目が記述の妨げになることがある。ます目を意識せずに書けるようにするため、画用紙に縦のけい線を印刷したものを配布した。

- ・ 見直しカード……本章資料ページ参照

③ 学習指導過程 作文 8 時間・本時4/8時間目（読解16時間・全体23時間扱い）

1次 単元の日当てを知る	< 1 時間 >	}	読解
2次 教科書教材「めだか」の読み取り	< 7 時間 >		
3次 教科書教材「魚の身の守り方」の読み取り	< 8 時間 >		
4次（8時間 本時4/8時間目）			

ア. あげはちょうの幼虫やさなぎを観察し「あげはちょうの身の守り方」に関心を持つ。

< 1 時間 >

イ. 「あげはちょうの身の守り方」という説明文を書くという学習の日当てを知り、活動に対する意欲を持つ。

< 2 時間 >

- ・ あげはちょうの幼虫やさなぎを観察し、身の守り方という観点から取材してメモを書く。
- ・ あげはちょうの幼虫やさなぎにはどのようなてきがあるか考える。

ウ. 教師が自作した作文のための教材文を読み、「はじめ・中・おわり」という文章の組み立て方や身の守り方（色、もよう、おどし方など）を確認する。

< 1 時間 >

エ. あげはちょうの幼虫やさなぎの絵をもとに、説明文の組み立てを考えてから記述する。

< 2 時間 本時 1/2 >

オ. 清書をして挿絵や写真を貼り、冊子にまとめてお互いに読み合う。

< 2 時間 >

④ 本時

ア. 目標

- ・ 書こうとする説明文の組み立てを考えることができる。
- ・ 区切りや中心を考えて説明文を書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① あげはちょうの身の守り方についてどのような順序で書いたらよいか話し合う。	・ 文章の組み立てを考えること。	・ 幼虫やさなぎの絵を黒板に掲示する。 「はじめ・中・おわり」をおさえさせる。「色・もよう・形・おどかし方」などで身を守っていることを確かめさせる。
② 取材メモを見直し書きたい事柄に印をつける。	・ 書く必要がある事柄を吟味すること。	・ 必要があれば修正させる。 ・ 接続語や指示語の使い方を確かめる。

<p>③ あげはちょうの身の守り方についてメモしたことや考えたことをもとに、文章を記述する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取材した事柄を生かして文章を記述すること。 ・ 文章の推敲をすること。 	<p><板書事項></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 第1に…… ・ 第2に…… ・ このように…… など <ul style="list-style-type: none"> ・ 机間指導 よいところを認めるという視点で評価する、書き方が分からない児童に対して支援をする。(助言・書き出し文例・教師作成教材の表現方法を参考にさせる。) ・ 書き終えた児童は「見直しカード」の観点にしたがって読み返させる。 <p><見直しカードの観点></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「はじめ・中・おわり」があるか ・ 文の終わりに「。」がついているかなど
--	--	---

ウ. 評価

- ・ 順序を考え、取材のメモに印をつけようとすることができたか。
- ・ 「はじめ・中・おわり」に気を付けて文章を書くことができたか。
- ・ あげはちょうの身の守り方(色・もよう・おどかし方など)に気を付けて文章を書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 説明文の文章構成や文章表現の特徴について理解を深めること(教科書の読解教材の学習指導を通して)

(ア) 文章の構成について

教科書教材で、段落や段落相互の関係について学習指導を行った。このことにより「はじめ・中・おわり」という説明文の文章構成の型について理解を深めることができた。

(イ) 「はじめ」の部分に注目させる

説明文の書き出しに注意を向けるようにした。児童が説明文を書くときに参考にできるようにすることをねらったのである。

(ウ) 適切な接続語の使い方について

文と文、段落と段落とをつなぐのに適した接続語が使われていることを知ることができた。

中でも、「第1に……」、「第2に……」という言葉を用いて段落を意識させた。又、「このように……」という語の後にまとめの部分の表現方法を示し、児童が説明文を書くときに活用できるようにするという観点から、特にていねいに指導した。

(エ) 内容について

「身の守り方」という観点から、次のような内容を十分に理解できるように配慮した。

- ・ 動物の「てき」に関する記述
- ・ 「身の守り方」(色、もよう、形、おどし方など)に関する記述

イ. 取材について

(ア) 対象(あげはちょうの幼虫やさなぎ)をよく観察する。

児童があげはちょうの幼虫やさなぎに興味・関心を持つとともに十分に観察できるように、教室にあげはちょうの卵や幼虫、さなぎを持ち込み飼育した。当番を決め、理科の学習で世話を続けた。

本単元のような学習指導では、あげはちょうの成長に合わせて実物を見ながら取材できるのが一番望ましい。しかし、国語科の年間学習指導計画にそった学習指導では、あげはちょうの成長にそった学習指導ができるとは限らない。そこで、児童にはしっかりあげはちょうの幼虫やさなぎの観察をさせながらも、ビデオや写真等に撮っておくといざという時に役に立つ。実際に本単元でも、作文学習に取り組む前に、ほとんどの幼虫がさなぎになり羽化して飛び去ってしまった。やむを得ず次々と幼虫や卵を見つけては教室に運んだ。それと同時に、あげはちょうの幼虫やさなぎを写真に撮っておいた。撮ったのは、「卵」、「幼虫(黒いとき、脱皮してから、成長して目玉模様のはっきりしてから、おこって角を出しているところ)」、「さなぎ」、「成虫」である。撮影をするときは、はっぱや茎などがはっきりと写るようにし、幼虫などの大きさが分かるように配慮した。

結果としては、幼虫やさなぎを直接取材することができたため、取材に写真を使うことはなかった。しかし、写真は、「エ. 説明文の記述 (ウ)」に示したように、児童が作品の装丁に活用することで役立てることができた。

(イ) 取材のためのカードを工夫する。

本章資料ページのように、図と文で取材したことをメモできるようなカードを作成した。カードは画用紙を使用して作成した。絵の欄以外は空白とし、縦書きでも横書きでも書けるようにした。メモは、語や数字だけでもよいことを指導した。なお、取材で書いた絵や図は、説明文の記述後、挿絵として活用するとよいことを指示した。

(ウ) 取材のためのカードにメモをする。

「黒い色をした小さな幼虫」「脱皮をすませた緑色の幼虫」「成長し、目玉模様のはっきりし

た成虫」「さなぎ」の4種類を観察しメモをした。観察の時は、幼虫に触れて角（肉角）を出させてもよいことにした。なお、教科書教材の読解で学んだ「色」「もよう」「形」「おどすこと」などの「魚の身の守り方」の観点を参考にさせ、これらの観点からあげはちょうの幼虫やさなぎの身の守り方を見つめるようにした。

(エ) 聞いたり読んだりして得た知識を生かす。

説明文には、家人や級友から聞いて知ったことや様々な書籍から得た知識なども書いてよいことにした。教室には、校内の図書室や区内の公立図書館から、ちょうの身の守り方に関する書籍を10冊程度借りて備え、自由に読んでよいことにしておいた。ただし、説明文に書籍の丸写しをすることは禁止した。そのため、書籍を見ながら説明文を書いてはいけないうことにしておいた。実際には、ほとんどの児童が幼虫やさなぎを観察し、取材した事柄を中心に説明文を書いた。書籍などから得た知識を生かして記述した児童も、知識をいったん自分のものとしてから再構成して記述することができた。

エ. 説明文の記述

(ア) 幼虫やさなぎの絵の活用

文章の組み立てを自覚させるために、教師が書いたあげはちょうの幼虫やさなぎの絵を黒板掲示した。本章「② 題材設定の理由と取り扱った教材」に図示したように、3種類の幼虫（黒色のとき、緑色のとき、角を出しているところ）と、さなぎの合計4枚の絵を黒板掲示した。いずれもえさであるみかんの葉や茎も書き入れ、幼虫やさなぎの大きさを確認できるようにした。

又、それぞれの絵の下には、記述用紙の拡大図を掲示し、区切りを意識させることや新しい段落に入ったら1文字ぶんあけて書くことに関する指導を繰り返した。

(イ) 書き出し文例

書き出しで行き詰まった児童に助言するため、「書き出し文例」を準備しておいた。（本章資料ページ参照）3分の1程度の児童が書き出しで迷い、「書き出し文例」を参考にした。

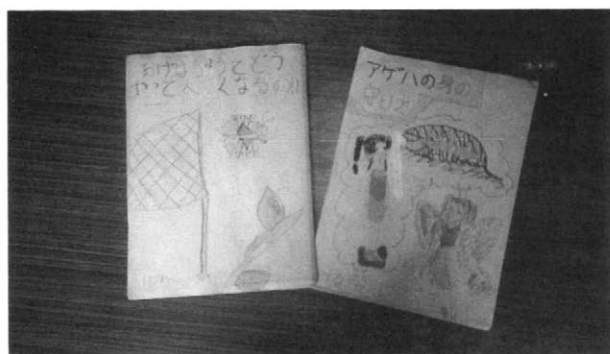
(ウ) 書き上げた児童に対する配慮

作文の学習指導では作業が早めに終わってしまった児童に対する指導で悩むことがある。本単元では、記述が終わった児童は、取材のときメモした図や文などを挿絵として貼らせることにした。又、教師が撮っておいた写真（「② 題材設定の理由と取り扱った教材」参照）を貼ってもよいことにした。（写真は児童数分現像し、児童が希望するものを1枚ずつ配布した。）

その上、色画用紙を使い、表紙をつけて装丁することにした。このため、説明文を書き終えた児童も自分なりの目当てにしたがって作業を続けることができた。



取材時のメモを貼って挿絵にした



表紙をつけてきれいに装丁することができた

オ. その他

観察する前は、「こわい。」とか「気持ちが悪い。」といった理由で幼虫に触れられなかった児童が11名いた。しかし、観察を通して8名の児童が幼虫に触れることができ、「こわくなくなった。」という感想を持つことができた。そのうち4名は、逆に「かわいい。」とか「柔らかくて気持ちがいい。」といった感想を持てるようになった。最終的にはあげはちょうだけでなく、教室内で蚕の幼虫やかみきりむしなども飼育するようになり、昆虫に対する興味・関心を高めることができた。

あります。ですから、葉とまちがえられるのです。

「たまご」はとても小さく一ミリメートルぐらいです。たまごのきいろい色は、葉のわかばににているのでおそれにくいのです。たまごが黒くなるともうすぐかえるのです。

こんなふうになんかたたくさんのほうほうで身を守っていたのです。

児童作品 四

春になると、みかんの木やだいの木にあげはのよう虫がすがたをあらわします。よう虫はのんびり楽しそうにしているみたいだけど、いろいろなてきにねらわれているのです。

たとえば、ありやちや鳥とかはとくにこわいてきです。では、よう虫は、そのようなてきからどのようにして身を守るのでしょうか。

まず第一に、体の色によって身を守ります。たまごからうまれたばかりのは、黒色です。だからよく見ないと鳥のふんとまちがえてしまいます。

また二しゅう間たつと体の色が緑色になります。だから、はっぱや、くまと区べつがつきにくいのです。ですから、てきから身を守るのです。

第二に、においでおどして身を守るのです。もし、よう虫が大もずにおそわれてしまったとします。すると、よう虫は、びっくりして、肉角を出すのです。その肉角は大き

くなるたんびに、肉角はくさくなるのです。

わたしは、その肉角をかいたことがあります。そのにおいはきょうれつなにおいでした。

第三に形で身を守ります。

小さい時も、大きい時も、長丸なのです。大きい時は、体の色が緑です。だから、くきのところをのぼっている時は、くきかなにか、みわけがつかないのです。ですからてきから、身を守るのです。

もしかして、もっとほかのほうほうもあるかもしれないんですけど、わたしがかんさつしたのは、これだけなのです。

このようにして、あげはのよう虫は、身を守っているようです。こうしてちよようになるのです。

児童作品 二

国語の時間と理科の時間に勉強をしました。

あげはは、時間をかけて一つ一つじゅんじよでちようになりす。ぼくは、その中のさなぎと、ようちゆうを、いっばいかんさつしました。

はじめに、ようちゆうの身の守り方をしようかいたします。第一に色で身を守っています。みかんのはっぱの色に、すぐくにています。だから、ときは、はっぱだと思ひこみとおろすごしてしまいます。

第二につので身を守っています。てきが、おそつてくるど、つを出して、ときは、びっくりしてにけてしまひます。ぼくのかんがえたことだけど、つを出したときなつどうのにおいがして、すぐくさいので、てきがにげるかもしれません。

つぎに、さなぎについて書きます。

さなぎは、はっぱのところについているのと、かれはのほうについているのとふたつあるけれど、ぼくはかれはのほうについているさなぎをかんさつしました。

さなぎも、やはり色で身を守ります。かれはとさなぎの色がすぐくにていて、ぼくは、はじめに見たとき、どれがさなぎだかわかりませんでした。てきがおそつてきて、はっぱの色だと思つてしまふのです。

でも、なぜあんなに小さいはなくそみたいなものがせいちようしてちようになるのでしょうか。みなさんも、あんな小さいのがちようになるのを、よく見てかんさつしてください。

児童作品 三

あげはのよう虫は毎日葉ばかりおいしそうに食べているようすが、あげはのよう虫には、たくさんのてきがいるのです。

たとえば「おおもず」や「はち」にもおそわれます。だが今日もおそわれるのではなくいろいろなほうほうをつかつて、身を守っているのです。

小さかつたころは黒っぽく、まん中へんにしろいもようがあります。ですから、空からおそつてくる「とり」にじぶんやなかまのふんとまちがえられるのです。それでおそわれにくいのです。

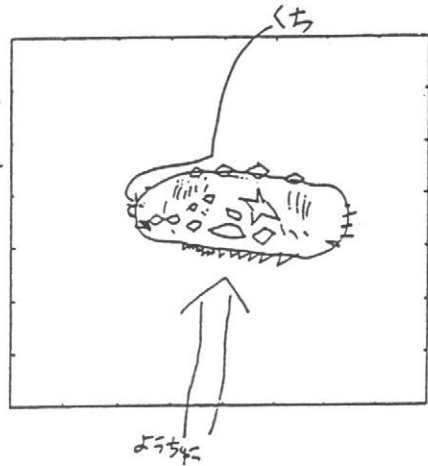
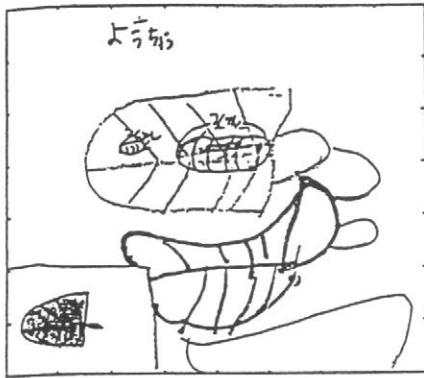
また「てき」に見つかると、つを出してくさいにおいでおどして「てき」をおいはらいます。そのにおいは、みかんのこくなつたようなすごいにおいです。これならにおいをかいだ「とり」はにげていくにちがいありません。このように黒いよう虫は身を守っているのです。

次に緑色の時は、葉や「くき」によくにていて見つかりにくいのです。

また、「てき」に見つかると黒いよう虫の時とおなじように「つ」を出して「てき」をおいでおどろかせ、追いはらうのです。

緑色の時は目玉もようがあるのでてきをおどろかすのにやくだつと思われています。それに足はしつかりと葉やくきにつくので、つよい風にもたえられるのです。それで、下でまちかまえている「あり」にもおそわれにくいのです。緑色の時のよう虫もいろいろと身を守っているのです。

「さなぎ」になつたよう虫は、「とり」たちが見たら、木のえだか、葉に見えしてしまうのです。ですからあんなに、ちようになることができるのです。すじが葉にあるように「さなぎ」にもすじが



メモ
大キミ一ヨム
キ一長くかくたか
におい(うななま)と
色(オシロイ)色

メモ

首が、いっはいうこ、いた。
はっはの色たうたから、はっは
の毛たとおもった。
つので、てきをこわが、ける

みかのはっはにおい、いっは
い、いる。たがんようち
うのなつとつく、か
ててきをちかづかな
する。

児童作品 一

春になると、あげはちようのよう虫が、すがたをあらわします。

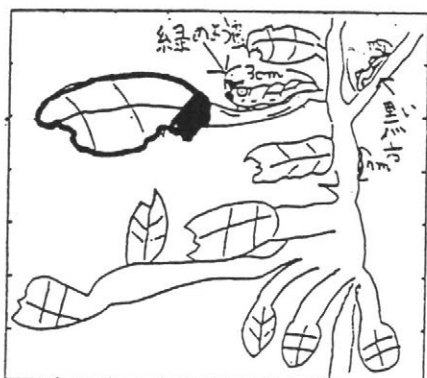
あげはちようのよう虫は、のんびりたのしそにはっていているようですが、いつもたくさんのできにおそわれているのです。「もず」などの鳥や、「あり」や「はち」などの、こん虫にもおそわれます。

では、よう虫はそうなたきから、どのようにして、身を守っているのでしょうか。

まず、第一に、体の色によって身を守ります。生まれたばかりのころ、色が黒いので、ふんのように見え、生まれて、少しすると、緑色になり、はや、くきのように見せて、身を守ります。

第二に、においによって、身を守ります。色が緑色の時、てきなどにつつかれると、赤やしゆ色のつを出します。これは、にくかくという、とてもくさいつのです。てきは、このにおいにやられてにげていくのです。このにおいは、人間も頭がいたくなるほどのにおいです。このつのは、てきから身を守る、さいこうのぶきだといえるでしょう。

このように、よう虫たちは、いろいろなほうほうで、てきから身を守っているのです。



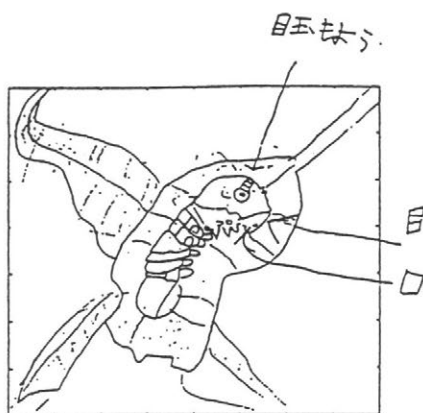
魚 ヶモ
黒い虫の方は鳥のよこみた
いアあまりよくおかない。緑色
の方は、葉によくしててみわけが
きにくい

児童が記入した取材のカード

気をつけて読むところ		読んだ人の名前
1	「はじめ・中・おわり」がありますか	作者
2	書き出しは一字分あけてありますか	
3	文のおわりに。(まる)がついて いますか	
4	字はていねいですか	

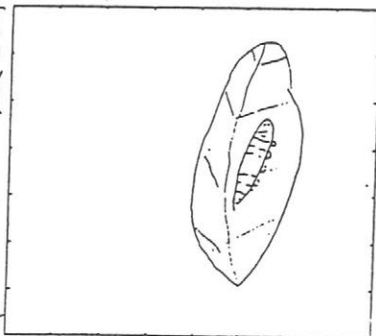
作文を読みなおして、次の表の中に、◎・○・△のどれかを
つけましょう。
へ◎…たいへんよく書けた ○…よく書けた △…もう少しへ

へ見直しカードへ



目玉はら
手は^{ようちゆう}かりやらかい
色きみどり
うごきやっくりうま
身をゆり^{目玉はらうごき}身をゆり
4C 色で身をゆり

又モ(大キナは、いからま
です。においくすりのにおい。
のをたすとなくとうのにおい
するのま)



△資料ページ▽

作文のための教師自作の教材文

国語の時間に、魚の身の守り方の勉強をしました。

ぼくは、海にすむ魚たちはのんびりくらしていると思っていました。でも、魚たちは、いつもたくさんのてきにねらわれていることがわかりました。海にすむ魚のてきは、鳥や大きな魚です。「うつぼ」や「さめ」などの大きな魚は、とくにこわいてきだそうです。

魚たちは、このようになってきから、いろいろなほうほうで身を守っています。

第一に、色で身を守るといふほうほうです。いわしがそうです。いわしは、せなかが青緑色です。ですから、空から見た海の色と区別がつきにくいのです。

第二に、もようで身を守るといふほうほうです。ちようちようおは、上手に泳げない子どもをころ、「目玉もよう」をつけています。この目玉もようは、てきをしりごみさせるのに役立つっているらしいです。

第三に、てきをおどして身を守るほうほうです。ふぐのなかまは、水をたくさん飲んで、体をふくらませることができず、てきにおそわれると、体を大きくふくらませて、てきをおどして身を守るのです。

このように、魚たちは、いろいろなほうほうで、身を守っているのです。

書き出し文例

(書き出しがわからない時は、①～⑦の中から、いいと思うものをまねして書きましよう。)

① 「わあ、ちっちゃいなあ。これがちようちゆうなのか。」

ぼくはあげはちようのよう虫を見てびっくりしました。こんなに小さくて、てきにおそわれないのでしょうか。

② みなさんは、あげはちようの身の守り方を知っていますか。

③ うちの庭にあるみかんの木に、あげはのよう虫を見つけた。

④ わたしたちは、理科の勉強であげはのかんさつをしました。

⑤ 七月三日 金曜日

三時間目にあげはちようのよう虫とさなぎのかんさつをしました。

⑥ あげはちようの身の守り方を調べました。

⑦ うみは ひろいな

おおきいな

つきが のぼるし

ひが しずむ

広い海に住む魚は、のんびり楽しそうに泳いでいるようすが、いつも、たくさんのてきにねらわれています。

(魚をちようにかえて書いてね。あげはにはどんな歌が合うかな。)

(4)第4学年の教材と指導

自分の考えをはっきりさせて ―――― 説明文を書く

題材名 「アルコールランプの使い方」(初めて使う人へのパンフレット)

① 目標

- ア. アルコールランプの使い方のパンフレットを書くことにより、自分の考えをはっきりさせ、読む人の身になってまとめる力を養うことができるようにする。
- イ. 筋道を立て、要点や中心点とその理由を接続語を使ってきちんと書くことができるようにする。
- ウ. 段落を考えて小見出しを付けたり、箇条書きを工夫したりして、大事なことを落とさずにパンフレットを書くことができる。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

初めてアルコールランプを使ったときの経験を次に同じように初めて使う人にパンフレットにして書き残すという目的を持った学習は、児童に自分の経験を相手の立場に立って見つめ直すのにふさわしい題材である。友達が、安全に、間違いなくアルコールランプを使えるようにするためには、取り扱いの手順が明確であること、なぜそうする必要があるので理由をはっきりさせて書き表すこと、書こうとすることの中心点を明確にして書き表すことが要求される。

客観的で、理由がきちんと書かれたパンフレットのまとめになるよう、メモの取り方を工夫させ、段落を意識して小見出しを付けさせ、理由を書き表すのに必要な接続語を効果的に使うことができるようにさせたいと考える。

イ. 教材の内容と構成

(ア) 学習の目当てをつかませるための教材は、「マットやとび箱を使った運動」という題名で説明文を作成した。授業の中で、すべての児童が体験していること、理科学習とできるだけ離れた内容であることをねらっている。すべての児童に、何をどう書けばよいのかを体験と結び付けて理解させ、「アルコールランプの使い方」を書く際に児童の活動が教材にひっぱられないようにするためである。

(イ) 教材文は、段落を意識して小見出しを付け、理由を表す接続語を出来るだけ多く使って作成した。児童が、アルコールランプの使い方について書き表すときいろいろな種類の接続語を使うことを期待してのことである。

(ウ) 作文メモは、前時の話し合いでまとまった4つの小見出しごとに使い方をメモしていけるような用紙を配布した。

以上の(ア)・(イ)の観点から、教材1を開発した。(本章 資料ページ参照)

③ 学習指導過程（6時間扱い 本時2/6時間）

ア. 教材文を読み、学習の目当てをつかみ、学習計画を立てる。

イ. アルコールランプの使い方の手順を思い出し、小見出しを考える。 <1時間>

ウ. 小見出しにしたがい、注意すること、気をつけること、感想などのメモを書く。

<本時・1時間>

エ. メモをもとに、パンフレット作りをすすめる。

<2時間>

オ. 仕上がったパンフレットを読み合い、初めての人によく分かるパンフレットになるように推敲する。

<1時間>

カ. 絵や図を加え、楽しいパンフレットになるように工夫する。

<1時間>

④ 本時

ア. 目標

小見出しにしたがい、アルコールランプを使うときの手順や気をつけることを、理由をつけてメモしていくことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 安全や正しい使い方 に目を向けて、小見出しにしたがって パンフレット作り に向けてのメモを取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 取り扱う行動の区切り や順序を考えてメモを取 ること。 ・ なぜそうするのか、理 由をはっきりさせてメモ を取ること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何をどのような順序で行って いったかを想起させる。 ・ 1文の中にいくつもの行動や動 作が入らないようにさせる。 ・ 理由は、()の中に書かせる。 ・ 前時の話し合いでついた小見出 しを使う前、火をつけるとき、火 を消すとき、感想やメッセージ
② 感想や、メッセー ジを書き加える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めてアルコールラン プを使う人への感想やメ ッセージをまとめること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 吹き出しの中に書かせる。
③ 次時の予告を聞く。		

エ. 教材文を再び読み、理由を書き表すときの接続語の種類や使い方について理解する。

まず、文中の理由を述べている箇所に印を付けさせ、発表させた。黒板には、カードにして貼っておく。次時の学習では、カードの書き表し方を参考にしながら、パンフレット作りをさせていった。

〈カード例〉

～ので () ます。

なぜならば () からです。

そのわけは (こうしておく) () からです。

そうして (こうして) おかないと () からです。

～ように () ます。

～しないと ～ので () ます。

オ. メモにそって、パンフレット作りをすすめる。

カ. 推敲し、図や絵を書き添える。

⑥ 教材を見直して

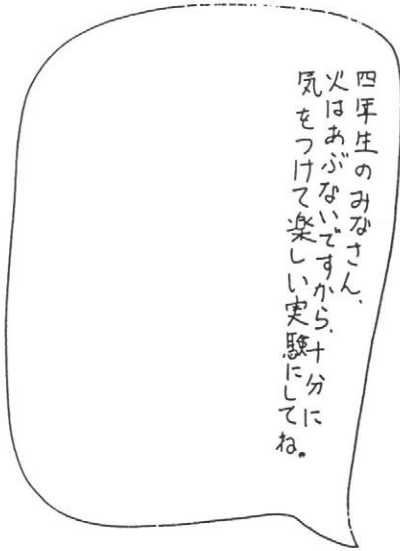
アルコールランプの使い方を教えるパンフレット作りは、友達に、安全に正しくアルコールランプが使えるように示す必要から、行動の区切りや段落、順序に目を向けた作文を書く必要が生まれた。また、なぜそうしてほしいのかを相手に理解してもらうため、理由をしっかりと書き表す必要も生まれた。そのため、どの児童も教材文で学んだ書き表し方を参考に、様々な理由の書き表し方を工夫していた。児童の作品から、教材文を考察するに、親切すぎず、適度な量の情報提示がされていたと思う。又、小見出しについても、段落意識を持たせることができ、適当だったと考察する。

理科学習の発展ということで、理科の教科書もかなり児童の参考になり、書くときの支えになっていた。

火の大きさを調節します。それは、他の物にも
 えうつらないようにするためです。
 火をつける時は、横からつけます。なぜならば、マッチ
 の火が手につかないようにするためです。

へ火を消すとき

下をおさえて、ななめ上からふたをします。
 なぜなら、手に火がうつらないようにするためです。
 ふたをしたら、もう一度、ふたをします。そうしない
 と、ふたがとれなくなってしまうからです。



— 5 —

— 4 —

作品二

アルコール ランプの 使い方



〈使う前のじゅんばつとしてんけん〉

つくえやまゆりはかたずけます。なぜならば
 火がもえうつ、とてもぎげんだからです。

アルコールは八分目まで入れます。こうして
 おくと、中でなくなりません。でも、入れず
 ぎても、ぎげんです。

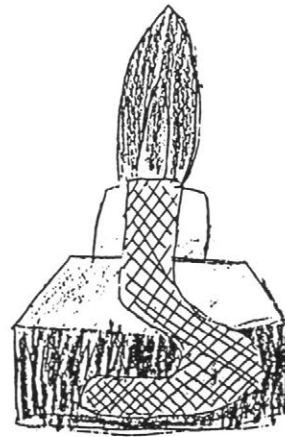
アルコールランプは、平な所に置きます。—
 そうしないとこぼれてたいへんなことになるから
 です。

ぞうきんも用意します。そうしておけば
 テーブル火がもえうつ、とてもすぐ消せます。

◆アルコールランプ

作品一

つかい方



へ使う前のじゅんびとしてんけん

つくえや、まわりはかたづけます、なせならば、火がつくえに置いてある物にもえうつらないようにするためです。

アルコールは八分目まで入れておきます、それは、と中で足せない、入れすぎ、少なすぎ、はぎけんだからです。

アルコールランプは、こぼれないように、平らな所に置きます。

ひびわれがないか調べてます、なぜならば、

火がもれないためと、ふたにひびが入っているとわかってしまうことがあるからです。

アルコールランプを使って実験する時は、ぬれそうきんを用意します、そのわけは、火がついた時、火の上からかぶせ、火を消すためです。

また、マッチ、もえさし入れも用意します、
もえさし入れは、火を消して、使い終わったマッチを
もえさし入れに入れておくためです。

運び方に注意します、両手でしっかり持たないと落としてしまうおそれがあるからです。

へ火をつけるとき

下をおさえて、ふたをとり、しずかに火を近づけます、それは、あぶくないようにするためです。

アルコールランプから別のアルコールランプに火をうつしてはいけません、なぜならば、アルコールがこぼれ、火がもえうつてしまうからです。

アルコールランプのふたは、たてて置きます、そうしておかないと、ふたが転がってしまい、火が消せなくなってしまふからです。

マットやとび箱を使った運動

じゅんぴの仕方

とび箱は、重いので、二人でしっかりバランスをとって運びます。ふざけて運んではいけません。足のうえに落とすと、大きなけがにつながるからです。

マットは、大きいので、マットにあるもち手の数に合わせて四人から六人で運びます。とび箱にきちんとつけたら、もち手を下に折り曲げておきます。そうしておかないと、もち手に足の先を引っかけたり、つまづいたりして、ころんだけがをってしまうからです。

最後にもう一度、まわりに使わないものが置いてないかどうかたしかめます。なぜならば、体育のじゅ業では、安全についていつも心がけていることが大切だからです。

運動中

練習は、順じょよく行います。勝手に言うことぶつかってあぶないからです。

前の人ですんでも、次の人は合図があるまで行動しません。前の人、マットのもち手のとび出していないか、とび箱とマットが曲がっていないかたしかめて、次の人に合図を送るようにします。運動中は、いつでも安心して練習ができるように、一人一人が気をつけていることが大切です。

かたづけ方

かたづけは、じゅんぴの時と同じように、みんなで協力して行います。おしたり走ったりしないで、もとあった場所にきちんとかたづけます。

とくにマットは、前の人から順にはじをそろえて積み重ねていかないと、高く積んでいくうちにくずれてしまうので、協力していねいにかたづけていきます。

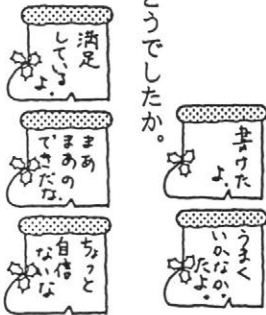
みなさん、これからもマットやとび箱の使い方に気をつけて、楽しく学習を続けてください。

☆ 理由やわけの書き表し方を調べましょう。

☆ 調べて分かったことを参考にして、パンフレットを作ります。

★ 理由やわけがきちんと書けましたか。

★ パンフレットのできは、どうでしたか。



(5) 第5学年の教材と指導

自分について考える ―――― 意見文を書く

題材名 「ぼくたちわたしたちを考える」

① 目標

- ア. 自分の生活を振り返り、文章に表現することによって、自分たちの生活を見つめ直すことができるようにする。
- イ. 事実と意見、感想を区別して、説得力のある意見文を書くことができるようにする。
- ウ. 文と文の意味のつながりを考え、接続語や指示語を的確に使うことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

高学年の仲間入りをした5年生は、自我の意識も高まり、他人との比較のなかで自分の価値を判断したり、他人にどう思われるかを基準に自分の行動を判断したりするようになってくる。このような時期の児童にとって、自分たちが社会の大人にどう思われているのか、何故そういうふうに使われているのかを考えさせることにより、自分たちの生活を見つめ直すきっかけを与えることは、大変有意義であると考ええる。

又、自分たちのことについての意見をまとめるに当たっては、理由や事例（根拠）を明らかにさせ、説得力のある構成のはっきりした文章を書く力を身に付けさせていきたいと考える。

イ. 教材の内容と構成

説得力のある意見文を書くためには、意見の根拠となる事実や事象が明確であること、文と文とのつながりが分かりやすい段落構成になっていることが必要である。

そこで、本題材では、次のような工夫をした教材文（新聞の投書欄から取り上げた）を作成し、ねらいを達成させたいと考えた。

- (ア) 児童にとって、価値ある教材文であること。（自分自身を見直したり、考えたりすることができる題材）
- (イ) 意見とそれをささえる根拠がはっきりしている教材文であること。
- (ウ) 教材文は、肯定的、否定的二つのとらえ方をしたものを用意する。
- (エ) 教材文そのものが文章構成のモデルとなるものであること。

意見 → (なぜかというと) → (たとえば) → 事実 → 感想 → (このことから)

(オ) 構想表は教材文の文章構成を生かした用紙を作成し、配布した。

(カ) 根拠となる具体例がない場合は、教師の方で用意し与えた。(視力検査の結果)

以上の、(ア)・(イ)・(ウ)・(エ)の観点から、教材1・2を開発した。(本章末 資料ページ参照)

③ 学習指導過程 (6時間扱い 本時1/6時間)

ア. 教材文を読み、自分たちは自分たちのことをどう思うか意見を持つ。 <本時・1時間>

イ. 意見の根拠となる事実を取材し、メモをする。 <1時間>

ウ. 構想表をもとに、接続語を的確に使いながら作文を書く。 <2時間>

エ. 書いた文章を文と文とのつながりを考えながら読み直し、さらに説得力のある作文になるよう工夫する。 <1時間>

オ. 意見発表会を開き、自分たちの生活を振り返る。 <1時間>

④ 本時

ア. 目標

二つの教材文を読み、自分たちは自分たちのことをどう思うか、意見を持つことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 二つの教材文を読み、学習のねらいを知り、学習計画を立てる。	・ 意見文を書くための学習計画をたてること。	
② 教材文に書かれたことについて、感想を发表或したり、もっと他にこのごろの子供はと言われたことはないか話し合う。	・ このごろの子供(自分たちのこと)について考えること。	・ 出てきた意見は、良い面、悪い面に分け、色分けして板書しておく。
③ 自分はどうか考えるか内省し、ワークシートに1文で表す。	・ 自分たちのことをどう思うか、意見を持つこと。	・ 意見文にまとめることを念頭に置かせ、根拠となる事実の取材しやすいものを選ばせる。

- ④ 次時までには、根拠となる事実を、取材メモに書いておくことを知る。

- ・取材メモは、教材文に合わせた文章構成のワークシートに書かせる。

ウ. 評価

自分たちのことについてどう思うか、1文で書き表すことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 教材文を読み、その他に自分たちはどのように言われているか、あるいは、自分自身はどう思っているか話し合わせる。

〈板書例〉

<ul style="list-style-type: none"> ・よいところ ・思いやりがある ・元気な子が多い ・せが高い ・おしゃれ ・なんでもできる ・習い事が多い ・お年寄りにやさしい ・ユーモアのセンスがある ・おもしろい ・女の子が強くなった ・頭がいい ・勉強ができる ・礼儀正しい ・ものおじしない ・親切 	<p>自分たちのことについて考えよう</p> <p>「このごろの子供は……」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・よくないところ ・自分勝手でもまんが足りない ・あいさつしない ・こわい ・話が聞けない ・短気 ・外で遊ばない ・寒がり ・ほねが弱い ・口が悪い ・なまいき ・目が悪い ・ぜいたく ・好ききらいがはげしい ・金使いがあらう ・テレビを見すぎる ・物の有りがたみを知らない ・ませている ・体がかたい ・おくびよう ・うるさい ・けんかができない ・ちくる ・まん画の読みすぎ ・じゆく通いが多い ・言葉づかいが悪い ・テレビゲームのやりすぎ ・女の子が強い ・声が大きい
--	---

へ自分たちのことについて考える

わたしたちは、物のありがたみを知らない

なぜかというと、ゴミすてばにまだ使えそうな物がたくさんあつた

たえば、こんな調査があります。

こんないだ私が歩いてみると、ゴミすてばにはおもちゃヤストーブが、しんびんのようになすてられていたからです。

まだ使えるのに、・・・と、まがしまつてしまいました。

思ったこと
少しの工夫で、よくならせよう。

わたしは、これらのうち一つに決まらないうけはいいと思います。

わたしは、古本やさんへもっていきたり、きれなくなつたふくは、小さい子どもにあげることもいいと思います。

あげればいいと思えます。

え、は、もう、たいつかえなくなつてからすてれば、いいと思えます。

エ. 構想表のメモをもとに意見文を書く。

教材文の文章構成を参考にさせ、接続語の使い方を意識させて書かせた。

オ. 文章構成に気を付けて、書いた文章を推敲する。

カ. 意見発表会を開き、自分たちの生活を振り返る。

⑥ 教材を見直して

例示した二つの教材文は、児童の問題意識を喚起し、意欲を起こさせるにふさわしかったといえる。又、教材文そのものが文章構成のモデルになっていたため、すべての児童が意見文を書くことができた。

そこで、教材文の文章構成にあまりとらわれないワークシートも作ってみたので、参考にしたい。(資料ページ参照)

△資料ページ▽

教材 一

このごろの子供は、大変思いやりがあると思います。
なぜかという、小さい子に対して大変やさしい行いが
見られるからです。

たとえばこんなことがありました。

上級生と下級生が手をつないで、楽しそうに遠足へ行く
ところでした。天気が悪くて、雨がふってきました。上級
生も下級生もかさを持っていない様子でした。どうするの
かと思っで見ていると、上級生は着ていた上着をさっとぬ
いで、下級生にかけてやったのです。そして手をつないで、
仲よく歩いて行きました。

自分だつてぬれるのはいやだろうに、なんていい子なん
だろうと思いました。

このことから、このごろの子供は、大変思いやりがある
と思うのです。

教材 二

このごろの子供は、自分勝手でがまんが足りないと思います。
なぜかという、自分のやりたいことは、所かまわずやるから
です。

たとえば、こんなことがありました。

五年生の男女のグループ十人が、リュックをしょって電車に乗
って来ました。初めはおとなしく、静かに立っていました。そ
のうちジャンケンゲームをやり始めました。食べ物を入れた
じめ、電車がゆれるたびにぎゃあぎゃあ大声を発し、まわりを気
づかうふうもありません。あまりかねたお年寄りが、

「ちよつと静かにしてもらえないかな。」

と、注意しました。その時は顔を見合わせて、一しゅんおとなし
くなりしましたが、またすぐ、さわぎ出しました。



電車の中では静かにしてはいけないことは、分かっ
ていると思います。だけど、たいくつしてしまうと、他の人のこと
を考えないで、さわいでしまうのです。

このことから、このごろの子供は、自分勝手でがまんが足りな
いと思うのです。

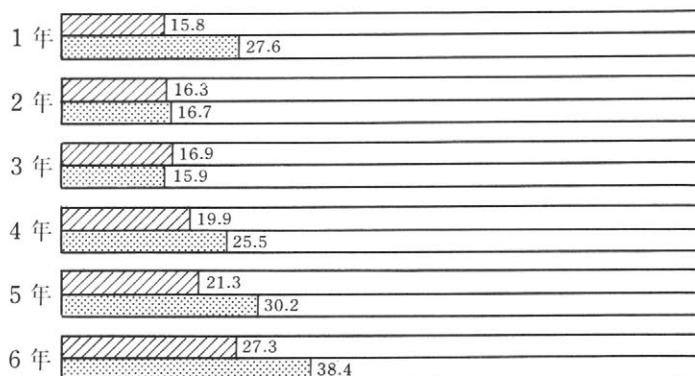
〈教師が与えた資料〉

目が悪い人 昨年の資料

数字は%

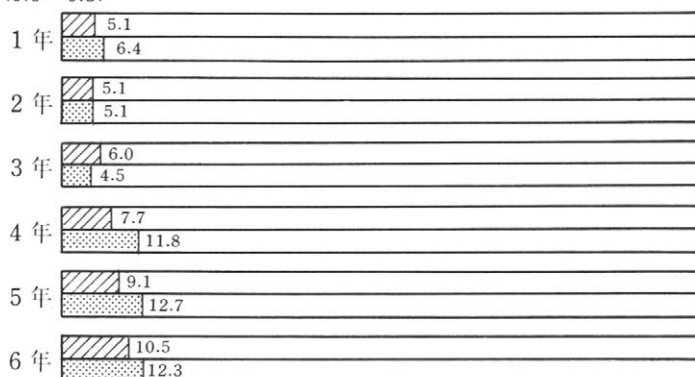
 ・全国
 ・ほくたちの学校

〈計〉

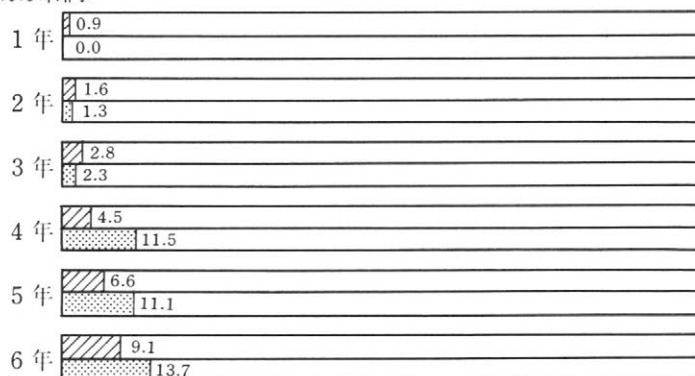


〈うちわけ〉

〈0.6～0.3〉



〈0.3未満〉

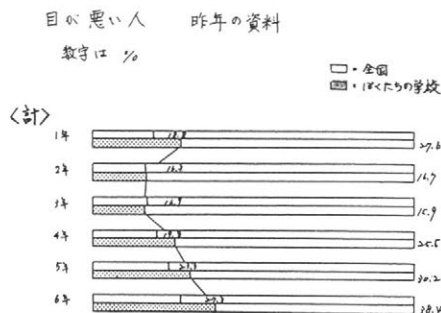


作品 一

「視力の悪いぼくたち」

ぼくたちは、目の悪い人が多くなったと思います。なぜそうなったかというところ、ファミコンを長時間やり、勉強を暗くしてやりたりしているからです。

たとえば、こんな調査があります。



上の図のように、全国平均とぼくたちを比べると、三年生からぐんと目の悪い人の割合が上がっています。自分も目が悪くて眼鏡をかけています。

こんな言葉もよく耳にします。「今の子は、目が悪くなっているなあ。」

このことから、ぼくは、これからこうしていきたいと思えます。

ぼくは、まず、明るくして勉強をやりようと思います。それから、ファミコンをやる時間も一時間に決めようと思います。

作品 二

「物のありがたみ知らないわたしたち」

わたしたちは、物のありがたみを知らないと思います。

なぜかというところ、ゴミすて場にまだ使えそうなものがたくさん置いてあるからです。

この間わたしがゴミすて場の横を歩いてたときです。まだまだ使える新品のようなおもちゃや家具がすてられていたのが目につきました。まだ使えるのに……と立ち止まってしまいました。

わたしの家では、かぶの入ったおいしいみそしるをよく飲みます。葉っぱもきざんで入れてしまいます。

「ええっ、かぶの葉も入れるの。」
と思わず言ったことで、母から、

「葉っぱの方が、栄養があっつておいしいのよ。」

と、注意されたことがあります。やおやさんでも、大根やかぶの葉っぱを置いていく人が多くなったそうです。

そこでわたしたちは、次のようなことに気をつけていけばいいと思えます。

- ① 本は、古本屋さんへ持っていく。
 - ② 着られなくなった洋服は、小さい子のいるところにあげる。
 - ③ 必要があると思ったときだけ物を買う。
- そして、もう絶対使えないと思ったらずてればいいと思います。

今後の指導のために作成したワークシート

自分たちのことについて考える

わたしたちは、

と思います。

なぜかというと、

です。

たとえば、

事実やでき事

意見や感想

そこで、

意見や具体さく

(6) 第6学年の教材と指導

友達について考える ―――― 意見文を書く

題材名 「友達」

① 目標

- ア. 児童にとって身近なものである友達について改めて見つめ、友達についての見方を広げ、考えを深めることができるようにする。
- イ. 友達とのかかわりのなかに生じた事象を多面的に見つめ、意見をもつことができるようにする。
- ウ. 意見と事象とを照応させて筋道の立った意見文を書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

意見文の学習では、児童一人一人が自分の頭で考えて意見を持つこと、さらに文章表現することによって自分の意見を一層深めることが大きなねらいの一つである。どんなに立派な意見を述べたところで、それが他からの借り物であったのではこのねらいにそぐわない。稚拙な意見であってもよい。自分の頭で考え自分なりの意見を持つこと、そして、自分なりの意見を深めることが大切である。そのためには、児童にとって日常的で身近な事象を対象にした題材を設定することが重要である。そこで、児童にとって最も身近な存在である友達について考える機会を与えると共に、意見文の学習指導を通して文章表現力を伸ばすことを目指して「友達について考える」という題材を設定した。

ところで、いかに身近な事象について考えても、観念的な意見しか持てないのでは考えが深まったことにはならない。児童の考えを触発させることができるような教材を準備することが大切である。以下に、本単元で配慮した教材開発の観点を示す。

ア. 教材の内容

- (ア) 教材化するには、どの児童にも経験のあるような身近な事象を取り上げる。そして、事象をできるだけ詳しく書くことが大切である。本単元では、児童の実態をよく見たうえで、目的に合わせて教師が自作した。この他にも、例えば様々な文集の児童作品の中から目的に合った文章を選ぶことや、目的に合わせて児童作品を改作して活用することも効果的である。
- (イ) 児童が、対象を多面的に見つめられるような教材を与えるようにする。本単元では、友達とのかかわりの中で、「自分にとってよかった出来事（プラス面の事象）」と「自分にとってよくなかった出来事（マイナス面の事象）」のように、相対する見方ができるような教材を

作成した。

イ. 教材文の構成

取材，構成，記述などすべての過程で使えるような文章構成を工夫した。そのため次に示す3点(ア)～(ウ)に配慮した。

- (ア) 段落ごとに内容をまとめる。
- (イ) 段落相互の関係を考えて書く。
- (ウ) 事象と感想，意見を書き分ける。

以上のア・イの観点から，教材1・教材2（本章の資料ページ参照）を開発した。

③ 学習指導過程（7時間扱い 本時4/7時間）

- ア. 自分にとって友達とはどういうものかを考え話し合う。 <1時間>
- イ. 教材1・教材2をもとに，友達関係の価値観の異なる事象（「プラス面の事象」・「マイナス面の事象」）を取材する。 <2時間>
- ウ. 取材した中から価値観の異なる事象を相対比して考え，友達についての考えを深め意見を持つ。 <本時・1時間>
- エ. 意見と事象を照応させて文章構成をし，筋道の立った意見文を記述する。 <2時間>
- オ. 意見と事象とが照応しているかを中心に意見文を推こうする。 <1時間>

④ 本時

ア. 目標

取材した中から，価値観の異なる事象を取り上げ相対比して考え，友達についての意見を持ってカードに書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 教材1・教材2の内容から友達について話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 価値観の異なる事象を取り上げ相対比し，友達について改めて考えること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材1は「友達に何かをしてもらった」というプラス面の体験，教材2は「友達にいやな思いをさせられた」というマイナス面の体験であることを意識させる。 ・ 自分たちの生活の中にもプラス面とマイナス面の事象があることに気付かせる。

<p>② 取材カードを見直し、取材した中から価値観の異なる事象を二つ以上選ぶ。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達に関する自分なりの意見を持つために、適切な事象を選択すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 児童が取材した事象を、次のような観点別に板書し、选材する時の参考にさせる。 ア 友達に何かをしてあげた体験 イ 友達に何かをしてもらった体験 ウ 友達に対して悪いことをしてしまった体験 エ 友達にいやな思いをさせられた体験
<p>③ 価値観の異なる事象を相対比して、友達というものについて考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友達に関する意見を持つこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 個別指導による助言をする。 (個別指導の観点) 上の観点のアとイ、ウとエのように価値観の相対する事象を取り上げて比較させる。 できれば同一の友達に関する事象を対比して比較させることが望ましい。
<p>④ 友達についての意見をカードにメモする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意見を簡単に記述すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意見はメモ程度に簡単に記述させる。 ・ ピンク色の上質紙を切ったカードに書かせ、事象と区別させる。(事象は、水色カードに記述させた。)

ウ. 評価

価値観の異なる事象を取り上げ相対比して考え、友達についての意見を持ってカードに書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 自分にとって友達とはどういうものかを考え話し合う。

これまで無意識にとらえていた友達というものを改めて見つめ直すきっかけとすることが目的である。ここでの話し合いでは「友達とはお金では買えないもの」や「美しいもの」「友達、それは青春」といった観念的で書籍やマスコミからの受け売りの意見が目立った。

イ. 教材をもとに、「プラス面の事象」と「マイナス面の事象」を取材する。

(ア) 取材の観点と評価

まず、プラス面の事象とマイナス面の事象を記述した二つの教材(本章の資料ページ「教材

1)「教材2」)を読むことから始めた。そのことにより、次のことをねらった。

- ・ 教材を読むことにより友達との関わりの中に生じた事象に目を向けさせること
 - ・ プラスとマイナスとの両面の事象に目を向け、両面についての事象を取材すること
- 取材の際には、

「友達に何かをしてあげた経験」 ↔ 「友達に何かをしてもらった経験」

「友達に対して悪いことをしてしまった経験」 ↔ 「友達にいやな思いをさせられた経験」

などのような、価値観の相対する事象や価値観の異なる事象が取材できているかという観点から評価した。取材できていない場合には助言などの方法で指導助言した。この取材が十分でないと考えが深まらない。

(イ) 取材の実際

児童はどうしても教材の内容に引きずられてしまう。最初のうちは、「忘れ物をした時友達に助けられた」や「友達が忘れ物をして困っていたので物を貸した」といった教材と内容の似通った事象を取材する児童が目立った。しかし、級友の取材内容が広範囲にわたってくると、それに触発されて様々な事象を取材するようになった。この他にも、児童は友達との生活の中で様々な経験をしながらも意外と自覚できていないことがあった。そこで、友達との生活を注意深く見守り、児童が自覚できていないような事象を個別に指摘するなどの助言を行った。また、マイナス面の事象を取材することが多い児童と、プラス面の事象を取材することが多い児童がいた。そこで、プラス面の事象にかたよっている児童にはマイナス面の事象を、マイナス面の事象の取材にかたよっている児童にはプラス面の事象を取材するように指導した。

ウ. 様々な事象を相対比して考え、友達についての考えを深める。

友達について価値観の異なる事象など、様々な事象を相対比して考えることにより、児童は友達についてこれまでとは違った考えを持つようになった。特に、同一の相手に対するプラス面の事象とマイナス面の事象を相対比することができた児童は、友達に関して考えを深めやすかった。学習指導過程、アで語られたような観念的な意見は少数になった。反面「友達って一体何だろう」とか「これまでは友達とは自分にとっていいものだと思っていたのによく分からなくなってきた」といった疑問や迷いを示す意見が増えてきた。これらの疑問や迷いも自分なりに考えを深めることができたものと評価し、意見として認め、カードにメモさせた。

エ. 意見と事象を照応させて文章構成をし、筋道の立った意見文を記述する。

今回の学習指導では、意見と事象を照応させて筋道の立った意見文の構成にするために次のような意見文の典型（尾括型）を示した。

(ア) プラス面の事象→そのことに関する考え→マイナス面の事象→そのことに関する考え→新たな考え（意見）

あるいは、

(イ) マイナス面の事象→そのことに関する考え→プラス面の事象→そのことに関する考え→新たな考え（意見）

取材メモを書くとき、事象は水色のカード、考えは黄色のカード、新たな考え（意見）はピンク色のカードと区別してメモしておいた。そのため全員の児童が戸惑う事なく、感想、意見と事象とを照応させて記述することができた。

本章資料ページに児童が書いた作文例を示す。

⑥ 児童の作文の教材化

作文の教材は学習指導の目的に適した児童作品を生かして準備すると効果がある。特に、同じ学校の同学年の児童が書いた作文であれば、児童は一層身近なものとして受け止めることができる。この実践で児童が書いた作文（本章資料ページ「作品1」「作品2」）を他学級で教材として使うために、学習指導の目的に合わせて教材化した。教材化の観点は次の通りである。

ア. けんかの場面の臨場感を出すため敬体を常体に直す。

イ. 段落構成を明確にする。

ウ. 接続語の使い方を工夫する。

エ. きれいごとではなく、児童が自分の頭で考え自分なりに考えている様子をけずりとらないようにする。

オ. 具体的な事象と自分の考えたことを段落で書き分ける。

以上の観点から教材化した文章を本章の資料ページの最後に示す。

うと声をかけたが、

「本当にそんなに痛いのかよ。」

とか、

「オーバーだよ、おまえ。」

などと言つて相手にしてくれないのだ。あまりの痛さに冷や汗が流れてきた。ぼくが腹をおさえてうなづいてみると、中島君と小林君がきて、

「けんちゃん、何やってるんだ。」

と声をかけてくれた。ぼくがやっとのこととでわけを話すと、

「じゃあおれたちが付き合つてやるよ。」

とランドセルを持ってくれた。ぼくは腹をおさえながら少し歩いたが、前より痛くなり二人にストツプをかけた。こんなことをくりかえしながら歩いていると、だんだん中島君のきげんが悪くなつてきた。そして、しまいには、

「お前あまつたれすぎだぞ。」

と、おこりだして先に帰つてしまった。けれども、小林君はぼくがどんなに休んでも一言も文句を言わずに家まで付き合つてくれた。

家に帰るとだれもいなかった。小林君は少し考えていたが、ぼくの腹痛がひどいを見て自分の家から薬を持ってきてぼくに飲ませてくれた。そのおかげでぼくの腹痛は夕方にはおさまった。ぼくは、この時の小林君をみて、自分も友達に対してこんなに思いやりがあるか考えてしまった。

友達は、困っているとき助けてくれることもある。けれども、いつも仲良しでいられるとは限らない。ぼくが腹痛の時家まで送つてきてくれた小林君とだつて大げんかした

ことがある。もしけんかをして仲直りができないようだったら、

それは本当の友達とは言えないと思う。その二人は外見では友達かも知れないが、本当は友達とはいえないのではないだろうか。

友達、それは一体何なのだろう。ぼくは、友達のことについて考えてみるまでは、一緒に遊ぶ仲間、自分の気持ちを分かってくれる人などと考えていた。しかし、作文を書きながら考えてみると、ぼくたちは同じ友達と遊んだり、しゃべったり、けんかをしたり、助けたり助けられたりしていることに気がついた。友達とは一言では言い表せないものだ。

そのおかげでぼくの腹痛は夕方には治りました。ぼくは、この小林君をみて、自分も友達に対してこんなふうに思っているのかと思いました。

友達、それは一体何なのでしょう。ぼくは友達の事をこうして考える前は、仲間、困った時に助けてくれる人、自分の気持ちを分かってくれる人、などと考えていました。しかし、だんだん考えていくうちに考えがまとまらなくなってきました。同じ友達と遊んだり、しゃべったり、助けたり、けんかしたりしているのです。ただ一つ言えることは友達というのは、遊んだり、しゃべったり、助けたり、助けられたり、けんかしたりしてきた人の事だと思います。これは、一言ではとても言い表せません。しかし、だからこそ、友達ということに価値があるのではないのでしょうか。

児童の作文（「作品 一」と「作品 二」）をもとに

作成した教材例

「早くはなせよ。」

「絶対にはなすもんか。」

三階の階段でぼくは小林君ととっくみあいの大げんかをした。理科室からの帰りに小林君がちよっかいを出してきたので、ついむきになってけんかをしてしまったのだ。みんなが近くによつてきてとめようとした。ぼくはおさまりがつかずもつと続けようとした。でも小林君は、ぼくの手をふりほどいて教室に帰っていつてしまった。

それから数日後、小林君からぼくの家へ電話がきた。ぼくはその時家にいなかったのだが、後から母に聞くとあやまりの電話だったそうだ。その時ぼくはちよっぴりくやしいような気持ちがした。ぼくもあやまろうと思っていたのに、先にあやまられたからだ。ぼくにできなかったことを先にやられてくやしかったのだ。でも、あやまられるととても気持ちがいいと思った。ぼくは、小林君とは時々大げんかをするところがある。でも、けんかをしても仲直りできるのが友達だと思う。小林君はぼくにとつてとても大切な友達の一人だ。

それとは別にこんなこともあった。

ぼくが給食を食べているとつぜん腹が痛くなってきた。最初はたいしたことがなかったけれどだんだん痛くなってきた。保健室へ行こうとも思ったがそのうちなおるんじゃないかと思っていかなかった。そうしているうちに授業が終わった。

はやく家に帰ろうとして学校を出た時、ますます腹が痛くなってきた。満足に立てない状態なのだ。みんなに手を貸してもらお

作品 一

「ぼくと友達」

去年の九月ごろ、いままでは仲の良かった〇〇君と口げんかをしてしまった。次の日ぼくは、その〇〇君にあやまろうかと思つた。でもあやまるタイミングをはずして言えなかつた。でもその〇〇君は、ちゃんとぼくにあやまってきた。ぼくは、あやまられたときちよつとくやしい気がした。(中略)

もしけんかをして仲なおりができないようだったら、それは本当の友達とは言えないとぼくは思う。その二人は外けんでは友達かも知れないが、内心は友達ではないのじゃないかと思う。(後略)

作品 二

「友達」

「早くはなせよ。」
「絶対にはなすもんか。」

ここは三階の階段。今ぼくは小林君とけんかをしています。理科室からの帰りに小林君がちよつかいを出してきたので、ついムキになつてけんかをしてしまったのです。みんなが近くに寄つてけんかをとめようとしました。ぼくはもつと続けたかったので小林君が、ぼくの手をふりほめて教室に帰って行きました。それから数日後、小林君からぼくの家に電話がきました。ぼくはその時家にいなかったから何を言ったのか分からなかつたのですが後で親に聞いた話ではあやまりの電話だつたそうです。その時ぼくはとて

もうれしかったです。

ぼくは、時々小林君にちよつかいされます。けれども、小林君はとても大切な友達の一人です。かと言って友達はけんかをする物だと言う事もできません。

ぼくが給食を食べているとつぜん腹が痛くなつて来ました。最初はたいしたことになかつたけれど、だんだんがまんができない痛さになってきました。保健室へ行きましたがなかなか治ってくれません。学校が終わつたので家へ帰ろうとしましたが満足に立てない状態です。みんなに手伝つてもらおうと声をかけましたが、

「本当にそんなに腹が痛いのかよ。」

「オーバーだよ、おまえ。」

と相手にしてくれませんでした。とほうにくれていると、中島君と小林君がきて、

「何やつてるんだ、けんちゃん。」

と声をかけてくれました。ぼくが訳を話すと、

「じゃあおれたちが付き合つてやるよ。」

と快くしよう知してくれました。しかし少し歩くとぼくはまた腹が痛くなり二人にストップをかけました。こんな事がたびたびくり返されていくのですから中島君もだんだん腹が立つてきました。しまいには、

「お前、あまつたれすぎだぞ。」

と、おこりだして先に帰つてしまいました。けれども、小林君はぼくがどんなに休んでも一言も文句を言わずに家まで付き合ってくれました。そしてぼくの腹痛がひどいのを見て自分の家から薬を持ってきてぼくに飲ませてくれました。

△資料「ページ」▽

教材 一

三時間目のチャイムが鳴る直前に、算数でコンパスを使うことを思い出しました。私は、コンパスを持ってきませんでした。すっかり忘れていたのです。

私があわててうろろろしている、大沢さんが、「ともちゃん、どうしたの。」

と聞いてくれました。

「どうしよう、コンパス忘れちゃった。」

「えっ、先生におこられるわよ。絶対忘れるなって言ってたじゃない。」

「どうしよう。」

私はどうしていいか分からなくなりました。

すると大沢さんが、

「二組で借りてきたら。」

と言いました。でも、もうすぐチャイムがなりそうです。

私が困っていると、

「じゃあ、私が行ってくる。」

大沢さんはそう言うてうろろろの方へ走って行きました。チャイムがなったら大変です。私は入り口の方ばかり見ていました。少しすると、大沢さんがあはあいいながらもどってきました。そして、

「はい、これ。二組の斎藤さんが貸してくれたよ。」

と言ってコンパスを貸してくれました。

チャイムがなってガラガラとドアが開き、先生が入ってきました。大沢さんは、あわてて席につきました。

教材 二

「ふざけんよ。おまえのせいだぞ。」

バスケットボールをやっているとき、山田君は自分がバスを失敗してボールを取られたくせにぼくのせいにして文句を言う。その他にもまだいろいろある。

山田君は自分の入りたいチームに入れないとねっころがったりして、

「プロのバスケットを見せてやる。」

などと言ってわざとふざけてボールを全然関係ないほうに投げてしまう。だけど、なぜかみんな文句を言わない。ぼくは、前から山田君のやっていることが好きではなかった。

ある日、山田君の態度にがまんできず、小林君と中島君に相談した。二人も前からぼくと同じ気持ちだったそうだ。その他にも、小川君と前田君も同じだったことが分かった。

考えてみるとぼくたちはおもしろくないと思いつながら山田君の言いなりになっていたのだ。山田君にさからうとうるさいから自分勝手なことをしてもしかたがないように思っていたのだ。

2 豊かに感じたことを書く

作文を書くということは、児童の生活体験や興味・関心、言語感覚と深く結び付いている。特に、心情的内容を伴う文章を書くためには、児童一人一人の経験を豊かにし、感想を持つことや、読書を通じて豊かに感じたり考えたりする力を育てる等の指導が必要である。

作文すなわち生活文（特に行事作文や日記文）ととらえている児童もいることから、「豊かに感じたことを書く」学習は、既に十分行われているかと思われるが実際はそうではない。題材として、単に書かせやすいと言う点にのみ頼った指導となっていないかどうか、考えてみる必要がある。生活文のみに限定することなく、感想文、手紙文、創作等もふくめて、題材を広げ、「豊かに感じる」ことの経験の場を多く設定していきたい。

指導方法の工夫としては、次の点に配慮していきたい。

- ① 学習の目標をしっかりとつかませる。
- ② 記述前からの意欲づけ、動機づけとなる指導を意識して行う。
- ③ 相手意識をもたせ、意欲づけを図る。
- ④ 共通の体験から題材を選ぶ。（特に低学年）
- ⑤ 記述中の個別指導を充実する。（例：書き出し文例、会話文例、語彙指導）
- ⑥ 様々な視点、時間、立場からの記述など、方法を変えてみる工夫をする。
- ⑦ 推敲は、児童の負担にならないよう、観点をしばって行わせる。
- ⑧ 完成した後、友達同士で読み合ったり、発表したりして認め合い、次の意欲へつなげる。

「豊かに感じたことを書く」ためには、豊かに感じる心の育成と、感じたことを表現できる技能の育成の両面が重要となる。児童にとって、興味や関心を持って生活をふり返ってみる機会を、教師が意識的に作っていかなければ、感性は育っていかないであろうと思われる。何故ならば、いま児童たちはたくさんのもの、たくさんの情報の中で生活している。一つのものをじっくり見て、その美しさに感動したり、物事に感激したりする経験が乏しくなっている。例えば、遠足の行事をとってみても、かつては前夜から嬉しくて眠れないというほどすばらしい楽しい経験であり、豊かな心情表現につなげ易かった。しかし、家族でどこへでも出かけられる経験が豊富な車社会の今、遠足前夜に嬉しくて眠れない児童は少ないであろう。

豊かに感じるということそのものが乏しい今だからこそ、豊かに感じさせ、豊かに表現させていくことが一層重要なのである。表現技能の育成と共に、豊かに感じ、美しい言葉で表現できる児童を育てていきたい。

(1) 第1学年の教材と指導

想像をふくらませて ——— 創作

題材名 「え本をつくろう」

① 目標

- ア. 絵を素材にして、楽しく想像をふくらませ一連の話をつくり、絵本にまとめることができるようにする。
- イ. 絵と対応させて、自分の想像をふくらませ話の筋を豊かにして文章に書くことができるようにする。
- ウ. 「 」を使って会話を書いたり、片仮名を使って擬声語や擬態語を書いたりすることができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

1年生の児童が、喜んで楽しみながら書く作文指導を目指して設定した単元である。1年生の児童も3学期になると、自分の興味がわくことに対しては積極的に書くようになる。また、経験などを時間的な順序で書くこともある程度はできるようになってくる。文章に会話を入れて書く時は、かぎっこ（「 」）を使うということについて理解はしているが実際に文章を書く場合、その表記は必ずしも正確ではない。片仮名を読むことは大体できるが、どの様な語が片仮名を使って書く語であるかについては理解していない。さらに、文章を書いた後、書いたものを読み返すことが習慣として身に付いていない。そのため、教師の指示を待って表記上の誤りの訂正をすることが多い。

このような1年生の児童の実態から、次のような作文指導を設定する。

児童が、書くことに興味を持ち順序をたどって喜んで書く。書いた文や文章を読み返し、誤りがあれば、友達に読んでもらうために正しく整えて書き直す。児童が、書く文章には必ず会話や片仮名で書く語が入るようにする。そのため、動物の絵を素材にして、児童が想像して書くことの楽しさを味わうようにし、絵の順序をたどって全体の筋が通るように書き、表記上の誤りなどを見つけられるようかぎっこ（「 」）や片仮名の使い方にも注意して文章を書くようにする。

ア. 教材の内容

児童に6枚の絵を与えた。(本章資料ページ参照)

この中から、①の絵1枚だけは固定し、残る5枚(A, B, C, D, E)の絵から3枚を選ば

せて、合計4枚の絵から想像して一連のまとまりのある話につくり上げさせることとする。

絵の中に、自転車の音、風船が割れる音、風の音など音が想像できるようにした。これは、片仮名の表記で書く場を設定するためである。

しかも、①の絵の後にA, B, C, D, Eのいずれの絵がどの様に並んでも話として成り立つように工夫した。

イ. ①の絵1枚の固定

①の絵1枚を固定したのは、話の発端としてはっきりしたものにするのと指導事項を徹底するためである。4枚の絵のうち、1枚を固定することでこの共通の絵をもとに、2匹の動物の間に交わされるであろう会話を想像させ、会話文の書き方を指導できる。一斉指導を行うには同一の絵である方が指導しやすい。

ウ. 3枚の絵を選ぶ

一人一人の児童が、自分の想像力を働かせて自由に豊かな発想で書くことができるよう好きな絵を3枚自分で選ぶようにする。上に述べたように、いずれの3枚を選んでも話として成り立つばかりでなく、いずれの3枚を選んでも必ず音が組み込まれるようになっている。

自分の好きな絵を、好きな順序に並べて好きな話をつくると、それは友達のつくった話とは異なり、出来上がった絵本は自分だけのオリジナルとなる。そこに、またつくり上げた喜びもあらうと考えられる。

エ. 台紙の工夫

1こまごとに、話をつくり最後に絵本として仕上げる。絵を貼り、文章を清書して1冊の絵本につくりあげるのである。台紙は、4つ切りの画用紙3枚を和紙でとじて準備した。表紙に話の題名を書き、中の4ページに絵と文章をレイアウトさせた。裏表紙に自分の名前を書いて出来上りである。なお、台紙は縦とじと横とじとの2種類を作成し、児童の好む方を自由に選ばせた。市販の絵本にも、縦ながのものと横ながのものがあって絵の位置も、ページのまん中にあるものやページの上または下にあるものなど様々である。児童の好みの形の台紙に好みのレイアウトをするのは、楽しい学習となる。いずれの台紙にも前もって書きやすいよう縦線を引いておいた。(本章資料ページ参照)

③ 学習指導過程 (6時間扱い 本時3/6時間)

ア. 絵本をつくる目当てをもち、どんな絵本をつくりたいかイメージを話し合う。〈1時間〉

イ. 絵と文章をつなげて粗筋を考え、想像をふくらませながら文章を書く。

〈4時間 本時その第2時〉

ウ. できた絵本を読み合い、話の違いを比べるなどして楽しむ。

〈1時間〉

④ 本時

ア. 目標

絵をもとにして、会話などを入れながら自分の想像したことを話としてまとめ、絵本の前半を文章に書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 本時の学習の目当てをつかむ。		<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めの2枚の絵について話をつくることを確認する。 ・ 2枚の絵と吹き出し、作文用罫紙だけ机の上に置かせる。
② 最初の絵で、友達の書いた会話と自分の書いた会話とを比べ、違いを話し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ かぎ（「 」）の使い方に注意すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 内容の異なる会話を2～3吹き出しで示し、筋の違いに気付かせる。
③ 会話が入ると話はどうか考え、気付いたことを発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 会話のあるなしで文章に違いがあることに気付くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「楽しい」「よく分かる」などのうち、「よく分かる」を強調する。
④ よく分かる話にするために会話以外に書き加えることがないか考え、気付いたことを発表し合う。		<ul style="list-style-type: none"> ・ 登場人物の気持ち、音、その他発言によって板書する。
⑤ どのような話にしてどのように書くか考える。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 場面や様子が分かるように書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 絵本の一部（1コマの絵に会話、音、気持ちが書かれている）「ジャックと豆の木」をOHPで示す。
⑥ 2枚の絵を並べてどんな音が想像できるかどんな音が書けそうか考え、発表し合う。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 片仮名で書く語に注意すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 初めに粗筋のみ、次に会話それから音という順に提示していく。 ・ 絵では分からないことを文章で書くことに気付かせる。 ・ 音の表記は、片仮名であることを確認し、何からどんな音が聞こえてくるか想像させる。

<p>⑦ 最初の1枚の絵について吹き出しの会話を入れて話を書く。 2枚目の絵についても話を書く。</p> <p>⑧ 書いたものを発表し合い自分のものと比べる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 書いたときの観点を想起して友達の文章を読む。 自分の文章を読み返して誤りを正す。 <p>⑨ 絵と文章をどのように配置するか考えて、台紙に絵を貼り文章を清書する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> かぎ（「 」）の使い方に注意すること。 語と語とを続けて文を書くこと。 文と文とを続けて文章を書くこと。 順序をたどって、文章を書くこと。 自分の書いた文章を読み返し、間違いなどに注意すること。 <p>・ 読みやすいようにていねいに書くこと。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 会話は必ず入れて書くようにさせる。 書くことに抵抗のある児童に対しては、机間巡視で個別指導をする。 2枚目の絵をどう選んだか先ず話させる。 読む時に観点として、筋、会話、音や気持ちを示す。 全体で読む児童の作品はOHPで示す。 筋と会話に気を付けて訂正させる。 <p>・ レイアウトのサンプルを2～3示す。</p> <ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて実物の絵本を取り出し自由に見られるようにする。
---	---	--

ウ. 評価

話の筋を考え会話などを入れながら、豊かに想像をひろげて文章を書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 4枚の絵を選ぶ

6枚の絵から4枚の絵を選んだ時点で、児童は話の筋のイメージを描いていた。自分の選んだ絵と友達の選んだ絵とが異なるのも話の筋が異なると理解して、自分のオリジナルをつくることを楽しんでた。①の全員共通の絵をもとに、ウサギとクマに好きな名前を付けさせるとウサギとクマそれぞれを男の子と見たてたり女の子と見たてたりしていた。ある児童は、うさきちとくまろう、ある児童は、びよん子とけんすけなどである。登場人物の名前を付けて、絵に色などを塗りながら話の筋をふくらませていった。

イ. 会話の指導

全員共通の絵をもとに、ウサギとクマの会話を自由に想像させあらかじめ作っておいた吹き出しに書かせた。次に2例を示す。

A男 「うさきちくん。ほら、ふうせんが二つあるよ。とってあそぼう。」

「うん。一つはぼく、一つはきみのだよ。」

B女 「びよん子ちゃん、おかしい花がついているよ。」

「花といってもふわふわしてるわ。それに花びらもないわ。」

同じ絵から想像した会話も、児童一人一人によって様々である。その違いが筋の違いになることを児童は容易に理解し、話をつくる楽しさを発見していた。そして、会話を入れて書いた文章が、筋だけよりもよく分かるし、より楽しいということにすぐ気付いていった。1年生であっても、「よくわかるように」と板書すると会話を入れて書くことにはすぐ気付いた。

ウ. 音や気持ちを書く

絵では表現できない音や気持ちを書くという指摘は、児童からすぐに挙げられた。そこで、OHPで「ジャックと豆の木」の絵を投影し、粗筋だけを読ませて「さあ、どんな音が聞こえてきた？」と問うと、「ミシミシ」「ドシンドシン」など自由に発言した。次に、音の書かれた文を示し、「この時のジャックの気持ちはどんなだったかしら？」で、自由に想像したことを発表させジャックの気持ちを書いてある文を提示していった。

こうして、会話・音・気持ちが書かれるとよく分かる話になることを板書していった。但し指導者としては、全員が「会話の入った文章を書く」ことを達成する最小限の目標とし、音・気持ちについては、児童の言語能力によって書けない場合もあり得ると予想していた。

エ. 記述

2こまの絵について児童が記述する間、机間巡視によって児童の作業の状態を確かめ、必要に応じて個別指導を行った。一人一人の書く内容や書く時間は、それぞれに違っている。書き始めると、新しい疑問や問題を発見する児童もいる。尋ねたいことがある場合、児童が黙って挙手をし、すぐに教師がそこへ行く。書いている他の児童のじゃまにならないように、一対一で対応する貴重な時間であった。

記述に要した時間は、早い児童が2こまで10分、遅い児童が1こまで10分と倍の差があった。早くできあがった児童の中から、2点を選び出し実物投影機で複写し、スクリーンに示した。これを全員に読ませたのであるが、指導の効果を考えて会話・音・気持ちのいずれもが書かれている作品を取り上げた。そして、よく分かる話になっていることを共通理解していったのである。

記述に際して、児童に与えた罫紙は、B5を縦にして1.5センチはばの縦罫とした。これは絵本にするとということから、あまりにも話が長すぎることを防ぐよう4つ切りの画用紙に絵と文章とを配置できるよう考えたためである。それでも中には、「先生、紙がたりなくなった。」と言いつつ児童もいて「1ページの中に絵と文章がはいるのよ。はいりますか。」と、注意を

しなければならなかった。

オ. レイアウトと台紙

絵本の台紙は、初めホッチキスでとじたりセロハンテープで貼ったりしてみたが、和紙でいいねいに貼り合わせたものが最も書き易く扱い易いのでそのようにした。(資料ページ参照)しかし、授業以前の準備で一人の教師がこれに費やす労力は大変なものである。こうした作業をも例えば他教科との関連を工夫するなどして、授業の過程に組み込んでいく必要がある。

カ. 読み直しと清書

話をつくる時には、上に述べたようなB5の罫紙を使用した。絵を台紙にレイアウトしてから余白に文章を清書することになる。その時には、誤字や表記に誤りのないようていねいに書くよう指示した。友達等に読んでもらうという目的があるため、熱心に清書していた。

キ. 一斉指導と個に応じた指導

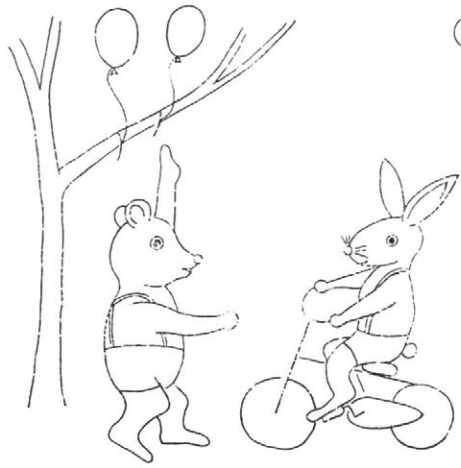
児童の作業の進み方は、まちまちである。一人一人の作業の進捗状況を、的確に把握しながら、一斉指導と個別指導を有効に行う必要がある。そして、絵に着色したり台紙に絵を貼ったりする作業と文章を記述することに大きな時間差が出すぎないように配慮する。

総ての児童に指導が必要な場合は、総ての児童が同じ作業の段階で同じ条件で一斉指導を受けられるようにする。一方の児童は、まだ作業が至らないうちに一斉指導で更に先の内容について指導を受けるといようなことは、避けなければならない。

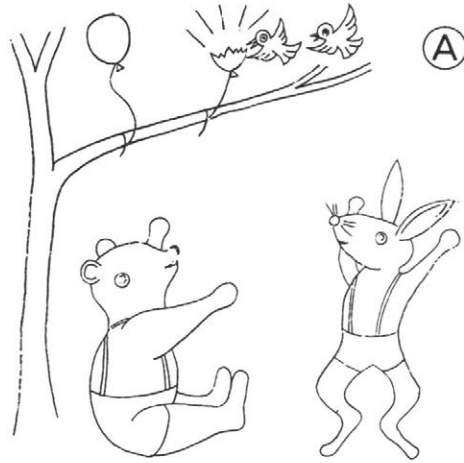
〈資料ページ〉

①の絵だけ固定し、他の絵五枚から三枚を選ぶ

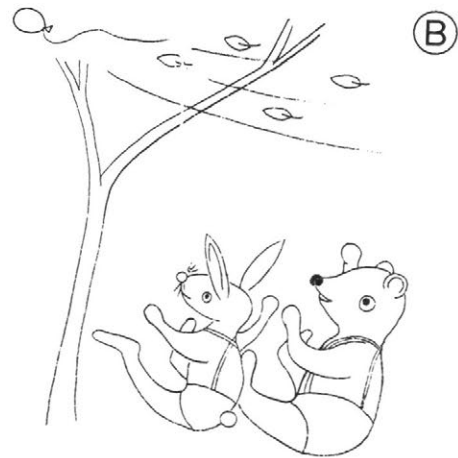
!



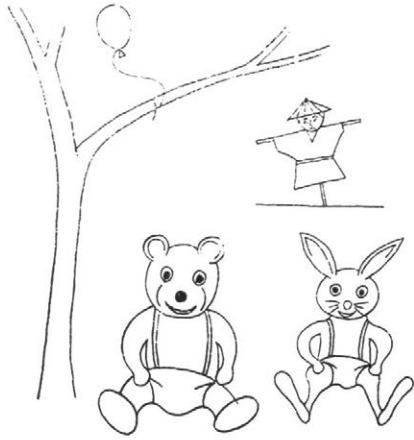
A



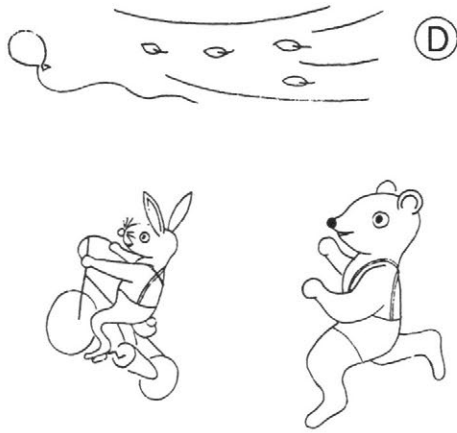
B



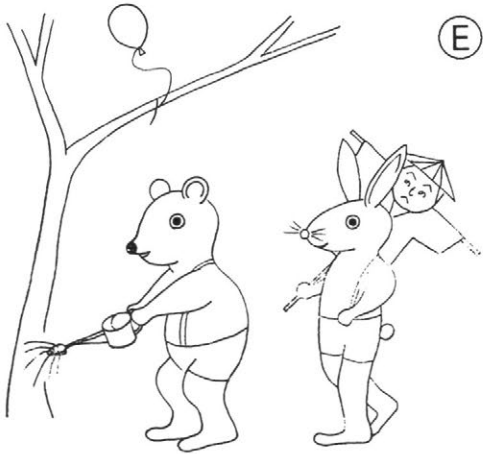
C

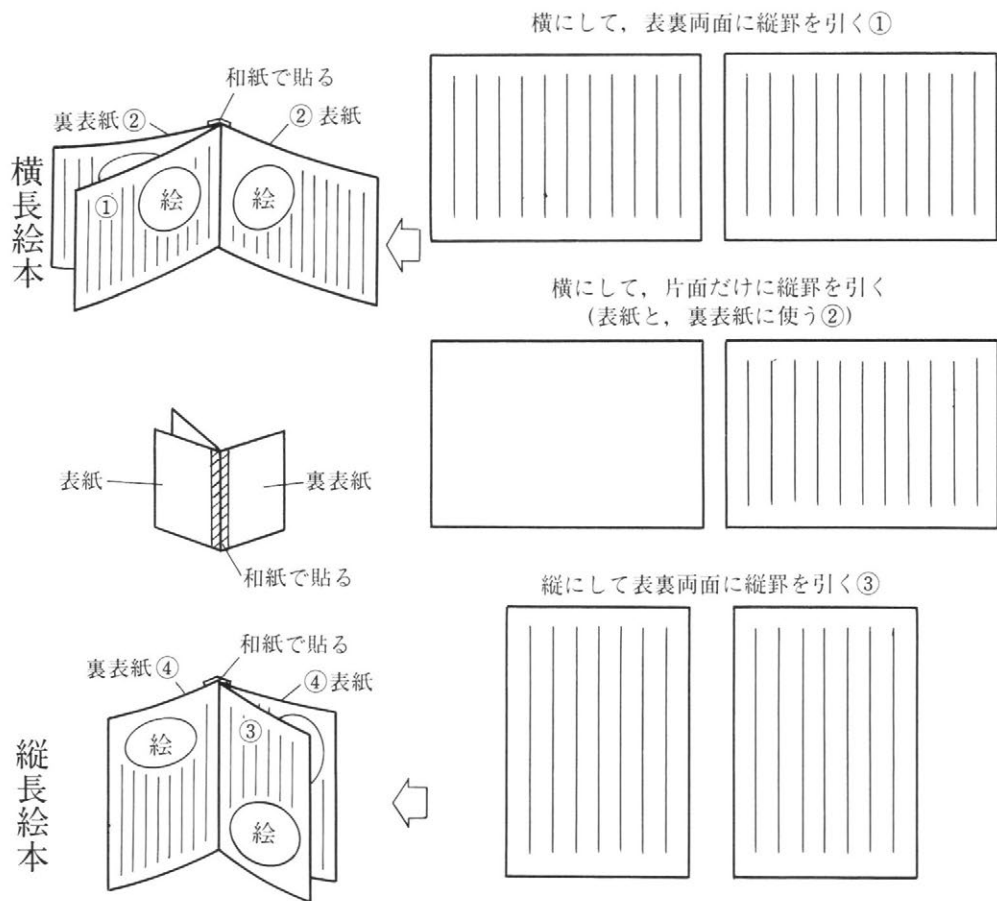


D



E





絵本にする四つ切画用紙の使い方。横長か縦長か、好きな型を選ばせて、選んだ絵を縦罫の上に貼る。

児童作品例

- ① びよみ子とくまひろというとてもとってもなかのよいともだちがいました。ある日くまひろがふうせんを二つかいました。一つは青、もう一つは赤でした。くまひろがふうせんを、木のえだにちようどむすびおわたたとき、びよみ子がリンリンとじてん車にのってきました。そして二りははなしあいました。
- 「この赤いふうせんはきみの。青いのはぼく。」
- くまひろがふうせんをゆびさしていいました。
- 「うん、いいよ。」
- とびよみ子がいいました。
- 「ひとり」こでちようどよいかずだね。」
- とくまひろはいいました。二ひきはここにこです。
- ② 「ピーピーヨビヨ」
- そこへ二わのことがきました。そしてこえをそろえていいました。「ピーピーいいな。さわっちゃお。」
- 略

余白となる罫の中にお話を書く。

(2) 第2学年の教材と指導

思ったこと・感じたこと —— 順序をたどって書く

題材名 「かん字のテスト」

① 目標

- ア. 漢字のテストで経験したことをよく思い出して書くことにより、漢字の学習に対する意欲を持つことができるようにする。
- イ. 順序をたどってできごとを見つめなおし、様子や気持ちがよく分かる文章を書くことができるようにする。
- ウ. 会話や気持ちや行動を入れて文章を書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

第2学年では、指導の内容に「経験した事などについて順序を整理して文章を書くこと」がある。そこで、児童が実際に経験した事を順序をたどって文章に書くような題材を設定した。

児童が実際に経験する事柄としては、次の観点を考慮した。

- ・ 児童の生活を向上させるに望ましい経験であること。
- ・ すべての児童が共通に経験できること。
- ・ 順序をたどって経験ができること。
- ・ 経験する過程で様々な思いがもてること。

以上の観点から、国語の学習の漢字テストを取り上げた。

ア. 国語の時間に10問の漢字テストを実施する。(1日め)

教師の指示は、言葉をできるだけ明確にゆっくりと児童の一人一人を見ながら言う。

「これから、漢字のテストをします。10問です。どの位書けるでしょうか。」

黒板に10題の問いをかな書きで示し所定のワークシートに漢字を書かせる。書けた児童から教師の所へ提出させ、これを直ちに採点して返す。その時、漢字テストの結果やそれに対する思いを問う。

「何点でしたか。この漢字テストを見てどう思いましたか。」

ここで、「できてよかった。」とか「ちゃんと勉強していなかった。」あるいは「できなくていやだった。」等思ったことを児童に自由に発表させる。

次に、明確にゆっくりと指示をする。

「家に帰って、家の人に見せたら家の人が何と言うかよく聞いてらっしゃい。」

「明日も同じ漢字のテストをします。問題も順序もまったく同じです。勉強してくれば、書けますよ。」

イ. 国語の時間に10問の漢字テストを実施する。(2日め)

「漢字のテストを見て、家の人は何と言いましたか。」と問い、発表させる。

その後、1日めと全く同じ漢字テストをし、1日めと同様直ちに採点して返す。結果やそれに対する思いを問うのも同様とし、家に持ち帰ってからの指示も同様とする。

ウ. 国語の時間に10問の漢字テストを実施する。(3日め)

漢字テスト終了後、すぐに作文を書く。

これは、具体的な経験から実際に作文を書くまでの時間をできるだけ短くするように考えたためである。

③ 学習指導過程 (4時間扱い 本時3/4時間)

ア. 10問の漢字テストを3回実施する。(約30分で3日にわたる)

「漢字のテスト」について様々な経験をする。 <2時間>

イ. 3回の「漢字のテスト」を振り返って作文を書く。 <本時・1時間>

ウ. 書いた作文を読み返し、間違いなどを正しく直す。 <1時間>

④ 本時

ア. 目標

3回連続の漢字テストの経験を思い出して、自分の心情を、家の人との会話を入れながら書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 書く目当てを明確にする。		・ 「かん字のテスト」と提示する。
<p>これまでのかん字のテストを通して、家の人にいわれたこと、先生にいわれたことを思い出して、自分の気持ちを書いてみよう。</p>		
② すぐ書けそうか考える。		・ 伝える相手は、先生であることを意識させる。
③ テストの順序や得点など	・ これまでのテストを	

<p>を思い出す。</p> <p>④ 思い出したことを話し合う。</p>	<p>思い出すこと。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 順序をたどって、経験を整理すること。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話し合いをさせながら、思い出すための手がかりを板書する。
<p>1 かい目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何点? ・ 返してもらった時の気持ち——家の人になんといわれた?——その時の気持ち <p>2 かい目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 何点? ・ 返してもらった時の気持ち——家の人になんといわれた?——それで? <p>3 かい目</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ やる前の気持ちは ・ やってみて ・ 返してもらったら 		
<p>⑤ 記述する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 気持ちが分かるように書くこと。 ・ 会話文は「 」を使って書くこと。 ・ 順序をたどって書くこと。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 記述中に、机間巡視をして個別指導をする。 ・ 記述を始めたら、書き上げるまで一気に書かせ、途中で停止をかけない。

ウ. 評価

テストの結果をよく思い出して、会話文などを入れながら自分の気持ちを文章に書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 漢字のテストを経験し、題材にする。

国語の学習の中から、学習のテストの場面を切りとりこれに対する様々な思いを経験するようにした。漢字のテストは10問とし、最近学習した漢字を含め比較的易しい漢字と難しい漢字を取り混ぜた。今回は、漢字のテストをすることを児童に事前に伝えなかったが、予め伝えて

おくことも考えられる。その場合、取った点数とこれに対する反応は今回とは異なると予想される。10問の漢字のテストは、テストをして児童の漢字力を把握することを目的とするのではない。1回め、2回め、3回め、と3日にわたって同じ漢字のテストをしたのは、その間児童が漢字の練習をすれば、満点が取れるようにとの配慮からである。

努力をして1回めより2回め、2回めより3回めと少しずつでも書ける漢字が増えるようになることは、児童にとっても良い経験となる。

そして、1回ごとに自分が何を思いどう感じたか、更に、家の人に何と言われたかを意識させた。そうすることにより、自分の心情を家の人との会話を入れながら表現できるようにしたのである。

イ. 記述前の指導——本時の学習活動 ①, ②, ③, ④

- ・ 第3回めのテストを返す。
- ・ これまでの3回のテストを振り返って、感想を話し合う。
- ・ 書く目当てを持つ。——これまでの漢字テストを通して、家の人に言われたこと、先生に言われたことを思い出して、自分の気持ちを書いて先生に伝えよう。
- ・ 「すぐ書けそうか。」と問うと「書ける。」という児童もいるが、戸惑う児童もいる。そこで思い出す観点を話し合いながら板書した。これは「何を書いたらいいかわからない。」という児童には有効であった。特に、書くことの苦手な児童は、「はじめは何を書けばいいかわからなかったけれど、先生が黒板に書いてくれているうちに、書くことがいっぱい出てきて、書けるようになった。」と言っていた。

⑥ 学習指導を展開して

児童が書く題材を、国語の学習指導における極めて日常的な経験である漢字のテストとしたことは、題材作りも国語の授業時数の中でできるのがよかった。

「書くことがない。」「何を書いたらいいかわからない。」と言う児童は、作文を苦手とする場合が多く、今回の指導はそうした児童が喜んで書くようにということをねらったものである。後に示す作品例は、作文を苦手とする児童のものである。

この児童の作文を見ると、表現の仕方や書き表す順序が教師の板書の通りである。このように忠実に教師の指導をたどること、そして「今日の作文は、書くのに困らなかった。今日の作文は、とてもよく書けた。」と言っていることから、丁寧な指導がいかに大切かを改めて実感する。

作文は、一斉に指導はしても個の学習であり、個に応じた指導を進めなければならない。

作品例から、児童の考え方の筋道をたどることができる。

△資料。ページ▽

児童作品例

かん字のテスト

一かい目のときは、四十点。ぼくは、先生のところへかみを出しに行く。人がいっぱいならんでいる。

まえの人をちよつと見ると、かん字を書くじゅんじよがちがつても、よさそうなのだ。

月曜日、ずうつと遠くのほうに目をむけると、草原と書いてあった。それで、ぼくは、いそいでつくえへむかつて、草原を書こうとした。

そうしたら中田先生が、

「おい。つくえのほうにもうかえるな。」
といった。

それですべってしまった。

「いてて。」

といってしまった。

うちにかえっておかあさんにいうと、

「四十点。かん字のれんしゅうしなくてはだめね。」

ぼくは、

「こんどこそ、百点をとってやるからな。百点の人はうれしいだろうなあ。百点をとるぞ。」
と思った。

それから、ちよつとして二かい目。その日は六十点。先生がかみをくばるとき、

「このかん字、テストがもうおわりなのかなあ。もし、これでかん字のテストがおわりなら、れんぞくで百点とらないなんてやだなあ。こんどこそとってやるぞ。」
と思った。

先生がかみをくばりながら、

「きよう百点とらないのは、すごいなまけものだ。そうとうのなまけものだ。」
といった。

「ぼくはかん字のれんしゅうやったからへいきだろう。」

と思っていいたらそうぞうちが이었다。ぼくは、きのうとちがうかん字のれんしゅうをやってきたからだ。

中田先生が

「このまえとおなじだよ。」

みんなが

「じゅんじよは。」

中田先生が

「じゅんじよもかん字も、みんなこのまえとおなじ。」

ぼくはドキドキした。かん字をかいているとき、字がおもいう

かんだ。

中田先生が

「はいおわり。」

といった。

(2) 第3学年の教材と指導

楽しく遊んだこと ————— 要点を押さえて書く

題材名 「ジャングルたんけん」

① 目標

- ア. ジャングルたんけんごっこをして、一番楽しかったことを中心に文章を書くことができるようにする。
- イ. 文章に書く必要のある事柄を選び、区切りを考えて感情豊かで様子が分かるように書くことができるようにする。
- ウ. かぎ（「 」）や句点を適切に使って文章を書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

本学級の児童の意識を調べたところ、作文を苦手とする児童は「書くことがない。」という悩みをもっていることが分かった。遠足に行くのはいいが帰ってから作文を書くのはいやだ、といった声もよく聞かれるところである。書くことがないという児童には「よく思い出して書きなさい。」などの助言をしたところで大きな効果は望めない。したことを思い出させるより「これなら書ける。」と思えるような体験をさせた方がよい。そのため、児童にとってインパクトのある体験をさせ、印象が新鮮なうちに文章表現させたいと考えた。そこで、児童の書くという意欲を高め、様子などの描写の力を高めることをねらってこの題材を設定した。

イ. 教材について

本教材の学習指導では、教材文や取材のためのカードといった教材は一切準備しなかった。そのかわり、児童が「これなら書ける。」と思えるような工夫をすることにした。作文を書かせるために楽しく遊ぶ場を設定したのである。このことこそ、本教材のねらいを満足させる教材であると考えた。

具体的には、児童にジャングルたんけんごっこをしようと投げかけ、体育館を使って会場を設営することにした。会場内の装飾や配置などは児童と相談しながら準備をした。会場設営ができると、ジャングルたんけんごっこをして楽しみ、印象が強いうちに作文を書くことにした。（「ジャングルたんけん」の会場図は「⑤ 学習活動の実際」を参照のこと）

③ 学習指導過程（全体5時間扱い 本時4/5時間）

- ア. 楽しく遊んだことを作文に書くという学習内容を知り、どのような会場にしたいかについて話し合う。 〈1時間〉
- イ. 会場に飾る絵などを作り、ジャングルたんけんごっこをして楽しく遊ぶ。 〈2時間〉
- ウ. 遊んだことを思い出して作文を書く。 〈本時・1時間〉
- エ. 推こう、清書をする。 〈1時間〉

④ 本時

- ア. 目標 楽しく遊んだことを思い出して、情景が分かるように書くことができる。
- イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 本時の目当てを知る。	・ 楽しく遊んだことを思い出して、作文を書くという目的を確かめること。	・ 次のことを板書し、情景を思い出しながら話し合うようにさせる。
② 遊んだことについて話し合う。 ・ 学級全体で話し合う。 ・ 一緒に遊んだ友達と話し合う。	・ 自分にとって特に楽しかったことを詳しく思い出すこと。	友達と話したこと（会話） 一緒に遊んだ人、遊んだものあたりの様子（歩き方・手ざわりなど） ・ 会場に飾った絵などを準備しておきこれらを示しながら話し合ってもよいことにする。
③ 話し合ったことをもとに、作文に書くことを決める。	・ 作文に書く事柄を選ぶこと。	・ 印象に残ることの中から1～3程度を選んで書くように指示する。 ・ 板書に注目させ、情景描写ができるようにする。
④ 楽しかったことを作文に書く。	・ 情景が分かるように記述すること。	・ 次のような観点で机間指導をする。 書き出して迷っている児童に対する助言をする。 あまり多くの事柄を作文に取り上げないようさせる。 情景描写がない児童に助言をする。

会場作りをする前に、会場にいたらよいと思う動物を考え準備した。児童は、ライオンやひょうといった猛獣の絵を書いたり、段ボール箱を利用してぞうなどを作ったりした。中には、現実にはいない恐竜などを作った児童もいた。準備を通して、児童たちはジャングルたんけんごっこに対する意欲を大いに高めることができた。

会場は体育館に設営した。跳び箱をならべて丘にし、上り綱をターザンロープにした。平均台は険しい山道であり、ろく木はゴリラの住む山にした。ビニール製のひもを用いてワニやピラニアの住む川をつくり、体操用の輪（フラフープ）で川の中に島をつくった。そして、自分たちで準備したライオンやひょう、恐竜やゴリラなどを取り付けた。会場内は暗幕を引いて薄暗くした。このため一層ジャングルの雰囲気を出すことができた。

会場は使い慣れた体育館であり、目の前にあるのは、跳び箱や上り綱、ろく木や平均台といったなんの変哲もない体育用の教具であった。しかし児童の目には、猛獣のいるジャングル、ワニやピラニアの住む恐ろしい川などに映るのであろう。児童は本物のジャングルにいるようにおびえ、本当のたんけんに行くように勇んで取り組んだ。特に人気のあったのはターザンロープであった。児童はロープにつかまり、ワニやピラニアの住む川を飛び越えるのだ。真下には、児童が持ってきた大きなワニ型の浮袋が置いてあった。児童にとって、それは本物のワニに見えるのだろう。どの児童も歓声をあげ、たんけんごっこを繰り返した。

児童にとって印象に残る体験であったと考える。

イ. 作文の記述

印象が新鮮なうちがよいと考え、作文はジャングルたんけんごっこをした翌日に書いた。

記述前に話し合い活動を取り入れ、楽しかったことを確認させた。その際、「友達と話したこと（会話）」「いっしょに遊んだ人」「遊んだもの」「あたりの様子（あるきかた・手ざわりなど）」といった事を板書し、これらを意識して話し合わさせた。そのため、様子や会話を詳しく思い起こすことができた。

作文は様子や会話を分かりやすく書くように指示した。中でも、会話は必ず入れることにした。前日のジャングルたんけんごっこの印象が強い上に、話し合いでも意欲を高められたため、書きたいことがたくさんある児童が多かった。しかし、多くの出来事を取り上げると、だらだらした作文になる可能性が高い。そこで、1～3の特に印象に残った事柄を取り上げて書くように指示した。書くべき事を自覚できていたため、児童全員が悩む事なく作文を書くことができた。

なお、文章を書くとき原稿用紙のます目が記述の妨げになることがある。そこで、上質紙に縦けい線を印刷し、ワニやライオンの絵で装飾したものを配布して記述させた。

とうきました。ういているとちゅうで山田くんが川をひろげました。わたれたことはわたれたけど足だけりくについていて、からだは川の方にかたむいていて川におちてしまいました。けど下にフラフープのしまがあったからセーフでした。上田くんが、

「すごくあぶなかったね。」
といいました。

つぎはへいきんだいで、あるいていたらおされました。おちたと思ったら、上田くんが、

「あぶないよ。」
といてひっぱってくれました。

先生がよんだからスタートにもどりました。とてもたのしかったです。またこういうことをやりたいなあと思いました。

でもすべりおりたときに手をすってしまいました。そのときはとてもいたかったからおもわず、

「いててて。」

といました。

つぎはゴリラ山です。山本さんにいました。

「もうすぐゴールだからがんばろうね。」

といました。

やっとゴールにつきました。ついたときはほっとしました。とてもおもしろかったです。

児童作品 三

ジャンゲルたんけんのスタートはおかからず。おかはとびばこでつくってありました。おかの間をとびこえてむこうのおかまでひととびでいくのです。おりるところがせまいので気をつけました。

次はターザンロープです。そのロープは木のつるのようなものです。わたしはそれが一番楽しかったです。なぜかというのなら、ロープの上にあがって川をこえてむこうぎしにいくと、とても気もちがいいのです。風をきつていくのですから、とてもたのしくつたまらないうのです。川におちたらしくかくです。気をつけなければワニやピラニアにたべられてしまうのです。でも、ターザンロープをやるのに長いれつになりました。友だちは、

「長いれつだね。」

といました。

やっとじゅん番がきたときは、思わず、

「やっときたよ。」

といました。

いっきにとびのって、ビューンといてあつという間にもくてきちにとびおりてしまいました。

おつぎにへいきんだいです。一回目はおつちそうになりました。けれど、なんとかバランスをととのえてぶじとうちゃくです。ゴリラ山はろくぼくをよこへよこへとすすんでいって、足をすべらせないように気をつけてゴールです。とつてもたのしかったです。

児童作品 四

きのう、体育かんで、ジャンゲルたんけんをしました。

ぼくは、上田くんと、ターザンロープで川をわたりました。

上田くんが、

「わたれたよ。」

といました。

ぼくが、

「上田くん、ターザンロープかして。」

といました。こんどはぼくがわたりました。ターザンロープの上の方をもって、じよそうをつけて、ジャンプしました。ちゃん

△資料ページ▽

児童作品 一

きのうの一、二時間目に、ジャングルたんけんをしました。二組の人たちと、いっしょにやりました。

さとうさんと、小川さんといっしょにやろうとして、さいしょのうちはいっしょだったんだけど、ターザンロープのところで、別れちゃいました。だから、そこから、ずっと一人であそびました。ターザンロープにのるのが、三回目ぐらいの時、川がすごく太くなっていました。何回も何回もおうふくして、五回目ぐらいの時、先生が川の中にいて、ワニをうごかしていました。わたしの、あしが、ワニにあたって、先生がしりもちをつきました。「やられたあ。」なあっていっていたけれど、わたしは、川のせん、ぎりぎりですとおりぬけられました。平さんだいを、とおりこして、ゴリラ山をぬけ出しました。川の中にある小さなしまをふんどおりこして、やっとならべました。おかまでいったら、先生がジャガーになって、みんなにおそいかかっています。けれど、うんがよく、前の男の子をおいかけているあいだに、さっと、とおりこしました。わたしは、

「先生え。」

ってよんで、先生ジャガーが、こつちをむいたら、一どわたしが、

「あかんべえ。」

と、いって、わらいながら、にげちゃいました。ターザンロープの一番すいている場所にいて、あっという間に、川をとおりにして、平さんだいははして、ゴリラ山をあわててとおりました。けれど先生ジャガーは、川をわたれませんが、小さなしまないからだめです。おかのところにいく前で、うわばきをぬいでくつしたをくつにしてあそびました。

とっても楽しかったです。

児童作品 二

きのうジャングルたんけんをしました。ライオンやきょうりゅうや、ターザンの中でいちばんのしかったことは、ターザンをしたことでした。

さっそくグルーブをつくっていつてみることにしました。

さいしょにライオンのところです。山本さんにいきました。

「食べられないでいけるかな。」

といいました。しんばいしながらすばやくいきました。

そのつぎは、川のばしょです。ピラニアがいるのでしびあしでいきました。でんきもつけていないからくらかったです。

いよいよターザンロープです。下にはワニがまちかまえていました。おっこちないようにいきました。でも手をすべらせてしまったのでワニにたべられてしまいました。おっこちたせいでおしりがいたくなってしまいました。でも、もういっかいちようせんしました。どうやらワニにたべられないですみました。

(4) 第4学年の教材と指導

中心点が明確になるよう工夫して

————— 経験したことを書く

題材名 「ポートボール大会」

① 目標

- ア. 友達とのポートボール大会を通して、自分自身を見つめ直し、交友関係を深めることができるようにする。
- イ. 書こうとすることの中心が明確になる書き方を考えて、文章を書くことができるようにする。
- ウ. 書き出し文や、様子や気持ちの書き表し方を工夫して書くことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

4年生になると、自己中心的な考え方から抜け、客観的に物を見る目が育ってくる。自我が確立し始め、友達を見る目もより広がりをもってくる。また、仲間意識が芽生え、交友関係を気にしだすようにもなってくる。このような時期に、友達との行動や様子を詳しく書き表していくことは、客観的に物事を見る力を育て、自分自身の物の見方を広げていくことができると考え、本題材を設定した。

日常生活から題材を選んで書くということは、取材が容易で、児童にとって取り組みやすいと考えられがちである。しかし、当り前の事でありすぎるために書きたいことがぼやけてしまう作文になりがちである。そこで、書くことの中心のはっきりした作文にさせるため、「初め」「中」「終わり」の初歩的な文章構成を工夫して書けるようにしていきたい。

また、書き出し文を工夫したり、友達の様子が詳しく表れるように事柄を整理して書いたりすることができるようにさせたいと考える。

イ. 教材の内容と構成

- (ア) 学習の目当てをつかませるための教材は、「2回戦へレッツゴー」という題名のドッジボール大会の出来事を書いた作文を作成した。教材文は、段落構成を意識させるために、「始まる前のこと」「試合中のこと」「終わってからのこと」のまとまりごとに区切って文章を作成した。
- (イ) 書き出し文を工夫させるために、三つの書き出しの書き方を示す教材を作成した。だが、いつ、どうしたから始まるもの、音から始まるもの、会話から始まるものの3例である。
- (ウ) 組み立て表は、教材文に合わせて三つの段落を意識させたものを作成した。

以上の(ア)から教材1, (イ)から教材2の3例を開発した。

③ 学習指導過程(6時間扱い 本時2/6時間)

ア. 教材文を読み, 学習のめあてをつかみ, 学習計画を立てる。

イ. いちばん書き表したい気持ちを組み立て表に書く。 <1時間>

ウ. いろいろな書き出し方があることを知り, 自分の作文の書き出しを書く。

<本時・1時間>

エ. 組み立て表の中の部分に, 友達の動きや様子, 言葉をメモする。

<1時間>

オ. 教材文で様子の書き表し方を学習する。

カ. 組み立て表をもとに文章を書く。

<2時間>

キ. 書いた文章を推敲して読み合う。

<1時間>

④ 本時

ア. 目標

いろいろな書き出し方があることを知り, 今までに書かなかった書き出し方で書き出し文を工夫して書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 教材2を読み, いろいろな書き出しの方法があることを知る。	・ 書き出し方により, 次に続く文章の書き表し方も違ってくことに気付くこと。	・ 書き出しの方法として, 三つの例を知らせる。 「いつ, どこで, どうした」から 音から 会話から
② 今までどういう書き出し方が多かったか思い出す。		・ 今まで書いた作文の書き出しを調べさせる。
③ 今まで書いたことのない書き出しの方法で, ポートボール大会の作文の書き出しを書いてみる。	・ 表現の仕方を参考にして, 自分の表現に生かすこと。	・ 練習ということで, いくつかの方法で書かせてみる。

④ 組み立て表の初めの部分に全体の構成を頭において、書き出し文を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 作文を見通させ、自分の作文にふさわしい書き出し文を選び、メモをさせる。
-------------------------------------	---

ウ. 評価

今まで書かなかった書き出しで、書き出し文を書いてみる事ができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 体育の学習でポートボール大会を行う。

イ. 教材文を読み、学習計画を立てる、いちばん書き表したい気持ちを明らかにする。

できれば、大会後すぐの時間に書かせることが望ましい。時間が経てば経つほど、友達の行動や様子や、自分の感動が薄れていってしまうからである。今回の実践も、雨で予定通りに行かず、書くまでに時間を経てしまい、児童はその時の様子を思い出すのにかなり苦労していた。

ウ. 教材2を読み、書き出し文を書いてみる。

ほとんどの児童が、「いつ、どこで、どうした」の書き出しで今まで書いてきていることが分かった。

練習では会話や音からはいる書き出しで書いていた児童でも、いざ自分の作文を書く時になると、「いつ、どこで、どうした」という書き出しに変えてしまっていた児童が何人か出てきた。作文の題材により、児童の書き出し文になりやすいものとそうでないものがあるように思えた。

実際の作文では、会話から書き出した児童8名、音から書き出した児童4名、時系列から書き出した児童10名、その他が2名であった。

児童が書いた書き出し文の例

「これから水色チーム対黄色チームの試合を始めます。礼。」

タッ、タッ、タッ。秋山君がボールをついています。
 「いくぞ。」
 わたしがそう思った時、秋山君が思いっきりボールを投げてきました。

月曜日の3時間目、ポートボールの試合をしました。

わたしの右ひざに、かさぶたがあります。それは、赤チームと対戦した
 ときに、幸子ちゃんところんだあとなんです。

エ. 書こうとする中心を明らかにする。

書く必要のある事柄を次の観点で選び、メモさせていった。

- (ア) どこの部分を書くか。
- (イ) 誰の行動を中心に書くか。
- (ウ) どんな出来事の順序で書くか。

組み立て表

終わり	な か	初 め
たあとのみんなの様子 終わりのあいさつをし	負けたこと ゴールマンの新田君の様子 キャプテンの動き 大石さんの動き	「これから、黄色チーム 対水色チームの試合を始 めます。礼。」

オ. 組み立て表に従って書き表す。

様子や気持ちの書き表し方を工夫させるため、教材文の友達の様子や動きが書かれている部分に線を引かせた。

カ. 書いた作文を推敲する。

書き出しの工夫ができたか、自分や友達の動きがたくさん書けたか自己評価させた。

⑥ 教材を見直して

書くことの内容を明確にし、書き出しや様子や動きを客観的に見て表現を工夫させることを考えて、ポートボール大会のことは題材としてふさわしいかどうか考えてみた。

大会後すぐに記述できる条件であればねらいは十分達成されることが考えられる。が、今回のように雨が多く何日か前の大会のことで作文を書かねばならない場合も起こることを考えると「わたしの友達」のような友達の紹介文を書かせることも有効ではないかと思えた。おそらく紹介文の方が書き出し文もいろいろな書き表し方で挑戦できるのではと考える。

今回使用した教材1と児童の作文とを比べてみると、会話が多く取り入れられ、友達の様子をできるだけ書こうと努めていたことがうかがえる。中には、教材の表現と非常に似た部分も見られた。ドッジボールと、ポートボールとでは余りに似すぎているきらいもあるが、児童の実態を考え、今回のように教材文を参考にして書かせたことはよかったと思う。

ただ、書き出し文の工夫がもう一息と思われる児童がいたことを考え、教材2にあたる教材（書き出しを工夫しよう）を改めて作成してみた。

と言った。私たちは力強く、
「うん。」
と言った。みんな、目がかがやいていた。

指導後作成した教材

書き出しを工夫しよう

① だが、いつ、ぼくは、木曜日、ドッジボールの試合
どうした をした。

② 時から
きのうの三時間目、ドッジボール大会
があった。

③ 話しことばから 「これから赤対白の試合を始めます。」

④ 音や声から
ビィ、ビィ、ビィー。しんばんがふえ
を鳴らしました。

⑤ 説明から
わたしたち四年二組は、体育の時間ク
ラスを五チームに分けてドッジボールの
試合をしています。

⑥ 思い出から
わたしの右ひざには、かきぶたがあり
ます。それは、きのうのドッジボールの
試合でできたきずあとです。

※ 今までに書いたことのある書き出しの番号に○をつけましょう

※ 今までに書かなかった方法で、組み立て表に書いてみましょう

「ボートボール大会」

「これから、黄色チーム対水色チームの試合を始めます。礼。」

わたしたちは、大きな声で、

「おねがいます。」

と言った。私たち、水色チームは、この間作つた作戦が、みんなにばれてしまい、新しい作戦を作らなければならなかった。でも、もう時間になってしまい、新しい作戦ができなかった。黄色チームは強い。作戦をねらなければ勝てないと思つたのに。と思つていたとき、キャプテンが、

「いちについて、始まるから。」

と言つた。わたしの役は「じゃまもの（じゃまをする人）」です。相手チームのゴールキーパーは、大おかくんだ。私はせが小さいから手のつけようがない。どうしようと思つているときには、

「ピー。」

と始まつていた。仲間の大石さんは、ジャンプボールが取れなかった。相手チームは、もうこっちへ来た。相手チームは、動きがとても速かった。私たちのキャプテンが、

「てつ、とむをマークしろ。」

と言つた。キャプテンは関口くんをマークした。私は、

「みんな、がんばれ。マークちゃんとして。パスして、つないでいかなくちや、勝てないよ。」

キャプテンは少しでもボールを取ろうと、がんばつていた。

「行くよ。大石さん。」

とキャプテンは、思いっきり遠くへボールを投げた。大石さんは、手をいっぱいばして取ろうとしたけれど、強すぎて、取れなかった。新田くんが私たちのゴールマンだけど、なかなかボールが取れない。みんな、心では「がんばれ」と思っているが、あせつてパスができていなかった。全く、いつものちようしがでていない。キャプテンは自分だけでつっぱした。私は、

「だめだよ。パス回して。取られちゃう。」

と言つた。それでも、パスが取られてしまう。やっと私たちは、なんとか一点を入れた。が、時間が足りない。負けると思い始めた。私たちは、しんちようになった。でも、やっぱりマークができていない。相手は、二人コンビでパスし合う。どうしようと思つてきた。

しんばんが、

「十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、試合終了よう。」

と言つた。私たちのチームは、みんなきゆうに力がぬけた。でも、相手は、

「また勝つた。金賞守つたぞ。」

と言つていた。強いチームだけど、負けてくやしかった。みんな、くやしいのをがまんして、

「ありがとうございました。」

と、元気な声で言つた。今度は、ぜったい黄色チームに勝つぞという気持ちで。

キャプテンが、

「今度、守びのれん習をしよう。」

教材 二

書き出し例 一

きのうの四時間目、四年一組のドッジボール大会がありました。

第一試合、ぼくのチームは「ガンバチーム」と戦いました。

試合時間は、一試合五分で、リーグ戦です。四年一組では五つのチームができています。

書き出し例 二

ピィー。試合終了よう。

「やったあ。勝ったぞっ。」

ぼくはとび上がっていました。

チームのみんなが笑いながらかけよってきました。

第一回戦は、勝てたのです。

書き出し例 三

「みんな、ぜったい勝とうね。」

キャプテンの山田さんが大きな声で言った。

作文の勉強

の文章は、どれも書き出しにすることができます。

書き出しによって、はじめの部分の書き方も中の部分の書き方も少しずつちがってきます。

◎ あなたも、書き出しの部分にくふうして、作文を書いてみましょう。



◎ 自分や友だちの動きがよく分かるように書いてみましょう。

◎ 書きおわったら、もう一度読み返しましょう。

字のまちがいは、書き出し文は、

自分や友だちの動きは、

もうないよ。

ちっと心ほいだ。

書き出し文は、

くふうできたよ。

くふうの足りなかりた

たくさん書けたよ。

少し書けたよ。

あまり書けなかったよ。

△資料ページ▽

教材 一

二回戦ヘレッツゴ

○はじまる前のこと

「これから、『けろりん』対『ガンバチーム』のドッジボールの試合を始めます。礼。」

しんばんの山本くんが、きつぱりと言いました。

四年一組のドッジボール大会の始まりです。

○試合中のこと

ぼくは、「けろりんチーム」のキャプテンです。気合を入れるため、

「がんばっていこうぜ。」

と、大きな声でさけびました。小川さんや、山田くんが笑いながらピースをしてくれました。とてもたのしく思えて、ぼくもガッツポーズをしました。

あいてのチームには、クラスでいちばん強いボールを投げる中山君がいます。中山くんは、横目で見ていて、顔の向きとは全くちがう方向へもボールを投げってくるので、ゆだんがなりません。

「気をつける。どっちにくるか、分からないぞ。」

ぼくたちは、ときどき声をかけ合って注意していました。

小川さんたちは、きやあきやあさけびながらボールをよけようと必死です。

「小川さんはボールにせなかを向けるなっ。」
と山田くんが言っています。言いながら、しつかりボールを見えています。

中山くんのボールがこっちへとんできました。ぼくは、ボールを受け止めるために、全しんけいをきんちようさせてかまえました。むねに当たったボールは、いきおいではじかれ、ぼくのうちから落ちてしまいました。

「やったあ。中村くんをやったぞ。」

ガンバチームの喜ぶ声が、大きくひびきます。

いそいで外野に出たけれど、ぼくはくやくしてたまりませんでした。ぼくは大声でよびかけました。

「山田くん。ぼくにボールを回して。」

山田くんはすぐにボールをパスしてくれました。ぼくは中山くんをめがけて、思いっきり強く投げました。

その時ふえが鳴り、しんばんの山本くんの声がひびきました。

「試合終りようです。ならんでください。」

内野の人が、真ん中にならびました。ぼくは、すばやく人数を数えました。

○終わってからのこと

「やったあ。勝ったぞっ。」

ぼくはとび上がりました。山田くんと小川さんがあく手をしていきます。

「よし、つぎは二回戦だ。」

ぼくは、力をこめて言いました。

(5) 第5学年の教材と指導

多面的に見る ――― 経験を振り返って書く

題材名 「とちの木の1年」

① 目標

- ア. 学校のシンボルツリーになって出来事を書くことにより、物事を多面的に見る目を養うことができるようにする。
- イ. 主題や構成のはっきりした文章を書くことができるようにする。
- ウ. 「うれしい」「悲しい」などの直接的な表現を使わずに様子や気持ちを書き表すことができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

5年生になってくると、児童は、自分の意識や直接的、間接的経験を反省し、客観的に自分を見つめることができるようになってくる。そこで、児童の成長に合わせ、シンボルツリーのとちの木の「目」と「耳」になって書かれた教師作成の教材文を用い、物事を多面的に見つめる目を養いたいと考えた。1年間の出来事の中から最も心に残る出来事（つらかったこと、悲しかったことなどマイナスの思い出）を選びださせ、第三者の立場から物語創りをさせていき、客観的に物事を見つめさせていく。このことにより児童に、現在抱えているさまざまな出来事についても見方を変えて対処していく態度を持たせることができると考える。

また、「うれしい」「悲しい」などの直接的な表現を使わずに様子や気持ちを書き表す工夫をさせ、豊かに表現する力も身に付けさせたいと考える。

イ. 教材の内容

- (ア) 教材化するにあたっては、学級で起こった、友達同士のトラブルの中から、どの子にも起こりうる出来事、共感を呼ぶことのできる出来事を選び、教材文の題材にしていく。選んだ題材をもとに、第三者的立場であるとちの木（学校にあるシンボルツリーあるいはそれに代わるもの）が目にしたたり耳にしたたりした子ども（自分）を主人公にした教材文を作成する。
- (イ) 出来事は、叱られたり非難されたりしたマイナス面の事象を取り上げることにし、もし自分だったらどんなにか「悲しい」「悔しい」思いになるか、強く心情に訴える内容にする。児童が作文の題材を選ぶとき、マイナス面の事象の方が、心に様々な傷を残して、自分自身のその時の心情を思い出しやすいこと、また、客観的になって再び自分を見つめ直した

ときに、それまでの自分を中心に見ていた見方とは全く違った見方ができ、見え方の開きが大きいことになる。つまり、そのことは、多面的に物事を見ることの大切さを容易に児童に実感させることができることになる。

(ウ) 「悲しい」「うれしい」などの言葉を使わないで様子や気持ちを書き表すための練習用の例文を作成する。

ウ. 教材文の構成

取材、構成、記述などすべての過程で使えるような文章構成を工夫した。そのために次に示す3点(ア)～(ウ)に配慮した。

(ア) 主題をはっきりさせるため、学校生活の中での悲しかったり悔しかったりした出来事に目を向けさせて題材を選んだ。

(イ) 構成に気付かせるため、季節、時間の移り変わりや、場面を明確にして、文章構成を工夫した。

(ウ) とちの木が見ていたという設定で、登場人物の姿や聞こえた言葉を「うれしい」「悲しい」「悔しい」などの直接的表現を使わないで書いた。

以上の(ア)・(イ)の観点から、教材を開発した。(ウ)については練習のための例文①～③を作成した。(本章資料ページ)

③ 学習指導過程（6時間扱い 本時3/6時間）

ア. 1年間を振り返り、つらかったり、悲しかったり、悔しかったりした経験を話し合い、出来事を書き出す。

イ. 教材1を読み、学習のねらい（事実をもとに、物語創りをする事）を知り、出来事の中から作文の題材を選ぶ。 <1時間>

ウ. 教材文を読み、書き表し方（第三者の目で表現すること、登場人物の気持ちは自分の経験した気持ちを書くこと）を考え、物語の設定（時、場所、登場人物）をし、構想表を書く。 <1時間>

エ. 構想表を見通し、構成を考える。

オ. 「例文」①～③のアとイを比較させる。自分の構想表の「悲しい」「うれしい」「悔しい」等の直接的な表現を書き直させる。 <本時・1時間>

カ. 構想表をもとに、表現を工夫して作文を書く。 <2時間>

キ. 友達と作文を読み合い、主題がよく伝わるよう表現を推敲する。 <1時間>

④ 本時

ア. 目標

構想表を見通し、「悲しい」「うれしい」などの直接的な表現を使わないで、物語の粗筋を考えることができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① 構想表を見通し、物語の筋を考える。	・ 構成を考え、書き表す順に構想表に番号を付けること。	・ 書く必要のない事柄は（ ）でくくらせる。
② 主題を考えて、構想表の中の、特に詳しく書き表す部分を明らかにする。	・ 書こうとすることの中心点を明確にすること。	・ 前時までに作成した自分の構想表を見て、一番書き表したい部分に赤で囲みを入れさせる。
③ 例文を参考にして構想表の囲みを入れた部分の書き表し方を工夫する。	・ 「うれしい」「悲しい」を使わずに、様子や気持ちを書き表すこと。	・ 書き表し方の分からない子にはとちの木にはどういふふうに見えたかを考えさせる。

ウ. 評価

主題を押さえて物語の粗筋を考え、いちばん書き表したい部分について表現を工夫することができたか。

⑤ 学習活動の実際

ア. 今までの経験の中から、悲しかったり悔しかったりした経験を想起させる。

話し合いをしながら、自分の経験をメモさせていった。

イ. 出来事の中から、物語創りの材料になるものを一つ選ばせる。

嫌な思い出だから書きたくないという児童、人に読まれたら嫌だという児童など、反応は余り良くない。そこで、教材1を読ませ、自分を第三者に置き換え、その時の気持ちを参考に物語創りをすることの意義について指導した。目当てをはっきりさせたことで、児童の意欲が高まり、進んでその時のことを思い出し、メモを取っていた。

ウ. 主題をはっきりさせ、物語の設定（時、場所、登場人物）を考え、構想表を書く。

エ. 構想表を見通し、書く必要のある事柄を選び、書き表す順に番号を付ける。

本時では、まず、構想表のメモを次の観点で見直し、必要のないメモは（ ）でくくらせた。

- (ア) 主題に結び付いているか。
 (イ) 主題を考えたときに書く必要のあることか。

次に、残ったメモの出来事の上に、構成を考えて、書き表したい順に番号を付けさせた。

オ. 「うれしい」「悲しい」等の直接的な表現を使わないで気持ちを書き表す。

初めに、例文①～③を読ませ、表現の工夫について理解させた。次に、主題に結び付く気持ちの部分の部分を赤で囲ませ、例文を参考にさせて、「うれしい」「悲しい」を使わないで気持ちを書き表す工夫をさせた。

カ. 構想表をもとに、記述する。

児童の書いた構想表の例

登場人物	場所	時(季節)
龍一君・友達・先生	体育館・校庭	夏

設定

主題

くやしさをはねかえして、来年がんばろうと心に決めた龍一君。

プールでガラスをふんでしまい、野球大会に出場できなくなってしまった。

出来事

観望表

6	5	3	2	1
<p>お母さんがおやつをくれた。 来年がんばるぞと思った。</p>	<p>野球大会に出られなくなった。</p>	<p>病院へ行った。</p>	<p>保健室へ行った。</p>	<p>あらずじ (場面・出来事)</p>
<p>おいしいそうにケーキを食べる 龍一君 明るい顔で登校する龍一君。</p>	<p>がっかりする龍一君。</p>	<p>ベッドの上になかされて、きず口をぬわれる龍一君。</p>	<p>足のきずはかなり深かった。</p>	<p>とちの木は、だれのどんな様子を目にしただろう。</p>
<p>「残念ね。でも、仕方ないね。」 かんとくの言葉 「もつと力をつけて、来年はいつきにゆう勝をねらおう。」</p>	<p>友達の励ます声 キャッチボールの音</p>	<p>「ブルーン、ブルン」バイクの音 お医者さんの言葉</p>	<p>先生との会話 先生との会話 先生との会話</p>	<p>とちの木は、どんな会話や何の音を聞いただろう。</p>

⑥ 教材を見直して

教材を使って、学習のねらいをつかませていくためには、教材文は、より多くの児童に、共感的に受け入れられるものであることが望ましいと考える。そこで、新たな教材を作成し、資料の最後に載せておく。

例文①～③は、表現の工夫について、児童に具体的に示すことができ、効果的であった。

しいんだって。おそくたって、岸さんの良さはなくならないんだもの。自分のタイムを何秒ちぢめられるかが、大事だって。あたしなんて、四年の時よりタイム落ちてるのよ。由紀ちゃんは、毎朝マラソンしてるんだって。今度私たちもやってみようよ。」

岸さんはそれを聞いて思った。

（そうか。中本君にあんなふうに言われたけれど、人と比べて速いおそいではないのだ。自分のタイムをどれだけちぢめられるかが大事なのだ。わたしもがんばってみよう。）

「岸さん、落ち着いて走ってね。相手は自分よ。」

スタート前、はげましていた石川さんの言葉が岸さんの耳に聞こえてきた。

（カーブでぬけなければ負ける。今日まで、がんばったんだ。ここであきらめてたらいけない。）

岸さんの全身にエンジンがかかった。

（体をかたむける。かかとをうかせっ。敵は自分だ。自分に負けるな。）

岸さんは心の中で言っていた。

直線に入った。岸さんは全力で走っていた。ゴール前で、ぐっと力を入れた。ゴールのテープに岸さんの体がふれた。ゴールの線をふんだ。

岸さんの心ぞうが、満足だよというように、ごっ、ごっ、と鳴っていた。二位になった岸さんを見て、石川さんもすぐくうれしそうだった。

（友だちってなんていいもんだらう。）
岸さんはそう思っていた。

「足がふるえてますね。ちゃんとおさえていてください。」
またもう一本、ますいを打った。そして、知らぬまにぬい
合わされていた。

「もういいですよ。」

と、土屋先生は言った。やっと終わった。

この日は、午後、野球大会が予定されていた。龍一君は
卒業した先ばいに代わって、この日初めてピッチャーで出
場するはずだった。だから、この日のために、日曜日も早
朝練習をつんでがんばってきたのに、野球大会に出られな
い。

みんなから、

「出ろよな。おまえが出ないと負けちゃうだろ。」

とかいろいろ言われた。龍一君は、下を向いて、

「足、けがしてるから。お医者さんにも止められているか
ら。」

と言った。本当はだれよりも出たかった。プールサイドに
ガラスさえ落ちていなくなったら、ヒーローになっていたか
もしれないのに。

龍一君は、歯をくいしばりながら、次の日も、その次の
日も土屋医院へ通った。

ある日、かんとくがやってきて、

「具合はどうだい。お前がいても、今年はずは勝てなか
ったよ。一からみんなをさげして、来年は、くつじよくを
果たすぞ。お前ももっと力をつけて、いつきにゆう勝をね
らおう。」

と言った。

(そうか、そんなに相手は強かったのか。よろし、治ったら、す
ぐに練習するぞ。来年の野球大会は、二年分の力を出すぞ。)
龍一君は、うでを回しながらつぶやいた。

指導後作成した教材文

「連合運動会」

「パンツ。」

ピストルの合図があった。ほんの少しだが、岸さんはみんなから、
出してくれた。きんちようしていたからかどうかは分からない。

「しまった。」と思うと同時に「負けたくない。」という気持ち
が岸さんの体の中にわいてきた。

足のおそい岸さんは、運動会の三週間も前から、毎朝家の周り
を走っていた。実は、こんなことがあったからだ。

百メートル走の組み合わせを決めるために、タイムを計ること
になっていたある日、岸さんは、いっしょに走った山田さんに、
大はばにおくれてゴールした。

「真剣に走れよ、のろいなあ。まあ、ダンプじゃあ、仕方ないっ
てどこか。」

と、中本君に言われたのだ。岸さんは、やっぱり言われてしまっ
たと思ったら、なぜかだまっていられなくて、

「分かってるんだから、そんなこと言わなくてもいいでしょう。」
と、泣いてしまった。その時、親友の石川さんがこう言っ
て岸さんをなぐさめた。

「先生が言ってたじゃない。いろいろな子がいるから世の中は楽

「本当は仲がいいんだよ。けんかするほど仲がいいって言うからね。」
とみんなから言われている。

例文……「悲しい」「うれしい」を使わないで

様子や気持ちを書き表そう

①

ア 「なんでこんなことになってしまったんだろう。」
まもるは、悲しそうに言った。

イ 「なんでこんなことになってしまったんだろう。」
じつと地面をみつめていたまもるは、半分泣ききそをかきながら、弱々しい声で言った。

②

ア 幸子は、うれしそうに掛けていった。

イ 幸子は、にこっと笑顔を見せたかと思うと一目散に掛けていった。

③

ア けんたは、くやしかったがまんをした。

イ 健太は、にぎったこぶしをぶるぶるわせてじつと相手をにらみつけていた。

作品

「がまんする力」

十月九日。今日はプール開きだ。三時間目がきた。タオルを置いて、プールサイドを歩いていたら、

「バリッ。」

と音がした。龍一君は気がつかない。健二君が、

「龍一君、血が出てるよ。」

と言った。龍一君は、

「あれっ、いつの間に。小川先生。」

とさげんだ。プールサイドに落ちていたガラスをふんでしまったのだ。先生がやってきて、

「どうしたの。あら、血が出てる。保健室へ行ったらっしょい。」
と言った。武井先生におぶわれて龍一君は保健室へ行った。

松山先生が龍一君の足を見て目を丸くした。

「どこで切ったの。きずが深いわね。君は、いつもどこの病院へ行っているのかしら。」

「土屋医院へ行っています。」

「ああ、あそこね。じゃあ、タクシーで行きましょう。」

土屋医院へ着いた。しんさつが始まると、松山先生が聞いた。

「どんな様子ですか。」

「一はりぬいめますので、そこにねかせてください。」

龍一君が横になると、注しや器を持った先生が松山先生に言った。

「足をおさえていただけますか。」

龍一君はびっくりして、足をふるわせた。一本目の注しやをする。

△資料ページ (教材) △

「雪の日」

五年二組の健太君は、入学してから一度も学校を休んだことのない、元気な男の子だ。じっとしていることが苦手で、家庭科や図工のような、細かな作業が大きらいだ。

今年の一月、東京にはめずらしい大雪が降った日だった。学校へ来るとちゅう、健太君は雪のボールを作った。それを教室のつくえの下にそっと置いておいて思った。

「こいつをけずって、まゆみの背中に入れたらおもしろいぞ。」

勉強が始まって雪のことが気になって、下ばかり向いていたものだから、とうとう先生に見つかってしまった。

「健太君、教室に雪を持ち込んではいけません。勉強のじやまでしょ。あれっ。教科書はどうしたのですか。忘れたときにはとなりのまゆみさんにかりるんでしょ。」

まゆみの冷たいし線を感じながら、健太君はつくえの下から雪のボールを取り出した。まどを開けて、それを思いっきりとちの木に向かって投げた。

「ちっ、はずれた。早く外へ出たいなあ。まゆみはよくこんな日に落ち着いて勉強なんかしてられるなあ。」

せ中で、先生の声があった。

「健太君、早く着席しなさい。さっきからあなたは三回も名前を呼ばれていますよ。」

席にもどると、まゆみが小声で言った。

「健太君のせいで、先生をおこらせたのよ。少しは五年生らしく先生の話を聞いたらどうなの。」

「ブリッ子。おまえだって雪のことが気になるくせに。」

「何よ。教科書見せてあげてるのに大きな顔しないでよ。」

健太君の目がつり上がる、まゆみの頭を筆箱でたたいた。

「いたいっ。何するのよ。」

(わざと大きな声を出しやがって。)

先生が、こわい顔でちよっとこちらを見た。

やっとのことで休み時間になった。

校庭は、全校児童のはしゃぐ声でいっぱいだった。

五年生は一組対二組で雪がっ戦をしていた。

「一組の男子がすごく固めたボールを投げてきたから、島田さんの目に当たって泣いちゃった。健太君、一組に注意してきてよ、お願い。ひどいわ。先生が顔に当てちゃいけないって言っていたのに。」

まゆみが、口をとがらせて言った。ついさっきまで、健太君とけんかしていたはずなのに。

「いやだって言おうかな。でも、こうしてたのみにくるなんて、やっぱりたよりにされているのかな。意外とかわいいなあ。」

「よし、待っているよ。おれが言ってきたやる。」

「健太君、ありがとう。さっきはごめんね。」

いやにすなおなまゆみに、健太君はちよっぴり人間が大きくなつた気分だった。

今でも、時々まゆみと口げんかする健太君だけれど、

(6) 第6学年の教材と指導

豊かに想像して ————— 創作

題材名 「2010年への旅」

—20年後（□年後）の自分の生活ぶりを想像して文章に表現する—

① 目標

- ア. 20年後（□年後）の自分の姿や生活ぶりを想像して作文に書くことにより、自分の将来に対する希望を持つと共に、文章表現に対する興味・関心を持つことができるようにする。
- イ. 文章の組み立ての効果を考え、場面の情景描写を工夫して書くことができるようにする。
- ウ. 自分の書いた文章を読み返し、効果的な叙述の仕方について工夫することができるようにする。

② 題材設定の理由と取り扱った教材

ア. 題材設定の理由

6年生の後半ともなれば、卒業という形の新しいスタートを目前に控えることになる。卒業とは、新しい生活への第一歩であると共に、これまで安住してきた小学校生活との決別の時でもある。中学校生活という未知なる世界にとびこまなければならない不安もある。このような時期にこそ将来に対する夢や希望をふくらませるような機会を設定したいと考えた。

ところで、本学級には、女子を中心に書くことに抵抗のない児童が少なくない。しかし、男子の一部には説明的な文章は抵抗なく書けるが、情意的な文章を書くときには鉛筆が進みにくいという児童もいる。

そこで、将来の自分の姿を自由に想像して情景のイメージをふくらませ、場面の描写をしながらか楽しく作文を書かせたいと考えた。将来に対する希望を持たせ、作文に対する関心・意欲や描写の力を養うと共に、児童の想像をふくらませたいと考えこの題材を設定した。

イ. 教材の内容と構成

将来に対する夢や希望をふくらませ、情景の描写を工夫させるためには、楽しくイメージをふくらませることができるような教材が必要である。このような観点から次のような教材を準備した。

(ア) 児童の夢をふくらませ、書く意欲につながるような教材文

教材文は教師が自作した。教材文を作るときには次のことに留意した。

- ・ 児童にとって、将来はこうありたいと願う理想の場面を書くことによって、児童の想像力をふくらませ、書く意欲につながるような内容にする。

- ・ 児童の参考になる書き出しにする。
- ・ 文章構成の参考になるようにする。
- ・ ねらいや児童の実態に即した文字数にする。
- ・ 描写の例（会話、状況、色、音、におい、表情など）を示す。

以上の観点から、教材文1と教材文2を自作した。（本章資料ページ参照）

教材文2は、教材文1の文章構成を替えただけのものである。書き出しによって文章の感じが異なることを示し、様々な書き出しや文章構成を工夫させることをねらって準備した。

なお、教材文2はワープロの「入れ替え」の機能を使って楽に作ることができた。

(イ) 教材文以外の教材「□年後へのパスポート」（詳細は「⑤ 学習指導の実際」を参照）

児童が、自由に想像したことや自分の夢をメモしておくカードである。児童の意欲を高めるために、「□年後へのパスポート」という名称にし、次のことを記入できるようにした。

- ・ 写真（「パスポート」に貼る写真という想定で、□年後の自分の姿を想像して書いた絵）
- ・ 名前（芸名でもよいことにした）
- ・ 国籍（作文を書くのに都合のよい国籍や自分の好きな国籍にしてもよいことにした）
- ・ 生年月日
- ・ 性別
- ・ 職業

なお、何年後の自分を想像するかについては、20年後を基準とするが、これにこだわる必要はなく、児童の自由に任せることにした。

「□年後へのパスポート」は色画用紙で作成した。メモをする欄には「写真（PICTURE）」「名前（NAME）」のように、かっこ書きで英単語を入れるとともに、表紙には「PASSPORT」「日本国〇〇小学校」の文字を入れ、パスポートの雰囲気を出した。

色画用紙は二つ折にして活用させた。

③ 学習指導過程（7時間扱い 本時3/7時間）

- ア. □年後の自分について、1200字程度の作文を書くという目当てを知り、各自の夢や将来の姿について自由に想像し発表し合う。〈1時間〉
- イ. □年後の自分について、環境・職業・様子・友人・考えていること・状況・会話などについて自由に想像し、メモをする。〈本時・1時間〉
- ウ. 全体を見通して文章構成を考え、書き出しの工夫をする。〈1時間〉
- エ. 場面の描写を工夫して記述する。〈2時間〉
- オ. 自分の書いた文章を読み返して描写を中心に効果的な叙述という観点から推こうし、冊子

にまとめるために清書する。

〈2時間〉

④ 本時

ア. 目標 文章に書く材料を集めるために、□年後の自分の姿を自由に想像して絵やメモを書くことができる。

イ. 展開

学 習 活 動	指 導 事 項	指 導 上 の 留 意 点
① □年後の、どのような自分について書くかを考える。	<ul style="list-style-type: none"> 文章の場面設定について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> □年後と正確な時を設定するのではなく、どのような場面を取り上げたいかを自由に考えさせるようにする。
② 取材の項目にしたがってパスポートに記入する。	<ul style="list-style-type: none"> 主人公（自分）についての状況などを設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「芸名も可能とする名前」「作文を書くのに都合のよい国籍」「職業」などを自由に記入させ、想像をふくらませるようにする。 ライバルや友人なども想像させる。 夢につながるような助言をする。 例 甲子園に出場して野球のプロに入団するとしたら7年後になる。など 一人一人に適した夢を助言する。
③ パスポートに貼る絵を書く。	<ul style="list-style-type: none"> 主人公（自分）や場面について想像を広げること。 	<ul style="list-style-type: none"> はなやかな場面を思い浮かべ、想像を広げることができるようにする。 ファッションモデルや野球選手の絵を黒板に掲示し、次のことなどについて自由に話し合わせる。 ユニフォームやドレスなどの色 人物の表情 光線や観客の歓声などの舞台の状況 会場にただよう香りなど 机間指導 はなやかな場面を設定できるように助言する。
④ 教材文1を読む。	<ul style="list-style-type: none"> 自分の夢の中から文章に書くことを焦点化すること。 	<ul style="list-style-type: none"> 一番はなやかで盛り上がった部分を取り上げ、1200字以内で書くことを説明する。

ウ. 評価 □年後の自分の姿を想像して、絵やメモを書くことができたか。

⑤ 学習指導の実際

ア. 自分の夢を想像し、場面の設定をすることについて

□年後の自分の姿を自由に想像させたところ、児童全員が自分なりの夢をもとに場面を設定することができた。職業としては、男子は野球選手、女子はバレーボールの選手が多かった。中には、建設会社の社長や出版社の折り紙の本の編集長などユニークなものもあった。また、医者になり恵まれない人々の役に立つという夢を描いた児童もいた。職業にとどまらず、パカンスに出かけているところやクルーザーで太平洋に釣りにきた場面などの様々な夢も出された。自分なりの夢を思い描けない場合、その子にとって一番いいと思われるものをアドバイスする準備もしておいたが、その必要はなかった。「□年後へのパスポート」という教材を準備したことや、話し合いをさせたことは、児童の想像や夢をふくらませる上で効果があった。この夢は、未来の自分の姿を想像して絵を書くとき最高にふくらんだ。一人一人の児童が「パスポート」に貼る写真という設定で、3～4枚程度の絵を書いたのだ。なお、児童にはなるべくはなやかな職業や場面を設定するように呼びかけた。そのほうが想像を広げやすく、また描写がしやすいと考えたからだ。

イ. 文章の叙述について

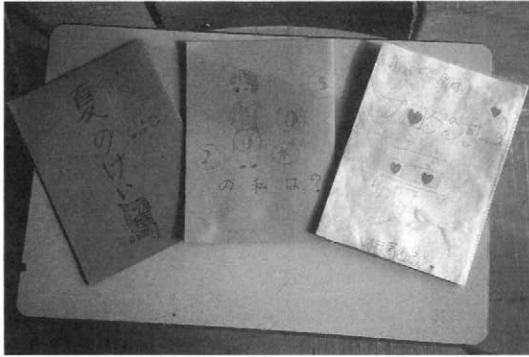
文章は1200字以内で書くという一定の制限を設けた。今回のように自由に創作して文章を書く活動には、ほとんどの児童が喜んで取り組む。しかし、量ばかりが多くなり、だらだらした文章になる可能性がある。また、情景描写より筋の展開中心の文章になってしまうおそれもある。その典型は文章中にナレーターを登場させ、ナレーターの解説によってストーリーだけを展開させてしまうのである。そこで、1200字以内という制限を設けて記述させたところ、ほとんどの児童が焦点をしぼって書くことができた。

また、情景描写をさせるために次の指導をしたところ効果があった。

- ・ 教材文の描写の部分に注目させ、自分の書く文章にも描写を取り入れるようにする。
- ・ 記述前に話し合いなどを通して、会話や様子などに関する想像をふくらませるようにする。
- ・ 様子については、表情・色・におい・音・手触りなどの感触を交えて記述する。

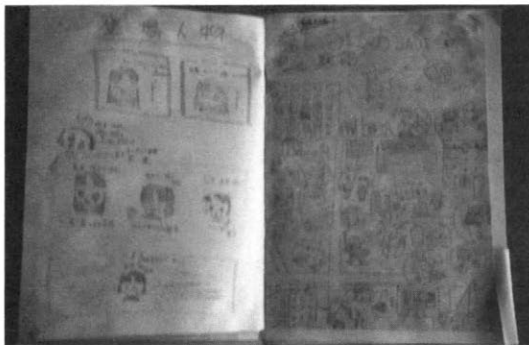
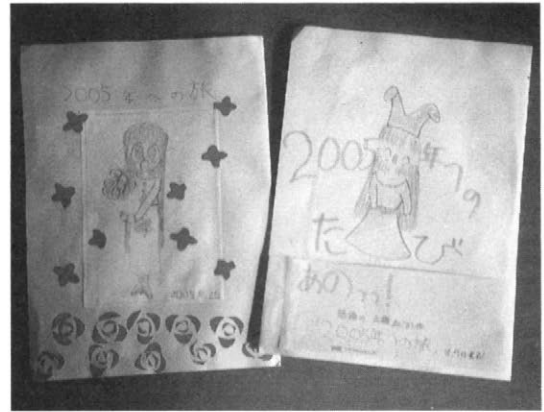
ウ. 清書

児童にとって気に入った作品は要求しなくてもいねいに書き直そうとする。今回の学習でも、書き終えた児童は自主的に清書をしたり、パスポートに貼る写真という名目で書いた何枚かの絵を文章の中に貼りこんだりした。また、多くの女子がリボンやきれいな包装紙で装飾したりして意欲的に装丁に取り組んだ。このことから、児童にとって成就感があり、その作品を宝物であると思えるような作業をさせることが大切であると感じた。



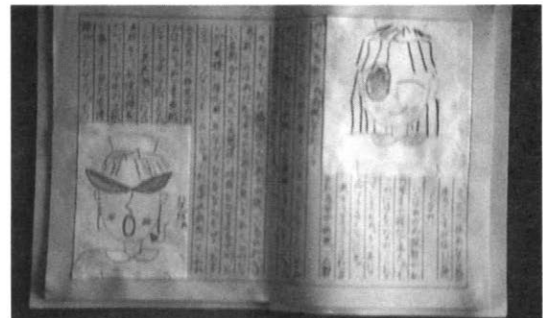
きれいに装丁された児童作品

「パスポート用の写真」という想定で書いた絵を表紙に貼ったり表紙に帯をつけたりした作品



扉の部分もきれいに装丁した

「パスポート用の写真」という想定で書いた絵を挿絵として本文に貼った作品



△資料「ペーゾ」△

教材 一

二十十五年十一月。わたしがあこがれのプロバスケットボールの選手になって三年目。わたしは、レッド・ホークスのキャプテンで得点王。そしてあの人、西くみさんは、ブルー・シャークスの得点王。わたしは最大のライバルなのだ。去年は決勝戦でブルー・シャークスに負けた。今年こそゆう勝するために、あの苦しい練習にたえてきたのだ。何とか勝ちたい、そして初ゆう勝をかざりたい。

前半が終わった時は、四十五対三十。

「これでいける。」

「このままリード。がんばろう。」

と、わたしはさげすび合った。

その時わたしは油断してしまったのだ。後半になって相手はじりじりと追い付いてきた。そして終了まぎわの今、よりによってわたしのライバル西さんが逆転シュートを決めたのだ。

「もうだめだ。」

そう思った。こんなところでシュートを決められるなんて。これで得点は、八十六対八十四になった。勝った方がゆう勝だというのに。残り時間はたったの八秒しかない。ワンゴール差がわたしたちに重くのしかかる。

わたしたちは立っているのがやっとというほどつかれてきた。ランニングはあせでびっしりになってきた。十一

月だというのに体育館の中は真夏のようなむし暑さだ。味方のサキからすばやいバスがきた。ブルー・シャークスの一長身の人がいる。身長が一メートル九十もあるという人だ。青いユニホームが目の前に立ちふさがる。わたしは赤いユニホームでぶつかって行く。わたしはその人のわきをくぐりぬけた。あつ、今度は西さんがきた。この人のぼうぎよはずごいんだ。わたしのバスケットシューズがキュッキュツとすごい音をたてる。右に左にゆさぶりをかけるが西さんはびったりついてくる。残り時間三秒、二秒。いっしゅんのすきができた。わたしは思いっきりジャンプしてシュートをした。ロングシュートだ。ボールがゆっくりとゴールに近づいていく。入れ、入って！ まるで時間がとまったような気がした。赤と青のユニホームが全員つつ立ったままボールのゆくえを見守っている。

ばっ。ボールがゴールにすいこまれた。入った。スリーポイントシュートだ。逆転だ。初ゆう勝だ。サキが、えりが、わたしにだきついてきた。西さんががっくりしてゆかの上にひざをついている。体育館の中はものすごいくしゅとかんせいだ。わたしは思いっきりガッツポーズをした。

ゆう勝カップはずっしり重かった。

教材 二

「もうだめだ。」

そう思った。こんなところでシュートを決められるなんてこれで得点は、八十六対八十四になった。勝った方がゆう勝だというのに。残り時間はたったの八秒しかない。ワンゴール差がわたしたちに重くのしかかる。

二十五年十一月。わたしがあこがれのプロバスケットボールの選手になって三年目。わたしは、レッド・ホークスのキャプテンで得点王。そしてあの人、西くみさんは、ブルー・シャークスの得点王。わたしたちは最大のライバルなのだ。去年は決勝戦でブルー・シャークスに負けた。今年こそゆう勝するために、あの苦しい練習にたえてきたのだ。何とか勝ちたい、そして初ゆう勝をかざりたい。

前半が終わった時は、四十五対三十。

「これでいける。」

「このままリード。がんばろう。」

と、わたしたちはさげび合った。

その時わたしたちは油断してしまったのだ。後半になって相手はじりじりと追いついてきた。そして終了まぎわの今、よりによってわたしのライバル西さんが逆転シュートを決めたのだ。

わたしたちは立っているのがやっとというほどつかれていた。ランニングはあせでびっしょりになっていた。十一月だというのに体育館の中は真夏のようなむし暑さだ。味方のサキからすばやいパスがきた。ブルー・シャークス一

の長身の人がある。身長が一メートル九十もあるという人だ。青いユニホームが目の前に立ちふさがる。わたしは赤いユニホームでぶつかっていく。わたしはその人のわきをくぐりぬけた。あっ、今度は西さんがきた。この人のぼうぎよはすごいんだ。わたしのバスケットシューズがキュッキュツとすごい音をたてる。右に左にゆさぶりをかけるが西さんはびったりついてくる。残り時間三秒、二秒。いっしゅんのすきができた。わたしは思いつきりジャンプしてシュートをした。ロングシュートだ。ボールがゆっくりとゴールに近づいていく。入れ、入って！ まるで時間がとまったような気がした。赤と青のユニホームが全員つつ立ったままボールのゆくえを見守っている。

ばっ。ボールがゴールにすいこまれた。入った。スリーポイントシュートだ。逆転だ。初ゆう勝だ。サキが、えりが、わたしにだきついてきた。西さんががっくりしてゆかの上にひざをついている。体育館の中はものすごいはくしゅとかんせいだ。わたしは思いつきりガッツポーズをした。

ゆう勝カップはずっしり重かった。

児童作品

十月二十八日、ヤクルトスワローズ対西武ライオンズの日本シリーズ。西武球場での最終戦。

「三回から七対四ヤクルトのリードです。照明の明かりも強くなった九回裏、二死満塁のバッター馬場、今日の成績は、三打数の三安打で当たっています。」

「よし、打つぞ。」

とぼくは気合を入れた。その時、

「ヤクルトスワローズのピッチャー交たい。ピッチャー川田。」

とアナウンスが流れた。流れ終わったと同時に、観客の応援がはげしくなった。この川田は、ぼくと同級生でセ・リーグの最多勝利投手。ぼくの最大のライバルだ。川田は最終回だけあつてきびしい顔をしていた。

投球練習を終わりに、ぼくはバッターボックスに向かった。川田はゆっくりモーションに入り、ものすごい球を投げた。一球目ストライク。二、三球と内角低めのボール。四球目フォークボールだ。ぼくは、むりやりバットをふったがファールだった。とうとうおいつめられた。ぼくの顔にたくさんのひや汗が流れた。五球目外角低め、ぼくの一、番苦手なコースだ。

「ズバン。」

キャッチャーミットに入ると同時にものすごい音がした。

「ボール。」

しん判が大きな声で言った。助かった、とぼくは思った。最後の一球、ぼくはタイムを取った。かんとくから、

「思いっきりやってこい。」

と指示が出た。ぼくはおちついてすぶりを始めた。つかれているためか、ぼくの思い通りにはバットがふれなかった。ぼくは川田の球についていこうとバットを短く持ってバッターボックスにふたたび向かった。川田はだいたいぶおちついてるみたいでよゆうの顔つきでいた。そして、急にきびしい顔になり最後の球をふりかぶって投げてきた。川田の得意球のカーブだ。川田のカーブはぼくの目の前で、ぐぐっと大きく曲がった。ぼくは負けないと体ごとついていった。うまくバットにあたった。しかし、川田の球は重く手にじーんと伝わってきた。力をふりしぼってふりおくれはしながらも打った。ボールはどんだん飛んでライトスタンドの上の方にボールが入った。逆転さよなら満塁のホームランだ。

ぼくはガッツポーズをしながらダイヤモンドを回った。ホームベースの所で西武ライオンズのみんなが、ぼくを手あらくむかえてくれた。ふり返ってみると川田が来て、

「ゆう勝おめでとう。」

と言って帰っていった。